第2回
慶應義塾大学医療系三学部合同特別実習
稚内市地域診断報告書
3-4班（南地区）

実習期間
2024年8月19日(月)～8月31日(土)

メンバー(4班)
医学部4年 髙橋伶奈
医学部3年 牧野界人
医学部1年 出口智子
薬学部4年 廣瀬莉帆
看護医療学部4年 佐藤磨依
看護医療学部3年 木戸なつみ
ファシリテーター
看護医療学部2年 吉田光翔

目次

1.事前準備.....3

2.実習のスケジュール.....9

3.各訪問先の調査結果と学び
3-1 ひかり町内会.....12
3-2 本間正博様.....16
3-3 教育相談所.....17
3-4 教育委員会教育部子ども課.....19
3-5 中澤和一様.....21
3-6 佐藤忠男様.....22
3-7 横田耕一様.....26
3-8 クリニックはぐ.....28
3-9 南稚内クリニック.....29
3-10 きらきら保育園.....31
3-11 稚内市立病院.....35
3-12 西條稚内店.....37
3-13 稚内市立稚内南中学校.....38
3-14 北海道稚内高等学校衛生看護科.....41
3-15 成田功様.....41
3-16 稚内港小学校.....47
3-17 飯田爽様.....52
3-18 声問小学校.....53

4.フィールドワークで学んだことと考察.....53

5.発表準備の進め方.....63

6.アクションプラン
6-1 ジョブフェア・職業体験の充実.....64
6-2 子供たちによる健康教室 65
6-3 全世代の市民が稚内市の魅力を再発見する.....68

7.発表スライド.....65

8.今後への課題・さらに調べたかったこと.....77

9.各参加者の学び.....77

10.謝辞.....79

1. 事前準備

【目的】既存の情報を収集・分析し、地域特有の問題や健康問題を特定する。
特定した問題の原因について仮説を設定し、現地での行動に繋げる。

【スケジュール】

日程	形式	概要
6/2 20:00	zoom	自己紹介
6/21 21:45	zoom（全班で）	去年の活動内容・稚内の街について説明　地区診断のながっれ
6/27-6/29	lineノート機能	南地区の情報収集項目の列挙
7/1	line	CAPモデルに基づいた情報収集項目の役割分担
7/1-7/10	Google Drive	各自情報収集
7/10　21:00	zoom	第一回情報共有、地域mtgや現地で伺いたいことやインタビュー先を考える
7/13 17:00	対面（信濃町キャンパスPBLルームA2）	仮説や大まかなインタビュー内容の決定
7/19 21:00	zoom	地域mtgに向けて仮説の整理
7/21 10:00	zoom（宗谷友の会の飯田光様）	地域mtg（インタビュー先の決定、アンケート実施の相談）
7/21-7/23	lineノート機能	小中学校、保育園、西條、教育委員会子ども課への質問内容の案出し
7/23-7/24	Google Drive	小中学校、保育園、西條、教育委員会子ども課への質問項目PDF化
8/1-8/25	回覧板	ひかり町内会にてアンケート調査開始
8/3-8/4	line ノート機能	南稚内クリニック、子ども課、南中学校、教育相談所、横田耕一様、佐藤忠男様、中沢和一様、成田功様への質問項目の案出し

8/4-8/6 11:00	line	南稚内クリニック、子ども課、南中学校、教育相談所、横田耕一様、佐藤忠男様、中沢和一様、成田功様への質問意図と質問内容の整理
8/12 10:00	zoom	進捗状況確認、南稚内クリニックのアンケートと港小学校のGoogleアンケートの作成、インタビュー内容の案出し
8/13 21:00	zoom、Google ドキュメント	現地でのスケジュール確認
8/13-8/15	Google ドキュメント	細かいインタビュー内容の作成
8/14 21:00	zoom	フィールドワークの場所や見たい内容の整理
8/15 21:00	zoom	インタビュー内容の確認・補填、港小学校での講演の準備開始
8/17 21:00	zoom	スケジュール確認、訪問人数の確定
8/17-8/18	各自	アンケート用紙の印刷

【仮説立案】

我々は、事前調査で得た情報を基に、5つの仮設を設定した。以下の5つである。

仮説A「南地区の医療体制は不十分ではないか」
仮説B「南地区の住民の生活習慣を改善すべきではないか」
仮説C「こどもの将来の就職が難しいのではないか」
仮説D「南地区は衰退していて、改善が必要なのではないか」
仮説E「南地区は子供が多いので、育児しやすい街のモデルケースになるのではないか」

5つの仮説について、順番に詳しく説明していく。

仮説**A**「南地区の医療体制は不十分ではないか」（文責・木戸なつみ）

2020年の国勢調査を基に求められた日本医師会の地域医療システムによると、人口１０万人あたりの施設数が、全国平均72.72件に対して、稚内市は38.73件と約半数にとどまっている(1)。また、稚内市には産婦人科診療所と眼科系診療所、精神科系診療所がない。また、稚内市にある１３件の一般診療所のうち南稚内クリニック様とさくらい整形外科医院様の２件が南地区にある。また、病院を南地区に限定すると稚内市には3つの総合病院があるが、稚内市立稚内こまどり病院が南地区内にある。市内には他に稚内市立稚内病院と稚内禎心会病院があるが、比較して総病床数、常勤の医師数が少ない。最も大きい稚内病院の総病床数は332床だが、こまどり病院は45床であり、常勤の医師数は稚内病院が36名に対して、こまどり病院は2名である(1)。

医師の数については、人口１０万人あたりの人員数は、全国平均310.85人だが、稚内市では160.86人となっており、約半数である(1)。

外来受診率は稚内市は平成28年度のデータにはなるが、千人当たり557.6人で、全国平均は668.1人であり大きく下回っている。反対に一日当たりの医療費は外来で19540円、入院で36990円である(2)。全国平均は外来では13910円、入院は34030円であり、一日の医療費が全国平均よりも上回っていることから、比較的重症になってから医療機関にかかっていることが予想される(2)。

特定健診受診率の実施状況については、平成28年度は稚内市は21.7%であり、全国平均36.4%と比較すると大きく下回っているため、生活習慣病の早期発見が遅れている可能性がある(2)。
事前にインターネットで調べた情報によると以上の医療体制が現状であり、よって、南地区での医療機関・病床数の少なさや稚内市の医師数の少なさ、外来受診率・特定健診の受診率の低さから、稚内市そして南地区では医療体制が不十分なのではないかと考察した。
また、飯田光様との事前のZOOMミーティングで、待機時間が長いことが医療への不満点であるという情報が得られ、稚内市では医療への不信感があるのではないかと予想した。
以上のことから、医療体制が不十分なのではないかという仮説を立案した。

1　日本医師会「北海道稚内市」JMAP地域医療情報システム
　　北海道 稚内市 | 地域医療情報システム（日本医師会）
2　稚内市　第3章「健康・医療情報の分析と課題の把握」datehealth2.pdf

仮説B「南地区の住民の生活習慣を改善すべきではないか」(文責：出口智子)

南地区単体の健康データを集めることは難しかったが、稚内市の出している健康・医療情報の分析と課題の把握から、上記の仮説を立てた。
平成28年の健診項目別有所見割合を見ると、BMI異常、高血圧、尿酸、LDLコレステロール値の異常の割合が全国平均よりも高いことが分かった(1)。基礎疾患の有病状況についても、高血圧症の割合は21.5%（2）となっており、全国平均よりも高い値である。そこで、稚内市の生活習慣について調べることにした。
まず、稚内市の生活習慣に関する調査では、喫煙をしている人の割合が20%強となっており、全国平均の14%より高くなっている（3）。加えて、妊婦の喫煙率も9.8%というように全国平均6.3%よりも高く（4）、たばこへ関する危険意識の低下が示唆される。また、親の喫煙習慣は子供の喫煙に影響を及ぼし、非喫煙者の親の子供より喫煙者の親の子供の方が喫煙経験率が男女ともに高くなることが報告されている（5）。タバコは本人や周囲の人間の健康に悪影響を及ぼすだけでなく、次の世代へも継承されるという悪循環を生み出してしまう。
次に、飲酒文化についてだ。稚内市では一日の飲酒量が1～2合の割合が34.7%（全国23.9%）、2～3合の割合は17.2%（全国9.3%）、3合以上の割合は5.6%（全国2.7%）となっており（6）、飲酒率の高さが伺える。農林漁業の仕事をしている人は飲酒率が高くなる傾向があり（7）、稚内は漁業の栄えている町でもあるため、地域性と飲酒の間に関連があると考えられる。南稚内駅周辺の地図を見ると居酒屋が集中しており、約20店舗ほどが集中している。
食生活について、北海道や東北地方など寒冷な地域では食糧確保や保温のために塩蔵食品が多いという習慣（8）がある。塩分摂取の超過が高血圧などの生活習慣を引き起こすため、稚内市にも同様に塩分を多く摂取する文化があるのではないかと考えた。
運動習慣については、一日一時間以上運動をしていないとする人の割合が稚内市では21.2%と全国平均を大きく上回っている（9）。運動不足がBMI異常などの原因になっているのではないかと考えた。
上記から、食生活・運動・喫煙・飲酒という側面と、稚内市の健康面のデータから、稚内市の生活習慣について改善すべき点があると考えた。
1）https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00012800/00012880/datehealth2.pdf
稚内市役所 「稚内市データヘルス計画書」平成30年3月　pp1-57
第三章　健康・医療情報の分析と課題の把握　pp19-26
2 https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00012800/00012880/20240415101658.pdf
稚内市役所 「第3期国民健康保険データヘルス計画書」令和6年3月　p25
3　1に同じ　p26

4
https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/0/3/2/8/9/0/4/_/%E3%80%90%E8%B3%87%E6%96%997-5%E3%80%91%E6%96%B0%E6%97%A7%E5%AF%BE%E7%85%A7%E8%A1%A8(%E6%A1%88).pdf
北海道稚内保健所 「宗谷圏域 健康づくり事業行動計画」p14
5https://www.sankei.com/article/20210503-UD4XLZBQWFPDZMML74TLVIHQLY/
産経新聞「親の喫煙習慣、子供に甚大な影響」
6 1に同じ p26
7https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kiban/chosa_tokei/zenbun/heisei26/26tyosahokokusyozenbun.files/06.pdf
東京都福祉局 「飲酒の有無、頻度」
8https://www.maff.go.jp/tohoku/syouan/blog/202206.html#:~:text=%E9%9B%AA%E3%81%AE%E6%B7%B1%E3%81%84%E6%9D%B1%E5%8C%97%E5%9C%B0%E6%96%B9,%E3%81%8C%E5%A4%9A%E3%81%84%E5%82%BE%E5%90%91%E3%81%AB%E3%81%82%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82
東北農政局HP 令和4年6月16日の記事
9 1に同じ p26

仮説**C**「こどもの将来の就職が難しいのではないか」（文責・牧野界人）

南地区のみに関するテーマではなく、稚内市全体の若年層共通の課題として提案された仮説である。稚内市における若年層の流出の原因として、稚内市ではこどもたちが希望の職種に就くための十分な環境がないことが考えられた。また、事前学習において昨年の稚内高校へのアンケート結果（1）から、両親の職業を聞いたところ、12.3%の生徒が漁業従事者だと回答していた点、9.7%の生徒が教育従事者だと回答していた点から、稚内での就職について考えるうえでは保育士、漁師について取り上げるとよいのではないかという意見が出た。

保育士の場合、稚内出身のこどもが保育士になりたいと考えた場合、稚内市内で保育士の資格を得るために通える学校はなく、最低でも車で3時間離れた名寄にある名寄市立大学（2）の社会保育学科まで通わなければいけないため、進学するタイミングで稚内市を離れざるを得ない。こうした進学上の機会での流出が実態としてあるのかどうかを小学校高学年や中学生へのアンケートを通じて把握する必要があると考えた。また、実際南地区にあるきらきら保育園（3）を訪れて、職員の方々は資格はどこでどのように取得されたのか、出身はどこなのかなどを訪ねて、稚内で保育士になるための具体的なキャリアを把握したいと考えた。

漁師の場合、稚内市民が漁師になるケースは家業を継ぐという形が最も多いのではないかという意見が出た。若年層が家業を継いで漁師になることは人口流出を防ぎ稚内市の発展を継続させていくための重要な要素であると考えたため、家業が漁師であるこどもがどれくらいいて家業に対してどのような感情を持っているのかを把握する必要があるのではないかと考えたため、港小学校のこどもたちへのアンケートに家業について問う内容を加えることが決まった。また、漁師という職業そのものが現代の若者に受け入れられるのかどうかを考えるため、漁師の方と実際にお会いして収入は安定か、漁師の方々は健康か、飲酒するか、起床時間や生活習慣はどのようなものかをインタビューしたいと考えた。また調査の過程で猿払村でのホタテ産業が中国の輸入禁止事件以前はかなり潤っていた（4）ことがわかり、就職を希望する若者が多いのではないかと考えたため、現地で調査したいという意見も出た。

1　第1回 三学部合同特別実習稚内市地域診断報告書
2https://www.nayoro.ac.jp/faculty/hw_faculty/socialchildcare/shikaku.html
名寄市立大学「資格と免許」2024/10/27閲覧
3http://www.hikari-kirakira.com/
稚内ひかり学園 「ひかり幼稚園 きらきら保育園」 2024/10/27閲覧
4https://business.nikkei.com/atcl/NBD/19/00117/00172/?SS=imgview&FD=-1038079944
日経ビジネス「品川区より所得が高い北海道猿払村、ホタテ漁「公平な組織」で活力」2024/10/27閲覧

仮説**D**「南地区は衰退していて、改善が必要なのではないか」（文責・木戸なつみ）

稚内市の人口減少、鉄道の本数減少、漁業の変遷から南地区の衰退を考察した。
稚内市の人口減少の状況についてまとめる。令和4年時点での総人口は31,644人であった(1)。最も人口が多かったのは高度経済成長の象徴である東京オリンピックが開催された昭和39年で、総人口は58,223人である(1)。昭和33年から昭和63年まで5万人台の人口を維持していたが、平成元年から4万人台となり、その後も人口減少が続き、昭和39年から約60年で26579人の人口が減少した。
鉄道の本数の減少に関しては、JR北海道が発表した2016年3月26日付のダイヤ改正で、北海道新幹線の開業に合わせて大幅に普通列車を減便した。名寄駅から稚内駅までは一日に3.5往復までに減便された(2,3)。
街の衰退の大きな原因として、漁業の衰退が挙げられる。稚内プレスに書かれている沖合底びき網漁業についての変遷を要約すると、200海里の水域制限が設定される昭和52年（1977年）まではスケトウダラやホッケ、カニを主体に十数年連続し年間50万トンもの水揚げを誇り昭和51年度には全国で数量2位（54万トン）、金額9位（320億円）を記録していた。それ以降、60余りあった底引き船は、数年ごとに減船され、平成10年には15隻となった。稚内市にとっての基幹産業の水産業は今は宗谷漁協のホタテ漁、稚内漁協のナマコ量に取って代わり、地球温暖化による海洋変化での資源減少が祟り経営は苦しんでいるが、浜値高に支えられ、月に実績は1億円を超えている(4)。
200海里漁業水域を昭和52年に旧ソ連並びに米国が設定したことで、稚内市の漁業に大きな影響があり、海域に大きく依存してきた沖合底引き船や北洋転換船に大打撃があった(5)。また、地球温暖化による資源の減少や漁業関係者の高齢化なども影響し、現在も漁業の街として漁業形態を工夫しながら成果を上げているものの、漁業で栄えた一時代と比較して、衰退の一途をたどっている現状がある。
また、飯田光様との事前のZOOMミーティングで、稚内市民はみんな衰退を感じているのではないかとのお話があり、老朽化を感じる建物は学校で、小さな商店や大きめのスーパーがなくなっていったとの情報が得られた。
以上のことから、人口減少、鉄道の本数減少、漁業の変遷から、稚内市全体が衰退しつつあり、南地区にも影響があるだろうと仮説を立案した。

1令和4年度　稚内市統計書
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/tokei/tokeisyo/r4.html

2　鎌倉淳「JR北海道が2016年3月ダイヤ改正の普通列車時刻表を発表。「函館～札幌間」は1日2.5往復で、青春18きっぷでの移動が困難に」タビリス、2016年2月9日更新
https://tabiris.com/archives/jr-hokkaido-12/

3　北海道新聞どうしん「JR宗谷線減便半年 沿線、描けぬ将来像 通学、通院負担重く／秘境駅廃止も浮上 」2016年9月27日更新

https://web.archive.org/web/20160927133025/http://dd.hokkaido-np.co.jp/news/society/society/1-0319967.html

4　時の話題「沖底業界」稚内プレス、2023年4月19日更新
https://wakkanaipress.com/2023/04/19/62991/

5　稚内市　稚内市建設産業部水産商工課「平成22年 稚内の水産」p31
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00001200/00001295/wasuisan22.pdf

仮説**E** 「南地区は子供が多いので、育児しやすい街のモデルケースになるのではないか」
(文責：出口智子）

2020年の国勢調査の結果をもとに南地区の0～9歳の子供の人数別に色分けをすると、南地区は他の地区に比べ全体的に子供数が多く、特に緑地区、こまどり地区は人数が多い。これをレクリエーション・娯楽施設の位置と比較すると、緑地区にはみどり公園や市営球場、みどりスポーツパークなど運動のできる施設や公園が多くあり、隣のこまどりにもスキー場やパークゴルフなどの施設がある。レクリエーション施設のある場所と子供の集中している場所が一致したことから、南地区の公園や施設が子育て世代を誘致しているのではないかと考えた。また、南地区にはきらきら保育園やひかり幼稚園、南小学校・港小学校、南中学校というように幼稚園から中学校まで義務教育機関が全てそろっているのも大きな特徴だ。学校教育では教育DXが導入されており、AIドリルや学習支援アプリなどの導入が始まっている（1）。市全体の教育面の取り組みに加え、南中学校で教員と生徒との文化活動の一環としてソーラン節をロック風にアレンジした南中ソーランの歴史（2）など、学校の教育に地域特異性や魅力が見られると考えた。
稚内市全体で様々な子育て支援政策を行っており、児童手当や助成金だけでなく、どさんこ・子育て支援特典制度やショートステイ、放課後子供教室など（3）地域に密着した様々な支援が実施されている。市全体の支援だけでなく、南地区では南地区活動拠点センターで多様な交流の場を設けたり（4）、町内会内でお祭りを開催し南中ソーランを小中学生に披露してもらったりしている。
上記から、南地区に子供が多いのは、南地区が教育・支援・娯楽など子育てをするうえで魅力となる点があるためであり、育児のしやすい街のモデルケースになり得ると考えた。

1https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/seisaku/keikaku/digital_vision.html__
稚内市役所 「稚内市デジタル・トランスフォーメーション（DX）推進ビジョン・アクションプラン」
2https://wakkanai-brand.jp/chiikishigen/c03_nantyusoran.html
稚内ブランド 「南中ソーラン」
3https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fukushi/kosodate/
稚内市役所 「子育て」
4https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/kurashi/machidukurichiikikatsudo/katsudosisetsu/kyotenshisetsu.html
稚内市役所 「地域活動拠点施設について」

2.実習のスケジュール

日付	訪問先	形式	人数	場所	時間	メンバー
8月上旬～8/25	ひかり町内会	アンケート				
8/20	本間正博さん	インタビュー	2人	稚内市保健福祉センター	10:00-11:00	髙橋伶奈、出口智子
8/20	教育相談所	インタビュー	５人	稚内市保健福祉センター	14:30-15:30	木戸なつみ、出口智子、佐藤磨依、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/20	教育委員会教育部子ども課	インタビュー	5人	稚内市保健福祉センター	16:00-16:30	出口智子、木戸なつみ、廣瀬莉帆、髙橋伶奈、佐藤磨依
8/21	中澤和一さん	インタビュー	５人	稚内市保健福祉センター	11:00-12:00	木戸なつみ、出口智子、佐藤磨依、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/21	佐藤忠男さん	インタビュー	５人	宗谷友の会	13:00-14:00	木戸なつみ、出口智子、佐藤磨依、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/21	横田耕一さん	インタビュー	５人	宗谷友の会	14:00-15:00	木戸なつみ、出口智子、佐藤磨依、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/22	クリニックはぐ	インタビュー	1人	クリニックはぐ	13:00-14:00	髙橋伶奈
8/22	南稚内クリニック	アンケート		FAXでの対応		
8/22	港１～５丁目、大黒１～３丁目	フィールドワーク	3人	副港市場、ローソン稚内副港通店、遊ランド、ツルハドラッグ、セイコーマート	午後	木戸なつみ、出口智子、佐藤磨依

8/22	きらきら保育園	インタビュー＆アンケート	２人		13:00-14:00	牧野界人、廣瀬莉帆
8/22	緑3－1丁目	フィールドワーク	2人	南地区活動拠点センター、みどり公園、スポーツパーク、	午後	牧野界人、廣瀬莉帆
8/22	稚内市立病院	インタビュー	1人		15:00-16:00	牧野界人
8/22	西條前行動	アンケート	6人	西條1階	16:00-18:30	出口智子、牧野界人、木戸なつみ、廣瀬莉帆、髙橋伶奈、佐藤磨依
8/23	稚内南中学校	インタビュー	３人	南中ソーラン資料室	13:00-14:00	出口智子、木戸なつみ、佐藤磨依
8/23	港1～5丁目、大黒1～3丁目	フィールドワーク	3人		午後	出口智子、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/23	北海道稚内高等学校衛生看護科	インタビュー	2人		16:00-16:30	木戸なつみ、佐藤磨依
8/23	西條前行動	アンケート＆フィールドワーク	３人	西條1-3階	16:00-18:30	出口智子、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/25	ひかり町内会夏祭り		6人		11:00-13:30	出口智子、牧野界人、木戸なつみ、廣瀬莉帆、髙橋伶奈、佐藤磨依
8/25	緑5，6丁目、こまどり	フィールドワーク	6人	スポーツパーク	夏祭り後	出口智子、牧野界人、木戸なつみ、廣瀬莉帆、髙橋伶奈、佐藤磨依

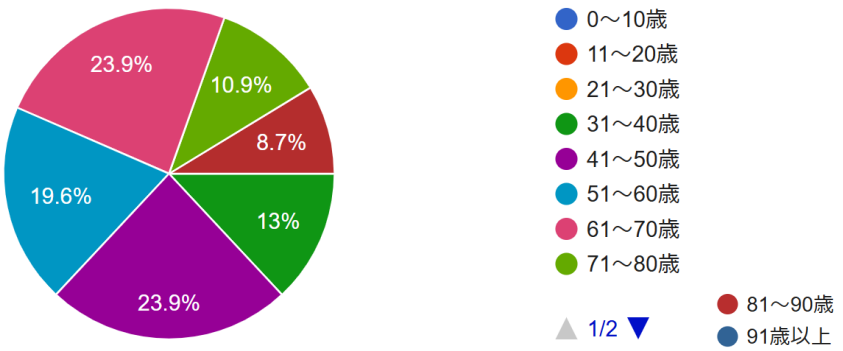
8/26	成田功さん	インタビュー	３人	成田さん自宅	16:00-17:00	出口智子、廣瀬莉帆、髙橋伶奈
8/27	稚内港小学校	授業＆アンケート	6人		14:30-15:30	出口智子、牧野界人、木戸なつみ、廣瀬莉帆、髙橋伶奈、佐藤磨依
8/28	飯田爽さん	インタビュー	３人	電話での対応	20:05-20:20	出口智子、牧野界人、佐藤磨依
8/29	声問小学校	インタビュー	２人		10:30-12:00	牧野界人、髙橋伶奈

3.各訪問先での調査結果と学び
3-1 ひかり町内会 （文責：髙橋伶奈）
ひかり町内会での回覧板での生活状況調査

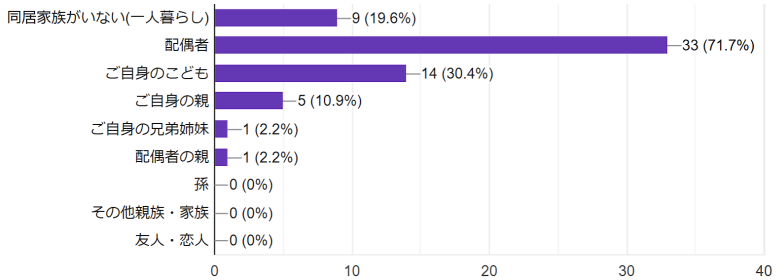
意図
　事前学習において、宗谷総合振興局のホームページから、稚内市をはじめとする宗谷管内の方々の食生活を全国平均と比較したときに、飲酒、喫煙が多いという生活習慣上の問題があることが分かったので、稚内市民の意識について草の根調査をしたいと考えて、南地区の多くの範囲をカバーするひかり町内会にアンケートを行った。また、地区ごとの年齢人口構成、職業人口構成が詳しくわかるデータが入手できなかったため、南地区の住民の職業、年齢の分布を知りたいと考えてこれに関する質問も加えた。

概要
・対象者　：ひかり町内会で回覧板の連絡網に参加されている方
・目的　　：南地区住民の健康意識、年齢、職業の人口分布の把握
・回答者数：46名
・期間　　：2024年7月27日から2024年8月25日
・方法　　：Google Form (ひかり町内会の回覧板にQRコードを掲載
・調査項目：
1.年齢
2.同居人との関係性（続柄など）
3.性別
4.職業
5.喫煙頻度
6.飲酒頻度
7.かかりつけ病院
8.夕飯のメニュー
9.南地区の便利な点、不便な点

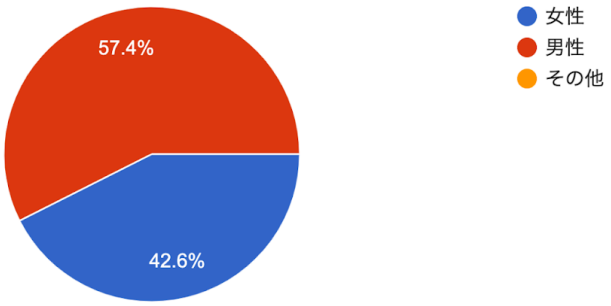
結果
1.年齢…30代未満からの回答がなく偏りの強い結果となった。



2.同居人との関係

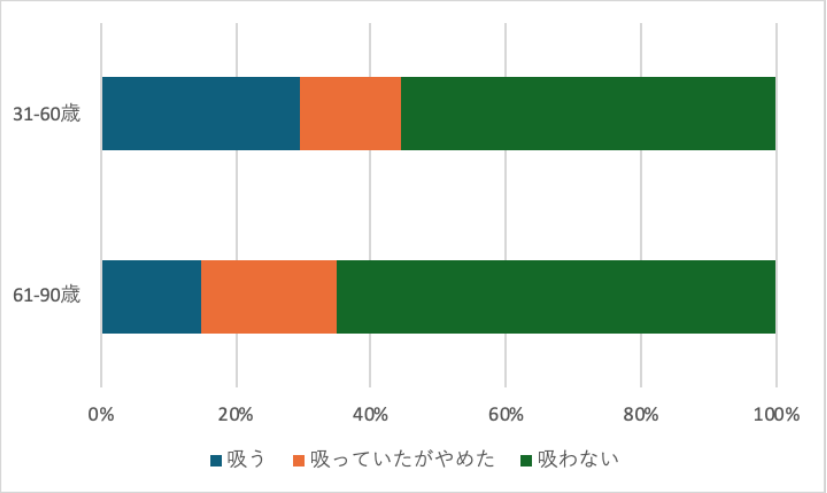


3.性別…男性からの回答がやや多かった。

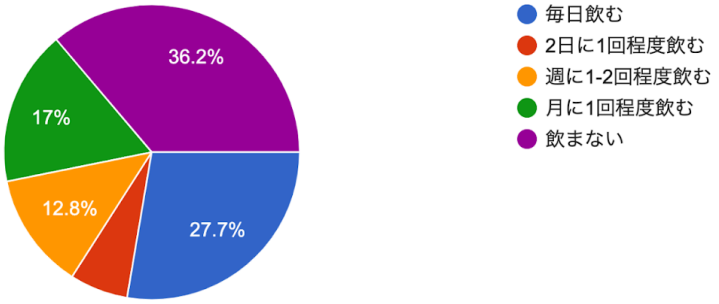


4.職業…高齢者からの回答が多かったため、無職が多くなった。

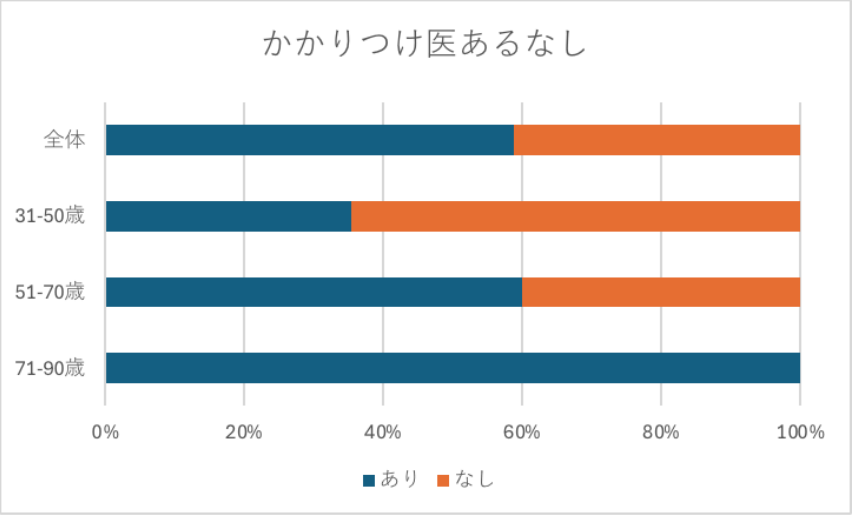
5.喫煙頻度…全体の喫煙率は23.4%で、世代別に見ると31-60歳の若い世代の方が喫煙率が高い結果になった。



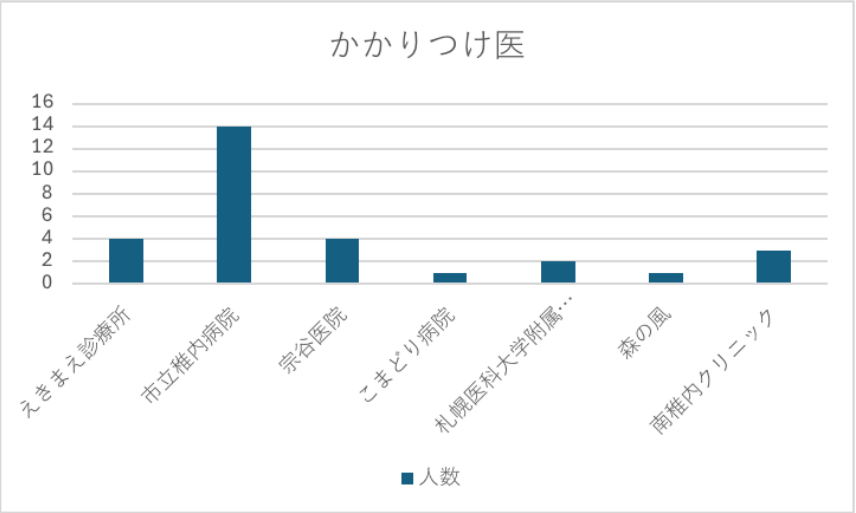
6.飲酒頻度…毎日飲む人が3割弱いる一方で、飲まない人も4割弱いるという結果になった。



7-1.かかりつけ医…世代ごとにかかりつけ医が現在いるかどうかをまとめた。高齢者ほどかかりつけ医がいる割合が多くなっている。

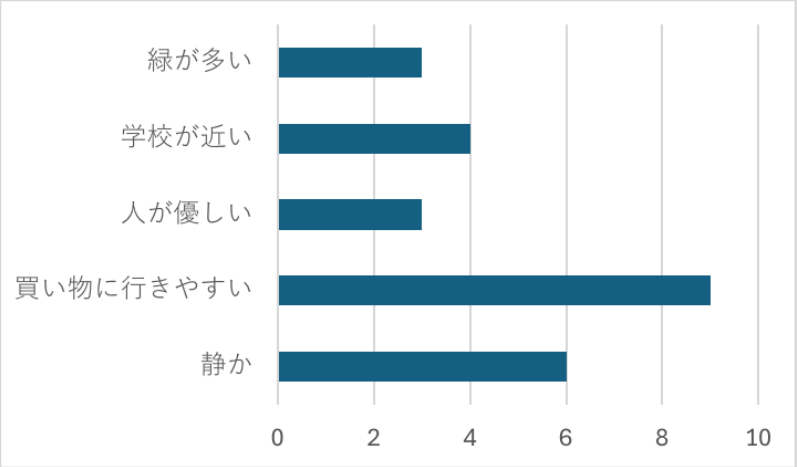


7-2.かかりつけ医…回答者の主なかかりつけ医をまとめた。市立稚内病院が圧倒的に多かった。

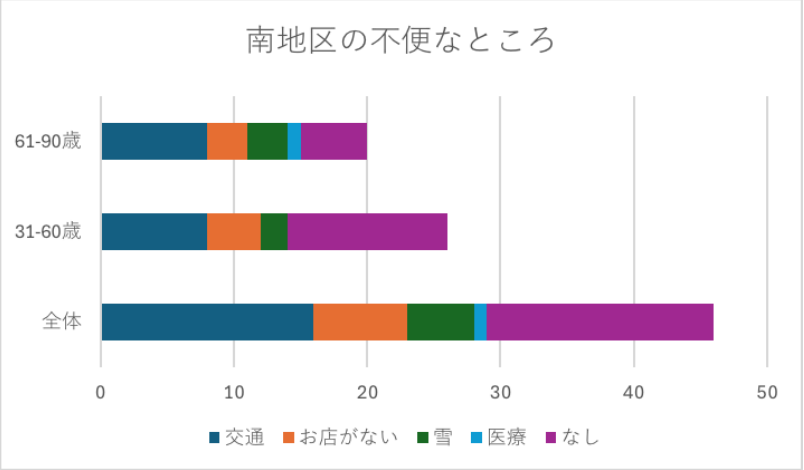


8.夕飯のメニュー…稚内らしい特色として、ジンギスカンが上がった家庭が多かった。また刺身や焼き魚がほとんどの家庭で上がっていた。

9-1.南地区のいいところ…買い物の便や周辺環境についての声が多かった。



9-2.南地区の不便なところ…世代ごとにまとめたが全体として交通に関する意見が多かった。



考察

事前調査で南地区の住民の生活習慣を改善すべきではないかという仮説が上がっていたことに対して、令和4年度の国民健康・栄養調査(厚生労働省)による全国の喫煙率24.8%に対して、今回の調査での喫煙率が23.4%と、私たちの予想に反しわずかに低い結果となった。
これにはアンケートの回答者が高齢者に偏っていたということも影響していると考えられるが、決して悪い結果ではなかった。しかし、町の中を歩いていると喫煙に対して寛容なイメージを受け、また現状からもさらに喫煙率を下げることが望まれることなどから、アクションプランとして子どもたちによる健康教室を提案した。
その他、今回のアクションプランには盛り込めなかったが、市立稚内病院をかかりつけ医としている人が圧倒的に多いことから、医療の分散化があまりできていないのではないかということが伺えた。

参考
https://www.health-net.or.jp/tobacco/statistics/kokumin_kenkou_eiyou_report.html

3-2 本間正博様 （文責：出口智子）
【概要】
本間様は長年に渡り、稚内市の教育に携わってこられた。今まで稚内市の小学校(特に特別支援学級)の教員や教職員組合の幹事、東小学校の管理職などを務めてきた。そして現在、稚内市教育相談所所長兼、今年からコミュニティスクール(cs)の統括コーディネーターを務めている。
コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とは、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことで「地域とともにある学校」への転換を図るための仕組み(1)であり、稚内市では令和5年から採用された。事前調査の段階で南地区の特に緑・こまどり地区は子供の人口が比較的多いことから、南地区は子育てのしやすい町であるという仮説を立てた。そのため今回のインタビューの目的としては、CSのお話だけでなく稚内市の子育ての特徴や子育てをする上で課題となる点について伺い、南地区の子育てのし易さ等について捉え直すことである。インタビューは保健福祉センターにて行った。元々3-3班が計画していたインタビューに、私達3-4の中の2名が急遽参加する形で行った。そのためインタビュアーは3-3班が務め、私たち3-4班は書記に徹していた。
【インタビュー内容】
稚内では、令和5年度からコミュニティースクールを導入した。背景としてはまず北海道全体でコミュニティースクール導入する動きがあり、令和4年時点で宗谷管内で未導入なのは稚内市のみとなったことがある。全国のコミュニティースクール導入率は4割程度に止まっているのに対し、北海道では7割近い導入率となっており、北海道内で積極的にコミュニティースクール導入の動きがあると言える。そのような行政的な流れに加え、もう一つの背景には子育て運動の停滞がある。稚内市では46年前から子供の非行問題をきっかけに子育て運動を導入し、稚内の子育ての基盤を担ってきた。具体的には医療機関が教育機関と連携し、子供のキャリア教育や子供の将来について考える目的や医療不足の問題を解決するという狙いで様々な教育を実施した。市立病院を中心に中学生が手術や病院食を経験できる医療実習や、宗谷医院の医者の方が小学生に医師の仕事について説明する講座を行なっていた。このように教育・医療そして子育ての間で連携する基盤があったが、コロナ流行を経てそのような教育が衰退していった。また、最近子育て運動ではイベント偏重の嫌いがありマンネリ化しつつあることも受け、新たにコミュニティースクールという枠組みを導入し子育て運動の起爆剤のような存在になることを目指していた。去年は導入に際し各学校に学校運営協議会を作成し体制を整えるのみに止まり、実際の活動は今年からできるよう調整中とのことだ。
また、コミュニティースクールの今後の課題として、教育委員会の内部連携機能の充実がある。教育委員会の中でも子育て運動とコミュニティースクールでは管轄が異なり、子育て運動は社会

教育課、コミュニティースクールは学校教育課が管轄している。縦割りを解消し教育委員会内で連携することが円滑な子育て支援に欠かせない。
稚内全体の子育てや子供に関する課題として、スクールソーシャルワーカー（SSS）に寄せられる相談件数の数とSSSの圧倒的な人数不足が挙げられた。スクールソーシャルワーカーとは教育分野に加えて社会福祉的な知識・技術を有し、問題を抱えた児童に対し多様な支援方法で課題解決を測っていく人のことである。（2） 稚内市には今現在2人いる。実際に学校に行って相談を受けたり、委員会やコーディネーターの方から電話などを通じて相談を聞いたりするが、2人合計で年間1300件ほどの相談を受けている。受けた相談についてはつばさ学級や併設されている教育相談所の方と一緒に解決に取り組んでいる。稚内市は学区別で4つの地域に分けられるが、各地域ごとに1人常駐する状態が理想的だと話していた。相談で多いのが不登校についてだ。全国的にも増えている不登校だが、いじめ問題は当事者の子供だけでなく学校の教員や双方の親など周囲の人間関係が関与し複雑化しているため、カウンセラーだけでなくコーディネーター、そしてSSSが介入する。
しかし教育相談所にも限界があり、これからますます教育と医療・福祉の協力が重要になってくる。例えば片方の親の身に病気などが起き子供の家庭環境が悪化した際に、病院が子供の家庭環境について教育委員会や教育相談所に相談したことで問題の発見や解決に繋がった事例がある。ヤングケアラーの問題も同様に、様々な機関が子供の問題の早期発見・解決のために連携することが大切だ。

【学び】
今回のお話を伺い、稚内市には約半世紀前から子育てを教育・医療と連携し取り組むような基盤が作られていることを学んだ。学校と地域の方を繋げる橋渡しのような存在としてSSSやコーディネーターが置かれ、子供の問題を様々な機関と協同して発見・解決する体制があることを学んだ。このように稚内市では各地域と市役所、病院という「市」全体での枠組みで子育て改善に取り組んでいるため、各学区ごとの特徴を捉えることは難しく、より包括的な取り組みとして考えなくてはいけない。そのため、南地区だけが子育てのモデルケースになるわけではなく、稚内市の子育ての土壌こそが魅力であると学んだ。また、コミュニティスクールの導入の理由も特徴的であった。稚内にとってCS導入は、新たな制度の導入というより、むしろ既存の体制の強化という意味合いが強い。元々ある子育て運動との差別化を計りながらも、互いが互いを活性化し連携することが大切だ。今回もう一つ学んだことが、SSSの人手不足だ。事前に稚内市の人口流出と衰退傾向について仮説を立てていたが、生活面だけでなく教育面についてもこのような人手不足が表面化していることを学んだ。子育てのしやすい街を作るためには制度面に加え、教育関係者の人数確保も大切である。

(1)https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/
文部科学省 「コミュニティースクール(学校運営協議会制度)」2024年10月24日8:10最終閲覧
（2）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/046/shiryo/attach/1376332.htm
文部科学省 「スクールワーカー活用事業」2024年10月24日15：00最終閲覧

3-3 稚内市教育研究所 （文責：髙橋伶奈）
【概要】
8月20日 14:30-15:30稚内市保健福祉センターにてインタビュー

・教育研究所とは

稚内市生涯学習総合支援センター(愛称『風～る』)の中に稚内市教育研究所がある。稚内市の教育課題の解決を図り、教育現場の実践に役立つ調査・研究、情報・資料提供、実践理論・技術の援助等、学校教育のセンター的役割の充実に努めるため、稚内市の条例によって昭和26年に発足した。(教育研究所HPより引用)

・インタビューの目的・狙い
私たちが事前に設けた「南地区は子どもが多いので、育児しやすい街のモデルケースになるのではないか」という仮説について調査するため、実際に稚内市で行われている子育てや教育に関する取り組みについてのお話しを聞かせていただいた。

・インタビュー形式
保健福祉センターの一室をお借りし、班員5名とファシリテーター1名の6名でお話を伺った。

【分かったこと】
1.教育に関する相談件数や相談内容
①教育に関する相談は年に何件あるか
ソーシャルスクールワーカーへの相談は年1121件で、年々増えている傾向にある。生徒・児童数が減っている中では相談数は多くなっている。
②相談はどの時期が多いか
4、5 月や8、9月の夏休み明けなど、新学期がスタートしてすぐの時期が多い。
③どういった内容の相談が多いか
学校にいけないと言う相談が多い。家庭や養育に問題か〝あって不登校になったり、特性から集団行動や学校生活に慣れす〝不登校になったりするケースが多いそうだ。コロナが明けて臨時休校がなくなったことも一因なのではないかとおっしゃっていた。

2.南地区の教育における問題点
①学力関する相談はあるか
ない訳て〝はないか〝、不登校になったり学級て〝うまくいかなくなったりするからその原因の一つとして聞いているそうだ。学力低いと肯定感も低くなってしまうことが多い。一人ひとりに向けた手当の必要があり、教員に委ねられる問題である。
②相談を受けた場合どのような対応をするのか
親が相談しに来ることが多いため、お子さんの現状認識についてまず聞く。その上で学校と情報共有しながら、一面的な理解にならないよう気をつける。子ども自身にも聞くが、行動から読み取ることが多い。
③相談に対応する人手は足りているか。
十分ではない。多い方がより本人や家庭に寄り添うことができる。ソーシャルスクールワーカーが4人いた時代もあったが今は2人で対応している。
④その他相談件数としては多くなくても問題視している相談
特別支援教育について問題視している。特別支援学級や養護学級と親や家族の橋渡しのような役割を行っている。教育相談所の3人で手分けして保育所や幼稚園を回り、200人の小学校に入学予定の子供たちの観察を行っている。
このように不登校と特別支援に通う生徒が増えている理由について、今まで発見されておらず漏れていたから、スマホやネット環境の発達が関係しているのではないかなどの仮説があげられた。稚内では、国語能力の低下も問題となっているそうだ。

3.南地区の教育で力を入れているところ
①つばさ学級の利用者はどのくらいいるのか

登録している児童数は40人ほどで、実際に来る人数は一日2、3人くらいである。頻繁に来る子もいれば時々利用する子もいる。
②つばさ学級の利用者の学年に特徴はあるか
中学生が圧倒的に多いが、小学生も最近増えている。
③つばさ学級を行って改善しているかどうか、課題はあるか
子供たちにとっての最後の砦がつばさ学級であるから、子供にとって苦痛な場所にしないことが大切である。学校や家庭と連携した取り組みを行っている。
課題は、意欲のある子は来ることができるが、本当に必要な子は来れないということである。

4.教育における問題や課題に対する取り組み
①わっこちゃんLINE相談の成果について
開いてはいるがアクセスがあまりなく、成果はあげられていない。宣伝不足が原因と考えられる。
②実際に現行している取り組みでは改善がみられたか。課題はあるか。
その都度改善していると感じている。実際に取り組んだ家庭の例を紹介していただいた。
相談は親から来ることが多いが、ソーシャルスクールワーカーが学校を回る中で見つける相談も多い。稚内の学校とも一覧を作って定期的に情報をしている。情報共有の面については稚内の進んでいるところであると考えられる。
しかし、このように多職種で連携する場合、橋渡し役・学校・行政など色々な人員が関わるが、誰がどの仕事をするかという明確な区別がないため、誰がやるのか分からないまま進んでいかないことがあるのが課題である。

5.最後に
南地区は横に連携した教育活動が熱心な地域で、コロナ禍でかなり活動が衰退してしまったが、その精神は今も根強く残っている。

【考察】
私たちの事前学習に反して「わっこちゃんLINE相談」などあまり成果の上がらなかった取り組みもありながら、試行錯誤してよりよい教育環境を模索しているのだということが分かった。一方、今回お話いただいた稚内の教育の良いところの根底には、親や学校それぞれだけではなく、そこに行政が橋渡しとなってコミュニケーションを取ることで、多職種で連携しながら地域全体で子どもたちの成長を見守っているということがあるのだと分かった。子どもたちの人数があまり多くないからこそ、一人ひとりの子どもをしっかりと観察して、それぞれにあった教育を行うことができているのだと考える。
この長所を生かしたアクションプランとして、1つ目のジョブフェアと3つ目の魅力再発見を提案させていただいた。
ジョブフェアについては、一人ひとりの子どもへ手厚くサポートできるということを生かして、子どもたちの興味がある職業をアンケート調査し、それに合わせたジョブフェアや職業体験を行うというプランを考えた。
魅力再発見については、住民全体で子どもたちの成長を見守るという風潮を生かして、子どもたちと高齢者がそれぞれ稚内の魅力について調べてまとめたポスターを作成し、お互いに紹介し合うことで、さらなる稚内の魅力に気づくことができるのではないかというプランを考えた。

【参考】
https://sites.google.com/view/wak-kenkyujo
稚内市教育研究所　最終閲覧 2024年10月30日

3-4 教育委員会教育部子ども課 （文責・木戸なつみ）
【概要】
8月20日　16:00-16:30稚内市保健福祉センターにてインタビュー

子ども課は、教育委員会の中で保育所、幼稚園、児童館、学童保育所等に関することや、子育て支援、相談に関すること、また児童手当、児童扶養手当に関することを担当している。主な取り組みとして、稚内市出産・子育て応援事業やファミリー・サポート・センターの設置、児童館の運営、稚内市子育て支援ネットワーク、子育て短期支援事業などがある。

【インタビュー形式】
　稚内市保健福祉センターの一室をお借りし、班員５名とファシリテーター1名で、保育士の本間様と保健師の岡田様にお話を伺った。

【インタビューの目的】
事前に立案した仮説Eに基づき、子育てしやすい環境がどのように作られているのかを調査するためにインタビューさせていただいた。また、南地区特有子育て環境についても情報収集を行いたく、南地区にフォーカスした質問もさせていただいた。

【インタビュー内容】
①子育て対策について
・市独自の子育て対策は5つあり、出生時お祝いの品の提供、チャイルドシート短期貸出、有料ゴミ袋配布、保育所利用時の助成金、教育費助成である。申請が必要なものがほとんどで、収入により対象を絞っている場合もある。
・市独自に子育て対策を行うきっかけとして、アンケートがあり、アンケートを5年に一度行い、子育て世代のニーズを把握する努力をしている。
・こんにちは赤ちゃん訪問は全て回ることができている。
・ファミリー・サポート・センターの利用は、登録は120、130人で、その一部が利用し、登録のみの場合も多い。
・どさんこ・子育て支援特典制度の提携店、実際の利用割合は、道内全体での動きのため、提携店は多く、全国チェーンも協力している。カードは、妊娠届の時に手渡ししている。
・児童館のイベントは年に一回、児童館祭りがある。学童保育所利用の小学生にも声をかけており、また、児童館利用者の8割くらいが参加しており、にぎわいを見せている。縁日のような形で、様々な催しが行われている。
・待機児童は0で、市長も待機児童0を維持することに力を入れている。園を選ばなければすぐに入園できる。
②子育て環境について
・職員が感じている、親目線での稚内市で子育てすることの課題は、風が強く、外遊びが難しいこと、公園自体はあるが、公園が少ないと相談があること、寒いため、水遊びが外でできないことである。
・遊びに関しては、駅の中や宗谷ふれあい公園、市内の体育館、緑スポーツパークなどがある。室内で遊べる施設が多い。
・交通の便については、若い世代、子ども世代はそれを問題と感じておらず、高齢者にニーズがある。
・相談内容としては、
乳児：発育（体重、身長、ミルクを飲まない）
幼児：発達　言葉の遅れ、落ち着きがない／急な預け先／予防接種について／保育所はどこが

良いのか

③南地区特有の子育て環境について
・子育てに関して、南地区特有の魅力はない。利点としては、コンビニが多く充実しているため、スーパーが少なくても困らないことである。
・稚内市内での子育ての魅力としては、
　夏は涼しい／熱中症の危険性がない／景色がきれい／冬遊びが楽しめる／除雪を丁寧に行って下さる／津波に強い／自然災害に強い／お祭りが毎週のようにあること
・南地区の子育てについて、緑地区は世帯数が多く、南中学校、南小学校、港小学校、保育園、幼稚園もあるので、同級生が多い。
・稚内市は子育てに関して、行政と民間がタッグを組み、顔の見える関係づくりができているのが魅力である。

【仮説との相違点】
　Eの仮説「育児しやすい街のモデルケースになるのではないか」との相違としては、南地区特有の子育てしやすい環境づくりはなされていないことであり、仮説を考える上では難航しそうである。しかし、南地区は世帯数と教育機関が多く、同級生が多いという特徴があるという情報を得ることができた。
　また、こんにちは赤ちゃん訪問、ファミリー・サポート・センターの運営、児童館での活動など、稚内市全体の子育てを中心に情報収集をすることができた。日本の最北であるという特徴から季節によって遊び方が異なることで、室内の遊び場が充実していることや、冬場は除雪作業が丁寧に行われているなど、住民にとって生活のしやすさを左右するようなお話を伺うことができ、暮らしやすさに関しての考察につなげることができた。

【学んだこと】
　子育て世代へのアンケートを通して、実際に子育てを行っている世代のニーズを捉え、具体的な政策に落とし込んでいるということを知ることができた。また、行政と民間の横のつながりがあり、関係性が構築されていることは、様々なニーズに対応できる基盤が整っているとも考えられるため、子育て環境の充実度の高さを感じることができた。

3-5　中澤和一様　(文責:佐藤磨依)
【概要】
8月21日　11:00~12:00　稚内市保健福祉センター

1）経歴
1947年、宮城県生まれ。無線学校を卒業後、通信士としてカツオ、マグロ漁業に携わる。68年に稚内市へ移住し、沖合底引き網漁船などに乗船した。2000年に漁師を引退し、現在は警備員。10年には稚内観光マイスター検定の上級試験に合格。稚内宮城県人会の会長などを務める。2008年に発足した稚内市民観光ボランティアガイドの初代会長を務め、道の観光ホスピタリティ実践者（道内の観光振興に貢献した個人・団体に送られる賞）に選ばれた。稚内市民観光ボランティアは、観光シーズンとなる春の大型連休から9月末まで、土日に稚内公園や宗谷岬でガイドしている。利尻・礼文島行きのフェリーの船内で行うこともある。稚内で30年以上、漁師をしていた経験から宗谷海峡にいる魚や漁業について話している。稚内高校で自身の活動について講演したり、研修の一環として稚内公園をガイドするなど、後輩の育成にも力を注いでいる。民生児童委員・稚内警察署少年補導員会長・船員OB会・宮城県人会他、地域のボランティア活動にも参加。退職までの35年間、通信長・漁労長として船員生活を送る。また、故郷・気仙沼市へ小

型漁船30隻を送る支援活動を行い、現在も様々なかたちで東日本大震災支援活動を続けている。

(1)FMわっぴ～「パーソナリティ紹介」2024年10月24日最終閲覧
中澤和一｜パーソナリティ紹介｜FMわっぴ～76.1MHz｜最北端の街稚内のコミュニティラジオ｜稚内と宗谷管内の地域情報
(2)北海道新聞「ヒューマン」2024年10月24日最終閲覧
https://asahikawa.hokkaido-np.co.jp/human/20161204.html

2）インタビューの目的
4つ目の仮説「南地区は衰退していて、改善が必要なのではないか」を検証するにあたり、衰退傾向にある漁業に携わっている中澤さんから昔と今の漁業の状況をお伺いするためにインタビューを行った。

3)講演・インタビュー形式
稚内市保健福祉センターの一室をお借りし、南地区班（4班）5名とファシリテーター1名、そのほか各班2名ずつが参加して講演を聞かせていただいた。講演が終了後南地区班より質問をし、お答えいただくという形式で進めさせていただいた。

【分かったこと】
・稚内は日本領とソ連領の国境となる地域である
・稚内警察署・稚内高校・富士見老人施設等で稚内ボランティアガイドを行っており、サンパウロの方が来たときにもガイドをした
・東日本大震災では支援活動を行い、32隻の漁船を贈った
・200海里問題により締め出され、漁獲量が減り、養殖に切り替わった
・沿岸漁業（うに・たこ）、刺し網漁（カニ）、コンブ漁、桁網漁、ホタテ漁、鮭定置網など様々な漁業が行われている
・昭和39年に70隻あった漁船が令和6年には5隻にまで減少した
・全盛期には22名いた漁師が現在は15名に減少した。その中にはインドネシア人が8名いる。
・沖合底引き漁業が主となる

【学んだこと】
　200海里問題というような国際的な問題により漁業が衰退したということを学んだ。昔と同じやり方を続けるのではなく、現状で出来ることを見つけ試行錯誤しながら漁業を続けていることが分かった。さらに若手の育成を通して漁業を守り続けていることが分かった。
　稚内は日本領とソ連領の国境の街であり、稚内の魅力を発信しながら街を守り続けていることが分かった。稚内市民観光ボランティアガイドやラジオなど様々な方法で稚内内外に魅力を発信していることを知った。
「自分は必要とされている、何かの役に立っている、そう感じながら生きることは幸せな人生だ」という言葉が強く印象に残っている。様々な取り組みに対して誇りを持ちながら活動されていることが伝わった。

仮説の検証において、漁船や船員、漁獲量が減少していることから漁業が衰退しているという仮説は正しいと判断できる。しかし、すべての漁業が衰退しているわけではなく、200海里水域の中で養殖や沖合底引きなどやり方を変えながら漁業を守っている。漁業を守るためには公的な支援や人材確保が必要となり、人材確保を推進するための提案としてアクションプラン1をあげた。

3-6 佐藤忠男様 （文責：廣瀬莉帆）

【概要】

・訪問日時　8/21 13:00~14:00　宗谷友の会

・佐藤様の経歴

札幌で生まれ、家庭の都合で稚内に移り住み、以降67年間稚内市に住んでいる。

学生運動の時期と重なったため、大学には進学せずに就職し、市役所で42年間勤められた。

定年退職後、全国社会福祉協議会の北海道宗谷地区事務所で働き、現在はひかり町内会の会長として活動されている。自主防災組織を立ち上げるなど、町民を災害から守る対策を打ち出したり、稚内市の友好都市である石垣市の平得公民館地区との交流を独自に行なったりするなど、稚内にある町内会の中でも先進的な役割を果たしていらっしゃる。

また、南地区子育て連絡協議会会長や南稚内クリニック応援団も勤められており、地域ぐるみの子育ての大切さを布教する活動や、地域の診療所への支援などの活動にも励まれ、町内をよりよくするために様々なことにご尽力されている方である。

加えて、稚内市教育委員会の元副部長を務められたり、南中ソーランが誕生したときのPTA役員を務められていたりと、幅広い経歴を持った方である。

・インタビューの目的や狙い

私たちが事前に設けていた、「稚内の町は衰退傾向にあるのではないか」「一方で、南地区は子供のいる世帯数が多く、子育てしやすい街のモデルケースになる可能性があるのではないか」という二点の仮説をお伺いすべく、南地区の現状や政策に詳しく、なおかつ市民と身近な関係を構築されている、「町内会長」という立場である佐藤様にお話をお伺いできたらということでお願いさせていただいた。

また、南地区の暮らしを考えるうえで医療へのアクセスのしやすさは欠かせないものであるため、住民としての感覚も踏まえて「医療が不十分ではないか」の仮説の検討のために南地区の医療事情についてもお伺いした。

・インタビュー形式

宗谷友の会の一室をお借りし、南地区班（4班）5名とファシリテーター1名、今回の実習を企画調整してくださった飯田様、佐藤様の計8名で、学生が質問した内容にご回答いただくといった形式で進めさせていただいた。

【お伺いしてわかった内容】

注釈：南地区としてお伺いしたが、佐藤様が特に熟知するひかり町内会のみに絞った回答をいただいたものもあった。

① <u>南地区の衰退を感じるか</u>

〇南地区に限らず、稚内市全体として衰退を感じる点がいくつかある。

〇南地区でも衰退を感じる点がいくつかある。

《以下その具体例》
・全国の人口減少と少子高齢化現象の例にもれず、同様の傾向が見られている。
　・若者の就職先や進学先に札幌や東京を選ぶ人が多く、就職・進学を機に若者が市街に流出している。
・ひかり町内会は人口が900人弱で、そのうち高齢者（65歳以上）が35%程いる。
　・高齢者は積極的には外出したがらないため、町全体の人の外出率が減ったように感じている。
・ひかり町内会の役員を担う若手がおらず、職員も高齢化傾向にある。
　・若者が町内会の役員を担わなくなってしまった要因として、佐藤さんは葬儀の委託化があるのではないかと考えている。昔は葬儀を町内の葬儀委員長が中心に町内全体として行われていたが、時代の変化やコロナの流行などを経て今は葬儀屋に委託することが基本となっている。これにより、「地域にいずれかはお世話になる」という感覚が低下してしまい、若者の参加意欲が低下するようになってしまったのではないかとの考察をいただいた。
　・空き家問題が生じているが、建て直し費用が掛かるため放置されてしまっている。事故原因となるため、早期対策が必要だと感じている。

② <u>南地区は暮らしやすい街のモデルケースであるか</u>

〇暮らしやすい街の定義は人によって異なるため、暮らしやすいと明言はできないが良い点はたくさんあると感じている。

〇一方で、不便な点もあり、両面を有するが、総じて良い街であると自負している。

《以下暮らしやすい街としての具体例》
　・ひかり町内会の地区は、緑が豊かで閑静な住宅街であり、人によってはとても大切な要素として考える程の良い点である。
　・ひかり町内会では、挨拶運動に取り組んでおり、知らない人にも挨拶の声かけすることを心掛けている。
　・近所間の声かけや会話が盛んであり、災害時などに家庭内だけでは対処しきれない問題を抱えた家族は近所で認知していて、有事には助け合うための相談が家庭間でなされている。
　・南地区は、緑地区から始まり、好景気の時に開発がすすめられた、比較的近年（昭和49年頃）造成された新興住宅地のため、若い世代が多い。
　・地区内に小中学校、幼稚園・保育園、市営の図書館もある文教地区のため、子育てはしやすい環境であると感じている。
・子供が遊べる小さな公園が多く、放課後の子供の遊び場も確保されている。
　・コロナ禍を経て行われなくなってしまったものの、子供と地域の大人が協力して一つのお祭りを作り上げようという精神をもとに、過去には子育て平和夏祭りという、町内会単位で出し物を行うお祭りが開催されていた。
　・子育て平和夏祭りがなくなってしまった代わりに、南地区では、子供たちが自主的に企画を行って実施する南ちびっこ祭りを開催するなど、子供たちが主体になって企画をしていこうとする精神が今も根付いている。
・短い夏を満喫するために殆どの町内会が夏祭りを実施している

《以下不便さを感じる点としての具体例》

・1時間に1本ほどとバスの本数が少なく、9割以上の人が車を利用しているため、車を使用しない高齢者はかなり不便を被っている。
・ひかり町内会の地区では、飲食店や娯楽店などはなく、セイコーマートと歯科クリニックが1件ずつある程度で、買い物へのアクセスがしにくい。

③ 南地区の医療体制について

〇南地区の問題というよりも稚内市全体としての問題としてとらえており、医師不足、医療機関不足を実感している。

《以下その具体例》

・稚内市の人口が6千人に対して医療従事者の数は不足していると感じる。
・特に南地区には市立稚内こまどり病院ぐらいしかないため、もっと医療機関が増えてほしい。
・命の危機にかかわる急性期心疾患などを扱うことも多い循環器系の医師が1人しかおらず、さらに増えてほしいと感じている。
・循環器系に関しては今の先生がいらっしゃる前は、車で2.3時間ほどの場所まで搬送しなくてはならず、ドクターヘリも天候によっては飛ぶことができないなど、医師がいないことによって命が左右される場面が幾度となく訪れていた。現状もどの科の医師も不足している現状には変わりはなく、医師不足の問題を危惧されていた。
・税金面や金銭面で誘致政策を行っているものの、中心地から遠く離れた地域であるといった立地柄の問題などから、来てくれる医師は少ない。

④ その他、佐藤様がご尽力されている防災面について

〇体験型で行うことで市民に実体験として身につくように心がけている
・定期的に消防の方から消火器の使い方のレクチャーを行っていただき、その際に市民にも使い方を体験してもらっている。
・災害時に備えて高齢者世帯をプロットしたマップを作成している。しかし、2年程前の情報のため、更新を急がなくてはならないと感じている。
・自然災害は、地震と洪水が多く、先述した通り、何らかの障害によって家庭内だけでは対処が難しい家庭については把握しており、災害時の対応方法が話し合われている。

【考察、仮説と異なっていたこと】

全国的な背景と同様に、少子高齢化の問題や地方から都市部への人口流出の問題、それに伴う空き家問題が生じていることが分かり、南稚内が衰退傾向にあるという仮説は正しかったとわかった。この理由について、若者の進学先や就職先のことを挙げられており、この点については、今回の実習を通し、我々4班一同も、稚内市内で人手が不足している職業と、若者がなりたいと感じている就職先がうまくマッチングしていないという問題を感じたことから同様の意見となった。よって、若者の人口流出を止めるための何かしらの提案が必要だと思い、アクションプラン1として提案させていただいた。

その一方で、大変興味深かったのが、葬儀屋のお話であった。もともとは町内会の住民が協力して葬儀を執り行っていたが、コロナ禍や人口減少などを経て現在は主に葬儀屋に委託されているとのことであり、これは、稚内市にもともとなかった職種の流入によりこれまで培われていた住

民間の交流が閉ざされてしまった悪い例であるように感じた。人口減少の問題などから、町内会での実施が難しく頼らざるを得なくなるという点もあり、物事には多面性があるため一概に否定することはできないが、この点を反省点としてとらえ、今後の改善につなげることができるのではないかと考えた。よって、町民が慣例的に行ってきていたものについて、その実施意義やそれによってもたらされる利点などを再度見直して自覚することで、仮に実施が難しくなり形が変わることになったとしても、本質となる守るべき大切な文化は守れるように心がけていくことが大事なのではないかと感じた。

例えば、現状実施されている夏祭りについては、今回私たちも参加させていただいたが、年齢を問わず多くの町民が集まる交流の場となっており、屋台での販売を通して普段関わる機会の少ない住民同士でも話す機会が生まれている様子がうかがえた。また、近隣住民同士での声がけが盛んであり、お互いの生活をある程度把握して見守り合いができていることや、災害時の手助けについて話し合われていることについては、都内ではほとんど行われていない文化であり、ひかり町内会に根付いたとても素敵な文化である。他にも、南中学校の訪問において、子供たちの自主性が強い地域だと感じていたが、そのような子供たちが育った根底には、子供たちが主体となって作る南ちびっこ祭りの開催など、地域全体として幼いころから子供の主体性を大切に育てていたことに起因しているのではないかと分かった。佐藤様が力を入れて実施されている防災プランについては、住民に実体験として覚えてもらえるように、消火器の講習会を口頭だけでなく実際に使ってみるよう工夫したり、みどりスポーツパークや南稚内活動拠点センターの外壁など、住民が利用する多くの場所でハザードマップが掲載されていたりと、多くの場所でその成果が見られた。これは佐藤様が推し進められた文化ではあるがこういった新しい改革によって生まれた文化も守っていくことが大切だと思う。

こういった、現状ひかり町内会、ひいては南稚内が持つ素敵な文化を、住民が自覚することで、仮に様々な理由から現状通りの実施が難しくなったとしても、その志は残り続けることができるのではないかと考え、アクションプラン2を提案するに至った。

今回のインタビューの目的項目であった「子育てしやすい街のモデルケースであるか」の仮説については、きらきら保育園様への訪問報告にて、佐藤様からいただいた意見と合わせて詳しく考察させていただく。また、「医療が不十分ではないか」という仮説についても南稚内クリニック様からの回答報告とともに考察させていただく。

3-7 横田耕一様　(文責:佐藤磨依)
【概要】
8月21日　14:00~15:00　宗谷友の会

1）経歴
千葉県君津市教育委員会勤務、横田モータース株式会社代表取締役などを経て、1999年稚内市長に初当選。以後、3期連続当選。2011年4月実施の市長選には、出馬せず引退した。自然エネルギーの導入促進に積極的に取り組んでおり、風力発電では74基の風車の導入、また太陽光発電では新エネルギー・産業技術総合開発機構の大規模太陽光発電の実証研究の導入などの実績を残した。

(1)Wikipedia「横田耕一」2024年10月24日最終閲覧
https://ja.m.wikipedia.org/wiki/横田耕一_(政治家)

2）インタビューの目的
5つ目の仮説「南地区は子どもが多いので、暮らしやすい街のモデルケースになるのではないか」を検証するにあたり、市長を務めていらした横田さんから南地区の特徴や課題、それらの課題を解決するための取り組みをお伺いするためにインタビューを行った。

3)インタビュー形式
宗谷友の会の一室をお借りし、南地区班（4班）5名とファシリテーター1名、今回の実習を企画調整してくださった飯田様、前の時間にインタビューさせていただいたひかり町内会会長佐藤様、横田様の計9名で、学生が質問した内容にご回答いただくといった形式で進めさせていただいた。

【分かったこと】
（注釈：南地区のみではなく稚内市全体のことについてもお伺いしている）

1.市長を経験した立場からみた南地区の特色
・稚内には19の町内会がある
・昭和50年代後半に子育て運動が始まり、子育て連携協議会が出来た
・子育ては親だけではなく社会で行うという考えのもと取り組まれる
・人との関わりが希薄になり協力体制が下降線をたどった。本来は地域である子育て運動の中心が学校の先生へとなってしまう
・子どもの数が減っており、人口が毎年７００人減少している
・南小学校は1年生が60名と他の学校より多い
・学校教育においては学力が課題となる
・少子化や人口減少により学校の存続の危機となり合併や廃校になった学校もある

2.南地区特有の課題
・人口流出を抑えることが重要である。就職先はあるがマッチングしない現状にある。出ていったとしても戻ってきてもらえるようにすることが重要である。
・独居が多く中高年者が出ていくことが多く、中高年を取り留めることも必要である
・外国人を除くと稚内市の人口は3万人を切っている
・1人になって息子や娘のところにいかなくても稚内で生活できるよう、稚内で最期を迎えられるよう日常的に支え合える取り組みが必要である

3.その課題に対する取り組み

・稚内には開業医が入ってきている。今後かかりつけ医や総合医がより求められる
・市内に医学部をつくり稚内で活躍してくれる医師を育成することが重要である

4.子育てについて
・南地区は昔から子どもが多く、活気のある地域である
・活動拠点センターや児童館、学童保育所を配置した
・自分で出来ることは自分で行いそのほかは行政が行うとよい。市民に参加してもらい自治組織を活発化する必要がある。
・市内には認定保育園が1か所あり、幼保一元化の園が4つある。子どもが減っていることや共働き世帯が増えていることから幼稚園の存続が難しくなっている。ほとんどの保育士が保育園と幼稚園の両方の資格を持っている。
・すべてを公でやるのではなく民間の力をありることが重要である

【学んだこと】
　人口の流出には進学や就職を機に外に出る若い世代だけではなく、一人で生活が出来なくなった中高年の世代の流出も関係しているということを学んだ。人口流出を抑えるためには高齢者が稚内で最期を迎えられるような制度や環境を整えていくことも求められると考えた。自分で出来ることは自分で行い、出来ないことは行政が行うことで住民が主体性や愛着を持ちながら暮らしていくことに繋がるのではないかと考えた。
　他の地区と比較して南地区は子どもが多いが市全体として減少傾向にある。南地区のみではなく市として子どもを育てていく中で必要な保育園や学童保育所などの施設を設け子育てが出来る環境を整えている。民間の協力も得ながら取り組みを行うようにしていくことで働き世代にとっても暮らしやすい街になると考えられる。今回のインタビューがアクションプランを検討していく中でそれぞれの世代の抱える課題と魅力に着目する考えのきっかけとなった。

3-8 クリニックはぐ　伊坂雅行先生　（文責：髙橋伶奈）

【概要】
8月22日　13：00~14：00　宗谷友の会

1）経歴
稚内に移り住んで12年目で、それまでは名古屋市立大学の小児科、その関連施設で勤めていた。

2）インタビューの目的
1つ目の仮説「南地区の医療体制は不十分ではないか」を検証するべく、他班のインタビューに急遽同行し、稚内で開業されている伊坂先生のお話を聞かせていただいた。

3)インタビュー形式
宗谷友の会の一室をお借りし、潮見班、東班のインタビューに同席させていただいた。

【分かったこと】
当初は「こどもクリニックはぐ」として小児科を行なっていたが、少子化の勢いが止まらないことから、2年前に「クリニックはぐ」となった。医療過疎であると言われているが、道内全体がそうで、日本全体で見ても一個一個の医療機関では医者は不足している。そのため、今いる人材をどうやって守っていくかを考えないといけない。
稚内で行われている開業医誘致制度については、お金の面で援助がありとても助かったそうだ。
地域としては、子育てに関心の無い子育て世代が多い。そのために学校保健委員会などで講習会を行なっている。
喫煙率は高く、特に女性の喫煙が多い印象だそうだ。
潮見中などの学校では、1つの学校では部活のチームが組めないため合同チームで行われているところもある。クラブチームを作ろうという動きもあるが、いつどこで練習して誰が教えるのか、ということが課題である。

【学んだこと】
地域住民を日頃から診ている開業医の先生の目からしても、親世代の喫煙率の高さが気になるのだということが分かった。アクションプランの子どもによる健康教室によって、子どもたちから地域の高齢者や親世代に健康についての情報や取り組みを発信できたら良いと考える。

3-9 南稚内クリニック （文責：廣瀬莉帆）

【概要】

・南稚内クリニックの特徴

内科・外科・小児科・初期検診のほかにも、リハビリや予防接種、日帰り手術、がん検診、在宅医療も行うなど、幅広く手掛けている病院である。

2017年6月に開業医誘致制度を利用して開業された。

・アンケートの目的や狙い

南稚内地域では数少ない、様々な分野を手がけているクリニックであるため、多くの住民が通っているのではないかと考えた。仮説として設けていた「南稚内の医療体制は不十分ではないか」という点に対して医療従事者の立場からの考えをお伺いしたく、アンケートをお願いいたした。

・アンケートの実施形式

南稚内クリニックの医師に向けて事前にアンケートをお願いしており、その結果をFAXで送付していただいた。アンケートの具体的な内容は以下の通りである。

① クリニックにいらっしゃる患者さんの主な疾患
② クリニックにいらっしゃる患者さんの主な受診目的
③ 患者さんの主な年代層
④ 医療従事者から見た南稚内の健康問題について（自由記述）
⑤ 医療従事者が感じる南稚内の医療問題について（自由記述）

【お伺いしてわかったこと】

2件の回答をいただくことができた。

① <u>患者さんの主な疾患</u>

感染症、高血圧、心臓病、糖尿病、関節痛、消火器不全、皮膚炎、不眠、気管支喘息、痛風など、クリニックの特徴に準じる形でとても幅広い疾患を診察していた。

主に疾患の初期段階であるプライマリケア全般に及んで診察をしているとのことであった。

② <u>患者さんの主な受診目的</u>

初期診療、予防接種、定期受診という回答であり、①の回答で得られたプライマリケアを中心としているということがより顕在化した結果となった。

③ <u>患者さんの主な年代層</u>

10~69歳ととても幅広い年齢層の患者さんがいらっしゃることが分かった。対して、10歳未満のお子さんや70歳以降の高齢者の方は多くはないとわかった。

④ 南稚内の健康問題について

喫煙者や肥満者が多く、慢性疾患の治療中断者が少なからずみられる。

また、肥満者が多いことに伴って、高血圧、糖尿病、腰痛、膝痛等を抱える人が多い。

一方で、いまだにコロナ診療が多く、以前の診療状態に戻っていない点もある。

⑤ 南稚内の医療問題について

我々実習生としては医師不足や薬剤不足などの問題があるかなどについて伺えないかと意図していたが、質問文が伝わりにくかったため、有意な回答を得ることができなかった。

【考察、仮説と異なっていたこと】

得られたアンケートより、ほぼすべての領域におけるプライマリケアを実施していることが伺えた。住民にとっては、「市立病院に行くほどではないが、何かちょっと不調を感じるから病院に行きたい」と思うときに利用されている病院なのではないかと考えられる。市立病院の利用者の声には、待ち時間が長いといったものが挙げられており、こういった現状から鑑みるに、稚内市民が求めている医療は、それぞれの専門医の存在も外すことはできないが、なんとなく体の不調があったときに気軽に聞けるような総合診療医の存在ではないかと伺えた。

病院に訪れる年齢層について、10代未満が少ない点は、そもそもの人口数の問題ではないかと考察した。70代以上が少ない点については、様々な病気を合併している方が多く、比較的大きい病院への受診の方が適している場合があるのではないかという点と、南稚内クリニック自体が2017年と比較的新しくできたクリニックであり、クリニックの開業以前からかかりつけでかかっていた病院があったのではないかという点の2つの考察に至った。しかし、その他の年代層については同様に来院していることから、多くの人に求められているクリニックであると読み取ることができた。

よって、これらのことから、市民にとって最も求められている人材は、気軽に通いやすい診療所として位置する総合診療医であり、プライマリケアとして対処できる問題はそこで対処し、必要に応じて、適した科に紹介状を出すことが、市立病院の混雑を緩和することにもつながってより効率的な医療分配になるのではないかと考えた。特に、専門医の人数が少ない稚内市の現状を鑑みてもそういった適切な患者の分配を行うことは大切なように考える。また、それに加え、佐藤様のお話から、特に早期対応が生命維持に直結する循環器系や脳外科系については、専門医の誘致も特に優先的に行う必要があるように感じた。

しかし、実現のためには、全国的に総合診療医の人口自体が少ない点や、医師を呼び込むための財政、制度などについても考える必要がある。佐藤様のお話より、現状税金面や金銭面で誘致政策を行っているものの、稚内は中心地から遠く離れた地域であるといった立地柄の問題などから実際に来てくれる医師は少ないといったことも伺えた。南稚内の医療不足について考えるためには、行政面や医師の考え方なども含めた様々な視点からの情報収集がさらに必要だと考え、今回私たちは、医療の面において解決の提案を行うことは難しいと感じ、思いとどまることとなった。

3-10 きらきら保育園 （文責：廣瀬莉帆）

【概要】

・訪問日時　8/22 13:00~14:00　きらきら保育園様の一室

・きらきら保育園の特徴

稚内ひかり幼稚園と併設された、幼保一元化の施設であり、保育園児、幼稚園児が区分の境なく共に遊んでいる環境である。また、キリスト教施設であり、イースター礼拝やクリスマスなどの行事などが積極的に行われている。

保育園の定員は0~5歳の60人であり、職員数は保育士・事務員・栄養士を含めて21名体制で行われている。

・インタビューの目的や狙い

「資格が取得しにくいことや就職先が制限されるなどの理由から、子供の将来の就職が難しいのではないか」「南地区は子供が多いことから、子育てがしやすい街のモデルケースになるのではないか」という二つの仮説より、稚内外で保育士の資格を取られた保育士さんの考え方や、実際に子育てをしている保護者様と話している立場、子供たちを預かっている立場から育てやすさや問題点など現状についてなにか感じる点があるかどうかをお伺いしたくインタビューをお願いさせていただいた。

・インタビュー形式

きらきら保育園の一室をお借りし、南地区班（4班）2名とファシリテーター1名、園の先生方5名の計8名でインタビューが行われた。保育園の先生が司会をして下さり、事前にお送りしていた質問内容に沿って、一問につき4名の先生と司会の先生の5名の回答を順にお答えいただく形で行った。

また、当日参加できなかった3名の先生には同様の質問項目が記載されたアンケートにご協力いただき、合計で8名の先生方から回答をいただいた。

【お伺いしてわかったこと】

① <u>資格の取得先について、また、なぜ稚内に来たのか、なぜ保育士を目指したのか</u>

・今回アンケートで回答をいただいた先生を含め、お話を伺った先生は、稚内市出身の方が4名、道内他市出身の方が3名、他県出身の方が1名であった。

〇稚内市出身の先生方について

・稚内市で資格を取れる場所はないため、札幌の短期大学や専門学校で取得し、実習の際などに稚内を訪れた。

・稚内に帰ってきて保育士をしている理由は、親が住んでいるため、出身地に思い入れがあるためなどであった。

・稚内市内では資格を取りにくいにも関わらず保育士を目指した理由については、子供が好きだからや、自分が小さいころに担任だった幼稚園の先生が好きだったからといった憧れの気持ちなどがあったことが分かった。

〇道内他市出身の先生方について
・札幌の短期大学や専門学校で資格を取得した
・実習先が稚内の幼稚園であり縁があった先生もいらっしゃったが、多くの先生は、稚内出身の方と結婚したことや、配偶者の方の勤務地が稚内市であったため稚内で保育士をするようになったとのことであった。
・保育士を目指したきっかけは子供が好きだからや、母親も保育士をしていて母親への憧れがあったことなどがあった。

〇他県出身の先生について
・出身県で資格をとり、実習も出身県で行ったが、配偶者が稚内市の人であったため稚内市で保育士をするようになった。
・保育士を目指したきっかけは、高校の時に県外に出たい思いから進路に思い悩んでいた際に縁があったためであった。

② 南稚内は子育てがしやすい街だと感じるか

〇子育てをしやすい街だからという理由で移住する人は少ないように感じるが、子育てをしやすい環境は整っていると感じる点は多くある。

《子供が多い理由について、先生方の考え》
・こまどり、緑地区には他の地区よりも子供が多い印象がある。
・一方で、大黒地区は古くからの商業地区であり、高齢化が進んでいて小さな子供は少ない。
・比較的新たに開発されている地域であり、新築の家を建てて入ってくる若者が多い印象がある。
・市内の若い人が新しく家を建てるとき、小中学校が揃っていて、土地も空いており地価も比較的安い緑地区を選びがちになり、若い世帯が入ってきている印象がある。
・今後年月が経つにつれ、緑地区も年齢構成が変わってくるため、子供は徐々に減っていってしまうのではないかと思う。

《子育てをしやすい環境について、先生方の考え》
・稚内市内の人が、子供の誕生を機に、幼稚園、保育園から小中学校までそろっている緑やこまどり地区に引っ越したいと考える方も多く、学校が充実している点では子育てしやすいのではないかと考える。
・すべての幼稚園において給食があり、親にとっては負担が減るため子育てしやすいのではないかと考える。
・園が実施している「出張子育て支援」は多くの方に利用されており、子育てに悩む親の助けになっていると実感している。
・きらきら保育園では延長保育も実施しており、実際の利用者は少ないものの、受け皿があることは保護者にとって心強いものになっているのではないかと自負している。
・園の散歩時に、町の高齢の方から声をかけられて差し入れのお菓子をいただくなどといったこともあり、町全体として子供たちを見守ってくれているような感覚がある。
・転勤で稚内市外に出られた保護者様から、稚内は子育てがしやすかったという意見をいただいたこともあった。

・一方で、3歳から高校生までの支援は充実しているが、0～2歳児、大学生への助成が不足しているように感じる。保育園の活動では補いきれないところなため、行政が何か対応をしてくれることを願っている。

③ 子供が遊びに行く場所は充実しているか

〇基本的に充実しているが、不足していると感じる施設もある。

《充実している点》

・園の日課の散歩先は園の周りを回る程度であるが、十分に行先はある。火曜日の午前はみどりスポーツパークを借りていたり、図書館やわんぱく冒険広場に行ったりする日もあり、その日の天気や環境から判断して行き先を考えている。
・冬は外の安全な坂で雪遊びやそり遊びをしている。
・わんぱく冒険広場は自然豊か、川や池、春にはオタマジャクシがみられるなど、良い環境であったが、近年クマの出没情報が増えたため、通いにくくなってしまった。
・子供たちから、休日は保護者に、声問ふれあい公園、動物ふれあいランド、駅や副港市場のプレイルームなどに連れて行ってもらい遊んだという話をよく聞いている。

《不十分に感じる点》

・稚内には親水公園が無く、水遊びができるような川などもないため、子供たちの水遊びの場がなく困っている。安心して水遊びできるようなきれいな水がある親水公園が必要である。
・近年クマの出没情報が増えたこともあり、あまり安心して外遊びができない日も増えてきてしまった。
・稚内市には水族館、科学館があるが、幼稚園、保育園生は休日にもほとんど通っていないようである。

④ 子供を預かっていて問題に感じる点や、保育士業界における問題点などは感じるか

《子供を預かっていて問題に感じる点》

・コロナ前までは待機児童問題があったが、積極的な取り組みと、少子化に伴い、現在は入園先を選ばなければ、待機児童数が0になった。
・園で生じた怪我や病気については、園で対処しきれないものについては保護者に連絡して迎えにきてもらい、保護者と保育士が同伴して市立病院や歯科医、耳鼻咽喉科医院等に適宜通院している。保護者は大抵快く迎えにきてくださり、助かっている。

《保育士業界における問題》

・待機児童が減った一方で、少子化が続くと、今後かえって保育士が余ってしまうかもしれないという問題に直面している。出張子育て支援などは、事業を多角化し経営改善をするといった側面も持ち合わせた事業である。
・延長保育など様々な取り組みをしているがきらきら保育園においては、保育士は十分に足りている。
・近年、全国的に言葉の使い方に対して厳しくなっている風潮があり、昔は許されていた言い回しや、悪気なく放った言葉で子供達を傷つけてしまっていないか、ないしは保護者様をご不快にさせないか、常に注意を払う必要がある。

⑤ 預かり時間などから分かる保護者様の働き方について

・延長保育を19:00まで実施しているが、18:00以降残る子はほぼいない現状である。

・学年や年度によってばらつきがあるが、今年度は17時前後にお迎えに来る保護者様が多い。
・パートタイムで働く保護者様も多く、6時間程（8～14時など）の短時間保育を利用される方も多い。

【考察、仮説と異なっていたこと】

保育士という資格については、やはり資格取得のために市外に出る必要があるため、強い意志を持って保育士になりたいと考えた方や市外に出て学習をできる家庭環境が整った家でなくてはならないということが言えた。また、高校生までの支援は行われているものの、大学生以上に向けた支援策が少なく、都市部の大学に通うためにはその分お金もかかるため、金銭のやりくりが大変であるといったお話があった。加えて、稚内市で保育士をやっている理由の多くが結婚相手の勤務先であることや両親が住んでいることなどであり、「自分が稚内市で保育士をやりたい」と感じる理由があるために稚内市で働いているわけではないということが分かった。

これらのことから、今回の訪問で検証したかった仮説の一つ目である、「資格が取得しにくいことや就職先が制限されるなどの理由から、子供の将来の就職が難しいのではないか」という点について、市内で取得できる資格や市内の大学で学べる内容には限界があるため、自分の求める学業を学ぶためには市外に出ることがほとんど必須だといえるが、市外に出て学習をするためには家庭内の金銭的な余裕が必要であり、そういった環境的な問題から自身の学習したい内容を諦めざるをえない子供がいる可能性もあるのではないかと考えられた。加えて、稚内市に戻ってきて働きたいと感じるような動機もないということから、なおさら働き手の流出につながってしまっているのではないかと感じさせられた。

現状、保育士の働き手については十分であるとのことであったが、この社会構造は他の職種にも同様に言えると考えられ、稚内市の人口流出や人手不足の問題につながっているのではないかと考えられた。

「南地区は子供が多いことから、子育てがしやすい街のモデルケースになるのではないか」という検証の目的である二つ目の仮説については、仮説の理論構造が異なっており、子育てがしやすい街であるから子供が多いのではなく、近年開発されている地域で、かつ、比較的安く新居を購入できるという理由から若い世代が入り、結果として子供が増えているということであった。しかし、その一方で、子育てをするための環境もかなり整っているといえた。幼稚園、保育園、小学校、中学校までが同じ地域内に揃っていることや、園が実施している子育て支援制度、子ども課様へのインタビューにてお伺いできた市の子育て支援制度、幼稚園での給食制度、延長保育の実施、町全体としての子供の見守りの風潮、みどりスポーツパーク・図書館・南地区地域拠点センターなどの公共施設の充実、佐藤様からお伺いできた小さな公園が数多く存在すること、定期的なお祭りの実施や子供たちが主体となったイベントの実施など、挙げるときりがなくなるほどであるが、今回お伺いできたこれらすべての取り組みは、十分に子育てがしやすい街だといえる。

こういった特徴を持つ場所は特に都内などにおいても見られるため、モデルケースとして提案できるには至らないが、稚内市が持つとても良い特色の一つであるため、今後もこういった魅力を維持していくことが大切なように感じられた。

また、預かり時間からわかる保護者様の働き方については、多くの子供たちが17時頃にはお迎えが来ている現状から、少なくとも片方の親については定時での終業ができているとわかった。私の知る都内の保育園では19時ごろにお迎えに来る保護者もかなり多く、その差を感じさせられ

た。都内における情報はあくまで私の主観であるため、この点を考察するためには、統計的な情報や、稚内市全体としての情報をさらに収集する必要があり、予想にとどまるが、無理な残業などは少ない可能性が高く、都内よりも就業環境がよい可能性があるのではないかと考えられた。もしそうであれば、稚内市のさらなる魅力の一つとなるため、次年度や再度こういった機会があるのであれば、情報収集や考察をしてみたい要素となった。

3-11 市立病院 （文責・牧野界人）
【概要】
8月22日　15:00-16:00　稚内市立病院にてインタビュー

【インタビュー形式】
　市立病院の一室にて、循環器、研修医、泌尿器科の先生に3班がメインとなってインタビューし、他班は傍聴した。

【インタビューの目的】
　南地区の住民の多くが主に通院していて、市内の医療需要を満たすために大きな役割を果たしている市立病院の現状の把握

【インタビュー内容】
稚内市立病院インタビュー報告書

循環器内科
Q.循環器内科の仕事について
　年間約50人の循環器疾患の患者を診療している。赴任以前は市内で治療が難しく、患者は名寄まで3時間かけて搬送されることが多かった。赴任後、名寄への搬送件数は1/3に減少している。しかしながら稚内での急性期疾患の救急搬送が難しく、特に緊急性の高い病気に対しては対応が限られている。

Q.稚内の患者の傾向について
　高齢者と慢性疾患のケア不足が大きな問題である。稚内では家族の支援が少なく、慢性疾患を抱えつつギリギリ自宅生活を送る高齢者が多い。また、治療後の回復ケア施設も不足しており、入所が難しい現状がある。また、小血管系疾患の改善において喫煙が悪影響を及ぼすため、禁煙指導を強化している。塩分も血圧に大きく影響し、病院食に切り替えるだけで血圧が改善する例が多いが、塩分制限の難しさや稚内市民が病院食の味に不満を持つことも多い。改善が見られない患者には強い警告を発することもある。病院職員でも喫煙者が多く、稚内市の文化として喫煙が根付いている状況が見られる。

Q.困っていることについて
　治療方針の決定における悩みが大きい。医師が少なく、複数の意見を取り入れた判断ができないため、治療方針を独断で決めざるを得ず、日々不安を抱えながらの診療を行っている。

初期研修医
研修医A（女性）：豊富出身で親孝行のため稚内で研修中。将来的に稚内で開業は考えておらず、後期研修終了後は道内であればどこでもよいと考えている。

研修医B（男性）：仙台出身で、将来的にUSLMEを通じて海外を目指している。YouTubeの紹介動画がきっかけで稚内での研修を決めた。放射線科に所属しており、開業予定はない。

研修医C（男性）：道東出身で、職員間の良好な関係が魅力と感じ、稚内での研修を決意。道内での開業意欲が強い。

Q.稚内での医療提供の課題について
　医師に対して患者の数が多く、診療時間が短いことから不信感を抱かれることがある。また、「札幌の医師の診察を希望する」患者も多い。開業医の支援制度はあるが、競争力は高くない。

Q.稚内市立病院の研修人気の理由について
　北大や旭川医大の学生が実習に訪れるなど、初期研修の自由度が高く、給与もよいため人気がある。

泌尿器科
Q.泌尿器科の仕事について
　赴任以前は泌尿器科に常勤医がいなかったため、簡単な手術も名寄に頼っていた。赴任後は簡易手術が可能となり、地域での医療提供を目指している。稚内は喫煙率が高く、膀胱がんの発症率が多い。また、海産物の多い食文化により、尿結石患者も多い。

Q.キャリアについて
　奨学金制度での地域医療従事義務に従い、道内を転々としてきた。現在は指導医資格取得を目指し、将来的には一つの病院で長期的に勤務したい意向がある。経済的な制約があるため、開業は難しいと考えている。

Q.困っていることについて
　名寄にしか放射線科がないため、検査機能が制限されている。道内全体で医師不足が課題となっているため、単一市での医師確保には限界がある。また、救急車を不要に利用するケースが多く、二次医療がなく市立病院がすべてを担っている状況で罰金制度の導入も考慮されるべきと述べた。

【学び】
　稚内市立病院の医師たちは、限られたリソースの中で地域医療の質を高めようとする努力を続けていた。循環器内科の医師は急性期の循環器疾患だけでなく、他の科の病気も診療し、搬送が困難な環境の中、必要な治療を地元でできるように整備していた。また、稚内特有の課題として、慢性疾患を抱える高齢者の生活支援や、限られた回復ケア施設の利用が問題になっており、患者の生活習慣改善が進みにくい背景にも地域性が影響していると感じた。
　研修医たちは地域医療の課題に柔軟に対応しつつ、研修を通じて幅広い経験を積んでいた。患者数に対して医師数が少ないため、診療時間の短縮や待ち時間が長いことが患者の不満に繋がりやすい点は、地域医療に携わる医師が直面する典型的な問題だと学んだ。また、医療への信頼が薄い患者が、札幌の医師の紹介を求めるなど、地方ならではの医療提供の難しさを知った。
　泌尿器科では、地域特有の健康問題として、喫煙率の高さが膀胱がんや尿結石の増加につながっていることが明らかになった。稚内のような港町での禁煙指導の難しさは、医療だけでなく文化や生活習慣との密接な関わりがあり、医療従事者として生活習慣病の予防の重要性を痛感した。
　稚内市立病院の医師不足は奨学金制度である程度補えているが、地域医療の維持には市全体の協力が必要であると痛感した。また、「コンビニ受診」や救急車の不適切利用といった問題

も、都市部と異なる課題であり、稚内のように医療施設が限られる地域での医療資源の使い方の難しさを学んだ。

3-12 西條稚内店（文責・牧野界人）
【概要】
8月22日および8月23日16:00-18:30　店頭にてGoogle Formを用いてアンケート

西條稚内店（〒097-0022 北海道稚内市大黒2丁目8-15）は、稚内市内で最大のスーパーマーケットであり、南地区に近い立地に位置する。周辺住民にとって便利なアクセスを提供し、日常的な買い物に欠かせない存在だ。食材や日用品を豊富に取り揃え、地域の食文化を支えている。また、最寄りのバス停は「西條前」で、公共交通機関を利用する際にも便利な場所にある。

【形式】
店頭にて入店される方にお声かけさせていただき、Google Formを用いたアンケートに対する回答を依頼した。

【目的】
事前学習において、宗谷総合振興局のホームページから、稚内市をはじめとする宗谷管内の方々の食生活を全国平均と比較したときに、塩分が多い、野菜が少ない、喫煙が多いなどの問題があることが分かった。そこで、稚内市民の食生活について詳しく掘り下げ、より具体的な問題点を明らかにしてアクションプランにつなげたいと考えた。具体的には外食の頻度や自炊のメニュー、買い物の時の交通手段を個々に知り、データを集めるというプロセスである。西條が稚内市内で最も大きな総合食料品店であり、南地区の住民が多く訪れる場所でもあるので、稚内市民の日常生活をよく知るためには西條の前に立って直接来店者にアンケートをとるのがよいと考えた。

【アンケート内容】
居住地
多くの回答者は南地区に住んでいると回答。その他には、利尻町、潮見、栄、中央地区、大黒、港、朝日、猿払村、富岡、宝来地区など、稚内市内およびその周辺地域からの回答があった。
スーパーへの訪問手段
車で訪れる回答者が多く、徒歩や自転車、バスを利用する回答もあった。

スーパーや食料品店に行く頻度
週1回以下から毎日まで、さまざまな頻度が報告された。特に、週4-6回訪れる人が多かった。
外食の頻度
週1回以下から毎日まで、外食の頻度は様々で、週1回以下と週2-3回の回答が目立った。
自炊
肉については週1回以下から週7-9回以上まで、多様な回答があり、多くの回答者が肉を少なくとも週に数回食べると答えた。魚を食べる頻度もさまざまで、毎日食べるという回答や週2-3回といった回答が見られた。
献立を考える際の栄養バランスへの配慮
野菜を多く摂ることや、タンパク質や塩分に気を使っているという回答が多かった。具体的には、野菜を意識的に取り入れることが強調された。改善点については、特に改善が必要ないとする回答もあったが、多くの回答者が野菜の摂取量を増やしたい、塩分やカロリーを控えたいといった点を挙げている。

【学び】
　見ず知らずの学生相手にもかかわらず、足を止めて話を聞いてくださる市民の方々が非常に多く、実習生一同稚内市民の方々の人柄の温かさに感動して士気が上がった。
　アンケート結果によると、南地区の住民は自炊を重視し、栄養バランスを意識しているものの、一部の回答者からは肉や魚の摂取が不足しているとの指摘もあった。これは、特定の食品群に偏りが生じている可能性を示唆しており、改善の余地があると考えられる。特に、成長期の子供や高齢者においては、バランスの取れた食事が必要不可欠であり、全体的な栄養摂取の見直しが求められるのではないかと感じた。
　また、多くの住民が健康的な食事を意識している一方で、「糖分や塩分を減らしたい」といった具体的な改善点も挙げられている。これは、健康意識が高まっている一方で、実際の食事においては意識した改善が十分に進んでいない可能性がある。このような状況から、栄養教育や料理教室などのサポートがあるとニーズに合致するのではないかと思う。
　外食の頻度が低いことは、経済的な理由や健康志向が影響していると考えられる。住民が自炊を選択する理由の一つには、健康を意識した食事があると思った。
　栄養に関する情報提供を通じて、住民が自らの生活習慣を治すきっかけができるとよいと思った。特に子どもや高齢者に向けた健康教育プログラムは家族全体の生活習慣見直しに繋げることが期待される。特に南地区の住民は栄養バランスや健康への意識が高まっている一方で、実際の生活習慣には改善の余地があるので、地域全体での取り組みを通じて、住民が自らの生活習慣を見直し、より健康的な生活を送るための環境を整えて地域全体を活性化してゆけるとよいと感じた。

3-13 稚内市立稚内南中学校　（文責・木戸なつみ）
【概要】
8月23日　13:00-14:00　稚内南中学校にてインタビュー

　北海道稚内市緑1丁目にある中学校。同市緑・こまどり・大黒1 - 4・末広1 - 2・西浜・抜海地区（以上稚内南小学校）と港地区（以上稚内港小学校）の校区を学区とする。2007年3月に抜海小中学校と統合し、現在に至る。南地区の発展に伴い徐々に生徒数が増加したが、ここ最近は横ばいか減少しつつある。
　教頭先生にインタビューを行い、資料として「学校要覧」をいただいた。

【インタビュー形式】
　稚内中学校の校長室にて、教頭先生に班員3名、ファシリテーター1名でお話を伺った。

【インタビューの目的】
　仮説C、仮説Eにおいて、子どもが育つ環境の一つとして教育機関があると考え、教育の現状と子どもたちの様子、進路や将来についての情報収集のためにインタビューの機会を設けさせていただいた。また、仮説Eに際して、事前情報として南中ソーラン誕生のきっかけが南中学校だったという情報があったため、南中ソーランについての情報を得るためにお話を伺った。

【インタビュー内容】
①南中ソーランについて
・かつては中学校自体に荒れの時代があったが、そのエネルギーを何かに向けたいと、南中ソーランが作られ、生徒の影響が及ぼされた。南中ソーランは手段でしかなく、荒れの原因は勉強が分からないことだと考えている。授業が分からないことから勉強が面白くなくなり、非行に走るという悪循環が生まれてしまった。
②学生の進学、就職について

・やりたいことを突き詰めたときに、部活も含め自分がやりたいと思ったことが道外だったら道外にいくようになる
・より高いレベルの高校に行きたいという勉強面の高い志で道外・稚内外に行く人もいる
・高校・大学進学を機に一人暮らしをするとなったときの金銭面の補助において公立では助成金はない
・高校進学の際、1人暮らしをする時の金銭的な補助はない（公立）
・医学系の学生に対してはどこに行っても無償、返還不要な補助が民間も公的もある。
・家業を継ぐ人は0ではない
③教師間、生徒間のつながりについて
・保護者だけではなく地域で子どもを見守り育てるためにコミュニティスクールを実施している。
・小中で一貫した教育が出来るように教師間で連携している（EX中学校教師が小学校に行き、躓いているところを知る・小学校教師が中学校に行き、どのように教えているのか知る）
・通学路の清掃や中学生が小学校で総合での学びを発表するなど、小中での交流がある
・月に一回の全校でのレクリエーションは、生徒会が自主的に計画し、実施、適切なフィードバックをもらう。とても活発で、子どもたちがやりたいことができるようにしている。
・高校とのつながりとして、進路が決まった高校三年生が小学校を訪れ、ミニ先生として活躍してくれる。
・全校や地域でのレクリエーションはその時のつながりが郷土愛につながっていくことになるかもしれない。そして、上の学年に対して下の学年が憧れ、高学年になったときにまた下の学年に見せていくことができる。
④地域とのつながりと就職について
・市の取り組みで一年生対象にジョブフェアを実施（賛同している企業が仕事内容を説明）キャリア形成のために有益な機会である。
・2年生を対象に職業体験を実施（稚内にある企業、車屋、スーパー、学校の先生（母校）、自衛隊、消防署等が快く受け入れている）
⑤タブレット学習について
・タブレット学習は、一日一回は利用して学習している。家庭でもタブレットで学習している。導入において、教師への負担はぐっと増えるが、学校全体がタブレット学習に慣れていくことで負担は徐々に減っていく。生徒の声としては賛否両論で、生活アンケートでは7割はタブレットでの学習は分かりやすいと回答してるが、残りの3割程度はノートに書く授業に戻してほしいという意見である。デジタル教科書と言って、教科書も電子化されている。利点は、クリック一つで音声が出てくることだが、馴染まない生徒がどうしてもいる。そのため、タブレットは文房具の一つのような位置づけで、タブレットの使用が目的にならないように使いやすいもので勉強していこうという方針を持っている。ICTの導入によっての効果はこれといって結果に差はない。
⑥教師の人手不足について
・教師の人手不足について、10時、11時まで仕事をすることもある。求めるものが高ければ高いほど時間を要する。週に一回学級だよりを書いている。宗谷管内では、小学校も中学校も週に1回出そうという方針だが、少し頻度が高いのではという指摘もある。昔は子どもたちの近況が保護者に伝わりやすいため配布していこうという流れがあった。
⑦見守り体制について
・生徒がいつもと違う様子だとすぐに多方面と連携をとるようにしている
・全国的な傾向として、担任まかせだが、稚内では集団として学校として組織として負担を軽減したり、辛そうであれば先生同士でも協力したりしてみんなで協力するネットワークが残っており、子どもたちの学力や人間性を底上げしようという努力をしている。
・民生委員との連携をしている（月に一回の定例会に中学校の先生も参加している）

こういうことを頑張っているので応援してください、心配なご家庭があれば民生委員に見守り活動していただけませんかと説明することもある。
⑧地元愛の形成への教育について
・子どもたちが稚内市に戻ってくるためには何が必要なのかというと、地元を愛する気持ちや愛着なのではないかと考えている。人とのつながりが大切なのではないか。地元に愛着がなかったりすると新たな土地でコミュニティを作るようになって、戻ってこないことにつながる。そのため、学校教育だけではできないので、稚内市とともに協力している。
・最後に南中ソーラン資料室を見学させていただき、トロフィーや紅白歌合戦に参加した時の写真や法被などを見学した。

【仮説との相違点】
仮説Cに関して、生徒が学びたいと考えた学問が市内になければ、その高い志のまま市外へ出て教育を受けるという現状があることを知った。しかし、医学系の学生以外に、金銭面での補助が ない。金銭面を考えると市外へ出やすい状況ではないが、学びたい学問、スポーツ等のために市外へ出る人も少なくないという情報を得ることができた。一方で、ジョブフェアや職業体験の開催など、市内にある職種を学び体験できる機会が設けられ、地域にある仕事へ関心を持ちやすい環境が作られていることが分かった。なりたい職業が明確にあって、資格取得できる教育機関がなくても、稚内市の魅力を子どもたちが感じて戻ってくることで稚内市での就職につなげることができる。そのために、郷土愛を大切にした教育がなされ、市内の職業を知ることのできる機会が提供されていると考える。よって、教育を受けるために市外に出ても、最終的に稚内市に戻ってくるということに期待しているのではないかと考えた。
仮説Eに関して、中学校では他学年とのつながりを大切にした主体性のある教育がなされていることが分かった。また、地域とのつながりにも重きを置き、民生委員との協力やジョブフェア、職業体験での地域との協力なども行われていることで、街ぐるみで子どもたちの成長を支えていこう、見守っていこうという雰囲気があるのではないかと感じた。

【学んだこと】
アクションプランの立案に大きく影響のあるインタビューとなった。また、稚内市では子ども一人一人にフォーカスできるような丁寧な教育と、子どもたちの将来を考えた稚内の魅力を学べるような取り組みを行っていることが分かった。特に、ジョブフェアと職業体験の開催について私たちは着目し、インタビューの中で郷土愛が稚内市に戻ってくるきっかけとなるのではないかというお話もあったが、中学生までの間に地元にある職業や会社を知ることにより、子どもと働き手をつなげることができて、ジョブフェアと職業体験の充実化が将来像の構築に大きく影響するのではないかと考察した。
また、インタビューでは児童生徒の縦のつながりがあることも学び、生徒会をはじめとする積極性の高い学生が多いことも知ることができた。歳が少し上の先輩の背中を見ることによって、数年後の自分をイメージしやすくなり、憧れが下の学年の生徒たちを成長させることができるのではないかと考えている。学年を超えたつながりの伝統化に期待し、今後もレクリエーションや地域の清掃などを通してより活発な関係づくりを行っていただきたいと感じた。

3-14 北海道稚内高等学校衛生看護科　(文責:佐藤磨依)
【概要】
8月23日　16:00~16:30　稚内高校

1.懇談形式
稚内高校の一室をお借りし、衛生看護科の生徒の方と慶應義塾大学看護医療学部の学生が半分に分かれ、それぞれのグループで懇談をさせていただいた。

【学んだこと】
早い段階で将来のことを考え、学ばれているという印象を受けた。また将来どのような看護職につきたいのかすでにイメージされている方が多かった。生徒の方は将来稚内を出て働きたいと考えていた。将来のはっきりとしたイメージがあるため、やりたいことが出来る病院等を求めて市外に出るのではないかと考えた。稚内でも学びたいことが学べ、活かしていける環境を整え、そのことを知ってもらうことが稚内の未来の医療を支える医療従事者を育成するうえで必要なのではないかと考えた。稚内市以外の出身の生徒の方もいらっしゃり、稚内高等学校衛生看護科が看護を学ぶ場として大きな役割を果たしていることが分かった。

3-15 成田功様 （文責：廣瀬莉帆）

【概要】

・成田さんの経歴

高校時代に父親の跡継ぎになりたいと考えていたものの、体力仕事であることや、当時の沿岸漁業は正当な給与評価がされておらず不遇であったことから反対されており、学業を機に一度札幌に出て3年ほど食品会社で勤めていた。

しかし、療養のために稚内に戻ってくるきっかけがあり、その際にやはり漁業に携わりたいという強い思いを持ったため、1977年に漁業者になり、現在まで約47年漁業に従事している。長い間ホタテ漁師として活躍していたが、59歳の時にホタテ漁を引退し、現在の沿岸漁業の漁師となってウニや昆布漁に携わるようになった。良質のウニがいる場所をつぶさに調べ上げてよい漁場を探す惜しみない努力により、成田様のウニはブランドウニとなっている。

現在まで引き継がれているホタテの養殖業の先駆けにも参画するなど、漁業業界が直面した問題を改善するために様々な尽力をされてきた方である。

・インタビューの目的や狙い

「南地区は衰退傾向にあるのではないか」という仮説のなかで、全国的に言われている第一次産業のなり手不足の問題から、稚内市の漁業についても衰退や後継者不足などの問題があるのではないかと予想をし、現在の稚内市の漁業の実態をお伺いすべくインタビューをお願いいたしました。また、「子供の就職先が制限されてしまっているのではないか」という仮説に対して、漁業業界では世襲制が多いのかといったこともお伺いできればと考え、お願いいたしました。

・インタビュー形式

成田さんのご自宅に訪問させていただき、南地区班（4班）3名と今回の実習を企画調整してくださった飯田様、成田様の計5名で、学生が質問した内容にご回答いただくといった形式で進めさせていただいた。

【お伺いしてわかったこと】

《前提となる宗谷のホタテ漁の歴史について》

昔は宗谷漁業協同組合と大岬漁業協同組合の二つあったが、大岬漁業協同組合が主に扱っていたニシン、ホタテが、捕りすぎによって漁獲量が減ってしまい、組合が成り立たなくなった。そのため、昭和39年度に二つの組合が合体して、現在の宗谷漁業協同組合となった。

合併直後から増養殖に力を入れることとなり、ホタテの増養殖に成功した漁場に直ぐにその手法や情報を聞きに行き、アドバイスを受けて漁場を改良した。

まず、稚貝が食べられないように漁場中のオニヒトデを全て除去し、その翌年、12万粒の稚貝を放流してさらに翌年の生存率などを調べた。

生存率が高かったことから、漁場改革が成功したと判断し、当時の市長であった浜守市長に支援をお願いして、昭和46年に、100万円近くの支援金によって100万粒の稚貝を放流した。この時の稚貝を昭和50年から収穫するようになった。

こういった漁場改革の事業は成功後も続けられている。

今回インタビューさせていただいた成田様は、父親から共同事業参加への反対を受けていたため、昭和55年から遅れてホタテの増養殖事業に参画した。

改革当時はホタテの漁獲量が少なかったことや、ホタテの価格が適正に評価されていなかったことからあまり稼げなかったが、徐々に3倍近くの漁獲量になり、ホタテの価格も適正評価され、年間50億円くらい稼げるようになった。

ところが、かえって供給量が需要量を上回るようになり、昭和60年頃に一枚100円弱まで料金が低下してしまったものの、こういった経緯を経て漁獲量の調整などを行い続け、現在では、一昨年は120億円を超え、昨年も100億を超える収入となった。

過去の経験を活かしながら、宗谷の漁業はずっと上向き傾向にあり続けている。

① <u>稚内市の漁業は衰退傾向にあるのか</u>

〇衰退傾向にはなく、逆に稚内の経済を支えている産業である。
- ・ホタテによる収入だけでも100億円を超えているため、市の経済にとってとても大きな収入源になっている。
- ・特に、ホタテはふるさと納税の返礼品などにもなっており、そういった面からも市にとっての大きな財源である。
- ・緑地区のお祭りと宗谷の藩士の慰霊祭が同日に開催された際も、市長は慰霊祭のほうに出席したほどであり、大きな財源を生み出している宗谷地域が大事にされているという自覚や感覚も持っている。
- ・現状、市を引っ張っていく側の産業であるという自覚がある

② <u>稚内市の漁業組合の決まりや制度、漁師の生活習慣、労働環境について</u>

《漁業組合の決まりについて》
- ・漁業者は皆組合に加入しなくてはならない。

・組合のルールによって、100日以上他の漁業船で経験を積まないと竿を持つことはできない。
・さらに、自分の漁業戦を持てるようになったのち根付漁業にはすぐに従事することができるが、他の商売はすぐには経験できず、最低でも1年間は経験を積まなくてはならない。
・現在では、ホタテ漁師は6年間、なまこ漁師は3年間漁業に従事しないとなることはなれず、徐々に厳しくなっている。
・ナマコ漁はノルマ制を引いており、ノルマを達成した場合は、漁のオフシーズンを待たなくても漁に出ることを辞める決まりがある。
・組合内規でホタテに参画している人数はきめられており、さらに、ホタテ漁師は他の漁業への参画を制限されている。（制限されなくとも他の商売ができる余裕もない）

・ホタテ漁には定年制があり、62歳までしか参画できない。
・またウニ漁などのほかの漁業についても兼任の制限などが設けられているが、各漁船についてそれぞれ高度な技術が必要になるため、同様に制限があったとしてもほかの漁業をできる余裕はない。
・こういったルールがあることで、1つの漁家が儲けすぎることがなく、とてもバランスがよく稼ぐことができている。

《漁師の生活習慣について》

注釈：成田様は、現在主に、タコ漁、コンブ漁、ウニ漁に携わっており、時期的な問題から、今回はコンブ漁、ウニ漁について話を伺うことができた。

5:00	コンブがとれる日は、まずコンブ漁に出る 一度帰港し、再びウニ漁のために出港する
10:00（8月までは9:00まで）	天候次第ではこれよりも早く帰港することも 帰港後、その日の収穫分を一晩海水に漬け置く
夕方	海水に漬け置いていた前日分の収穫を引き上げる
作業後	就寝
0:00	起床
2:00	漬け置きするための海水作り ウニを割って製品化する仕事　などを行う
5:00	再び出港

・働き方改革の一環で日曜日は休船の日になったが、休息をとるなどして過ごしている。
・しかし、磯漁業については休みがなく、オフシーズンを除くと、5/4~6のゴールデンウイークと8/13~16のお盆休み程度しか休みがない。

・11月から4月1日までの冬の期間はオフシーズンとなり休船する。
・オフシーズンはストレッチや筋力トレーニングを行い体力の維持を行っている。

《漁師の労働環境について》

・働き方改革を経て、労働環境がかなり見直された。これにより、漁業者が自分自身の時間が確保されるようになった。

・また、昔はホタテの価格が適正に評価されていなかったが、徐々に適正価格に評価されるようになり、漁業者が適正に給与を受け取れるようになった。また、経済的に豊かになり、車を持てるようにもなったことなどから市街地への出荷も速やかにできるようになり相乗的に豊かになっていった。

・3,4年前くらいから昆布漁の教育を積極的に行う制度が始まった。新卒の方やUターン帰省で漁業に従事するようになった方に、早めに経験を積ませて、仕事を早く覚えてもらうために、初期の漁業従事の制限を緩和し、昆布漁のみ参加可能として、少し竿を下す許可も出るようになった。

・宗谷以外でこういったことをやっている組合を聞いたことはないが、宗谷漁業組合は、組合の取り組みとして若者を育てていこうという風潮がありこういった教育活動に専念している。

・また、北海道漁業連盟は毎年勉強会をしており、こちらにも参加している。青年部を組織し、海から帰ってきてからロープをどのように結ぶかということや、ロープが切れたらどうするか、などの仕事内容を勉強させている。

③ <u>若い世代は漁業に興味をもっているのか</u>

〇宗谷漁業組合では後継者不足には困っていない

・一家に一人ではなく、子供たちも全員が漁業組合に入ることができる仕組みにより後継者には困っていない。

・特に、ホタテ漁については父親が権利を手放すと子供たちが権利を継ぐこともでき、こういった背景から、ご両親がホタテ漁をされている方は積極的に後を継ぐ。

・また、ホタテ産業自体がとても儲かる業界であることから、漁家以外からも積極的に参加をする若者も多く、後継者不足に感じたことはない。

・共済制度もかけられているうえ、自然災害に備えるために組合の積立金などの対策も行っているため、自然相手の産業ではあるが、ある程度安心して漁師になれる環境が整っている。

・一方で、他の地域では後継者問題に困っているという話も聞くが、その点については詳しくない。

④ <u>稚内市の漁業の今後の展望についてどのようにお考えか</u>

〇人材問題よりも、海洋環境の問題については先行きに不安を覚えている。

・漁場管理には成功しており、漁業資源が絶えないような工夫ができている。

・後継者に関しても困っておらず、次世代の担い手も十分にいる状態である。

・一方で、昆布、ウニ漁については、海水温の上昇により吸虫という虫が増え、これが付着することで質が落ちてしまっている。

・また、吸虫は、ホタテに関しても身を刺し、黒色の斑点ができてしまう。

・さらに海水温の上昇により、そもそも海藻や昆布が育たなくなってしまうのではないかという不安がある。

⑤ 成田様が考える、稚内市の現在について

〇経済的にゆとりがないと様々なところで破綻が生じてしまう。

《200海里問題について》

・200海里以内の漁獲に限られてしまったため、遠洋漁業における漁獲量が限られるようになってしまった。
・ロシアが主張する200海里ラインと日本が主張する200海里ラインが異なっており、ロシア側が日本に侵略している。漁船の安全のために、日本側が緩衝地帯の手前で境界をひいているため、なおさら本来の漁獲できる範囲よりも狭い範囲でしか漁が行えない。
・二度にわたるオイルショックがあり、遠洋まで出て多くの燃料が必要となる遠洋漁業の船は減船が繰り返され、衰退していってしまった。

《国鉄民営化に伴う大規模リストラについて》

・国鉄が民営化した際に、大規模なリストラが行われ、多くの人が仕事を失ってしまった。
・さらに、市街地には国鉄の社員が多く住んでいたため、地域全体として貧困化してしまった。

200海里問題による減船と民営化によるリストラの時期が重なり、多くの過程が貧困に陥った。こうした生活の中で、離婚や家庭内暴力が横行し、このような家庭環境で育った子供たちはそのはけ口を学校に見出したため、学校も荒んでいってしまうなど、多くの問題が引き起こされた。

〇今後新しい産業が入り、経済的な貧困が繰り返されないことを願っている。

総数で見ると、宗谷小学校の生徒は減っており、現在では20人足らずしかいない。しかし、漁業に使うトラックと、自家用車を分けて持つなど、車を何台も持てるようになったこともあり、不便さが改善され、市内のスーパーも車が十分に停められる広い駐車場を持っていて不便をしないことから、漁師たちが宗谷側に住みやすくなったことから、宗谷地域では、子供が少しずつ増える見通しが立っている。対して、稚内市の市街地側は、子供が徐々に減っていってしまっている。成田様は、市の人口減により、市の税収が減ってしまうことで、再度地域全体的な貧困が引き起こされ、歴史が繰り返されないことを願っていた。そのため、何か新しい産業が入り込み、若者が働けるような環境が整うとよいと考えていらっしゃった。

また、こういった考えの一環として、成田様ご自身が、乾燥ホタテのパッケージのリニューアル企画を起こし、手に取ってもらいやすいデザインになるように工夫を凝らすなどの事業を行われた。大きな企業の呼び込みでなくとも、こういった事業がさらに流通などに豊かさをもたらすなど良い影響を与え合うと考えていらっしゃった。

《宗谷中学校のカリキュラムについて》

成田様のパッケージ企画などの前例や宗谷漁業のこれまでの歴史をもとに、中学校教育の改革が行われ、宗谷中学校では、1年生の時に漁獲体験、2年生の時に加工製造体験、3年生の時に修学旅行先にて販売する体験を実施するといった、地域産業の一連の流れを体験するプログラムが組まれている。

【考察、仮説と異なっていたこと】

大前提として、稚内市の漁業が衰退し、後継者不足の問題に陥っているのではないかという仮説が大きく間違っており、宗谷の漁業は市の財政を大きく支えている産業であるとわかった。また、世襲制によって子供の就職先が制限されているのではないかという点についても、確かに親子間で後を継ぐことも多いが、成田様ははじめお父様に跡継ぎになることを反対されていたり、Uターン帰省後に漁師になる方もいらっしゃったりすることや、現状稚内において漁業が栄えている産業のため、望んで跡継ぎになる方が多かったりすること。また、飯田様のお話より、家族内に全く漁師の方がいなくても志願して漁師になる方がいるなど、就職先の制限といった傾向は見られなかった。私たちの中で、稚内市の漁業への認識が大きく間違っていたことを、今回のインタビューを通して学ぶことができた。

今回のインタビューにおいて、特に、宗谷地域の沿岸漁業の分野については、乱獲による資源の減少などを経験した後、その反省点を踏まえて様々な対策を行い、安定した漁業業界の維持のために力の限りを尽くされてきていることが分かった。また、徐々に栄えた沿岸漁業に対して200海里問題を境に衰退してしまった底引き漁船については、詳細は飯田様のインタビュー報告の項目にて触れるものの、様々な要因によって引き起こされてしまったものであるとわかり、底引き漁で大きく稼いでいた過去の状況に戻すことを考えるよりも、現状発展の余地が残っている沿岸漁業に力を尽くす方が業界全体を見たときに結果的に良い影響を与えるのだということも分かった。

また、漁業によって栄えている宗谷地域においては、現状子供の数は少ないものの増える見通しが立っているとのことであり、経済的な豊かさが、子供を持つ判断の一助になっているのではないかと感じた。全国的に言えることであるが、現在、従来であれば子供を産んでいた世代が、十分な金銭的な余裕がなく子供を持たない選択をし、家庭によっては、金銭的な余裕ができてからの高齢出産を選ぶ家庭が増えている。高齢出産は医療的リスクも高く、推奨されるものではないため、なるべく若い世代が将来に対して不安を抱かずにいられる安定した業界が増えることが、人口減少の進む地域には必要なのだと感じた。

どういった産業が安定した産業に当たるのかについては浅学でありあまり発想が得られないが、現状稚内市において安定した産業である漁業にあやかり、その加工産業、パッケージングのデザイン業、高品質を保ったまま全国に輸送するための専門運輸業などはこれに該当するのではないかと感じた。現状こういった産業の成り手は外国人労働者であることが多いが、これらの産業をより魅力的に発信したり、初期投資として市の助成から賃金を上げたりし、稚内市民が主な成り手になるようにした場合、収入の安定感から出産をする選択肢が生じる可能性があるのではないかと考えた。

しかし、この案には問題が複数ある。まず、現状は安定している漁業業界であるが、あくまで自然を相手にした産業であるため、大きな自然災害や環境変動によって今後大きく状況が変化してしまう可能性があること。また、先ほど挙げた業界で現在働いている外国人労働者の働き先がなくなってしまうこと。現状存在する業種に対して、仮に新しい会社として立ち上げた場合、地域に根付いたこれまでの企業が衰退してしまう要因となる可能性があること。などである。これまでの稚内市の住民の生活を脅かすことは地域に寄り添った地域診断ということはできないため、今回、アクションプランとして提案するに至れなかった。

3.15 稚内市立稚内港小学校（文責・牧野界人）

【概要】

8月27日　14:30-15:30

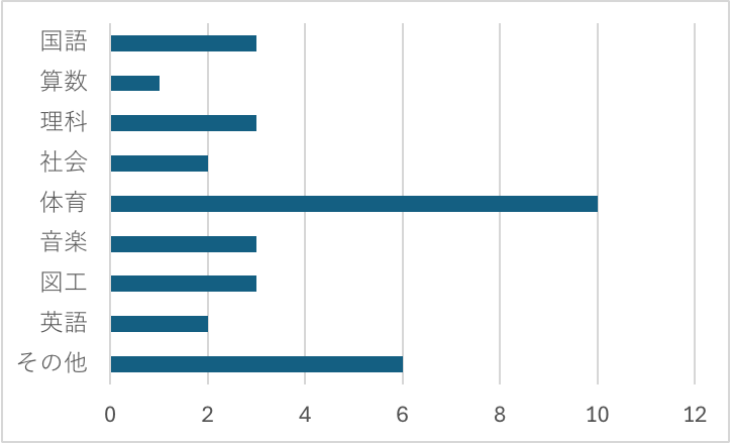
【形式】
　実習生6人によるキャリア教育、および禁煙教育の授業の後、実習生主導でGoogle Formを用いたアンケートを行った。

【目的】
　このアンケートは、事前調査で設定した5つの仮説の検証を目的として、稚内市南地区に住む児童およびその家庭環境に関する情報を集めるために実施した。仮説A「南地区の医療体制は不十分ではないか」に基づき、児童とその家庭が医療体制についてどのように感じているかを把握するため、家族の健康管理や生活習慣についての質問を設けた。具体的には、保護者や同居する大人が日常的にたばこを吸っているか、あるいはお酒を飲んでいるかに焦点を当て、家庭内での健康に対する意識を探ると同時に、地域の医療や健康教育がどれほど必要とされているのかを測るためである。また、たばこやお酒の摂取状況は家族の健康意識を示すとともに、地域の医療体制が適切に機能しているかどうかを推測する材料になると考えられる。これにより、南地区での医療支援や健康指導の充実度についての意見が得られることが期待される。
　仮説B「南地区の住民の生活習慣を改善すべきではないか」の検証のため、食生活や生活リズムに関する質問を通じて、児童の食事時間やその内容についての傾向を調査した。例えば、「食べている時間に〇をつけてください」という質問により、家族の食事習慣や食事の時間帯に関する情報が得られる。規則的な食生活が確立されていない家庭や、間食が多い家庭がある場合、栄養指導や健康促進のための地域レベルでの取り組みが必要とされる可能性が浮かび上がる。さらに、家族がどのような生活習慣を有しているかを知ることで、住民全体における生活習慣病のリスクを評価する手がかりとし、今後の地域改善策の検討材料としたい。

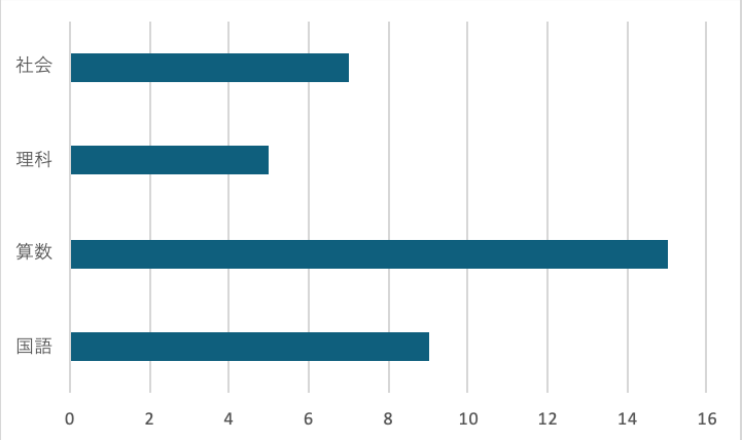
　仮説C「こどもの将来の就職が難しいのではないか」については、南地区の子どもたちが将来の職業についてどのように考えているか、また就職に関する現状の課題を把握するために、「将来の夢」や「どこで働きたいか」に関する質問を設けた。地域内での職業の選択肢が少ない場合、子どもたちは将来、地域を離れて都市部での就職を検討する可能性が高まると考えられる。そのため、地元で働きたいと感じる児童の割合や、特定の職業を目指す児童がどの程度存在するかを把握することにより、地域の経済的な課題や、雇用機会の創出がどの程度望まれているかを知ることができる。さらに、家業を継ぐ意思があるかどうかに関する質問も加えることで、地域内の事業承継の現状と将来の後継者問題についての理解を深める。
　仮説D「南地区は衰退していて、改善が必要なのではないか」については、児童が南地区に対して抱いているイメージや、地域での日常生活の中で感じている利便性・不便性についての質問を通じて検証した。例えば、「皆さんが住んでいる町の好きな点」「不便な点」に対する回答は、地域の魅力や住みやすさについての実感を反映するものである。児童の視点から見た地域の現状を把握することにより、地域の魅力を再発見し、改善すべき点を特定するための貴重な手がかりが得られる。また、児童が都市部の便利さに憧れを抱いている場合、南地区のさらなる開発や生活インフラの整備が必要とされることが示唆される。仮説E「南地区は子供が多いので、育児しやすい街のモデルケースになるのではないか」に対しては、児童の放課後や休日の過ごし方、学校に対する満足度に関する質問を設けた。「学校は楽しいですか」や「放課後や休日は何をして過ごしていますか」といった質問を通じて、児童がどれほど充実した日々を過ごしているかが明らかになるとともに、放課後や休日に利用できる施設の充実度や、地域社会の支援体制についての意見が収集できる。また、将来の夢や将来の働き場所に関する質問から、児童が地元での生活にどれほど愛着を持っているかを知ることができるため、育児しやすい街としての南地区の可能性が見えてくる。
　仮説AからEに基づき、本アンケート結果から、地域が抱える課題と児童や家庭が感じる問題点を具体的に把握し、地域社会が今後どのような取り組みを行うべきかを明確化することが目的で

ある。特に、医療体制の改善や健康教育、地域の経済基盤の強化、地域内の事業承継問題、住みやすい環境の整備など、南地区が子どもたちの未来を支えるための具体的な施策を考えるための参考となることが期待される。

【アンケート内容】
学校生活の現状
　調査結果からは、多くの児童が学校生活に前向きな印象を抱いていることが確認された。特に、得意な教科や好きな科目については「体育」や「図工」、「音楽」といった身体的・表現的な活動が多く、学びを通じた自己表現の場として学校を捉えている様子が伺える。一方で、「算数」や「国語」といった基礎学力科目に対して苦手意識を持つ児童も一定数見られた。

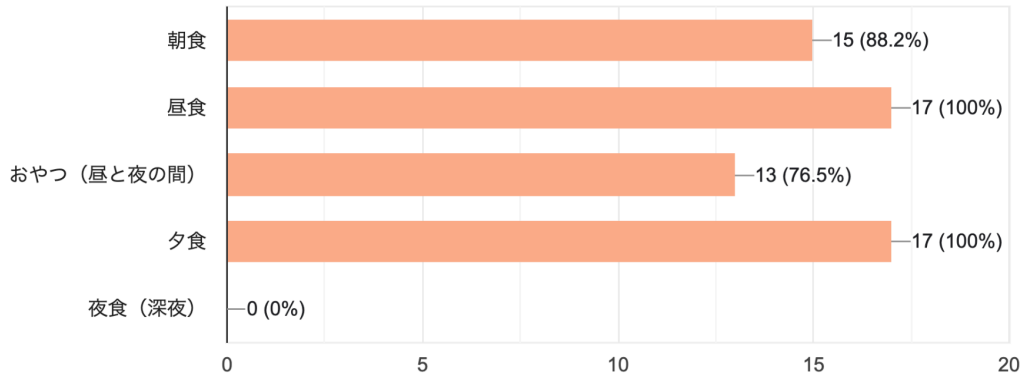


生徒の得意な科目



生徒の苦手な科目

生活習慣と食事の状況
ほとんどの児童が「朝食」「昼食」「夕食」の三食を毎日とっているが、間食として「おやつ（昼と夜の間）」を摂取する児童も多いことが分かった。食事の時間に関する回答からは、家庭ごとの生活リズムに基づいた多様な食事スタイルが見られる。



放課後や休日の過ごし方

放課後や休日の過ごし方としては、「ゲーム」「アニメ鑑賞」「スポーツ活動」「友人と遊ぶ」などの娯楽活動が挙げられた。特に「ゲーム」や「YouTube」といったデジタルメディアの使用が一般的であり、デジタルコンテンツが子どもの遊びに占める割合が増加していることが伺える。また、「犬の散歩」や「家族との買い物」といった家族との交流を重視する声もあり、地域における家族の絆の大切さが表れている。

将来の夢と職業意識

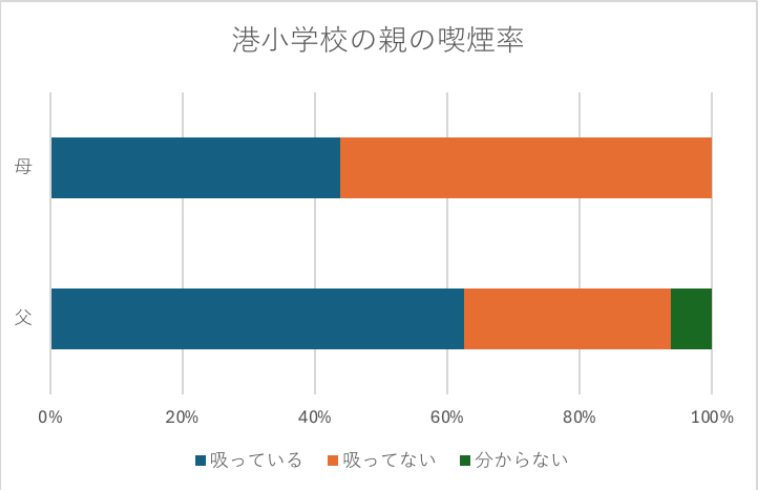
将来の夢についての質問では、「看護師」「保健師」「イラストレーター」「プロ野球選手」「ケーキ屋」といった具体的な職業が挙げられる一方で、将来の目標が決まっていない児童もいた。地域の経済基盤が限られる中で、医療や福祉、デザインといった多様な分野に対する興味を持つ児童が見られた。また、「家業に関する質問」では、家族代々の事業を継ぐかどうかを悩む回答が散見され、地域での継業の難しさや若年層の都市部への移住を促す要因として後継者問題が浮き彫りとなっている。これに対し、地元に貢献したいという児童も一定数存在した。

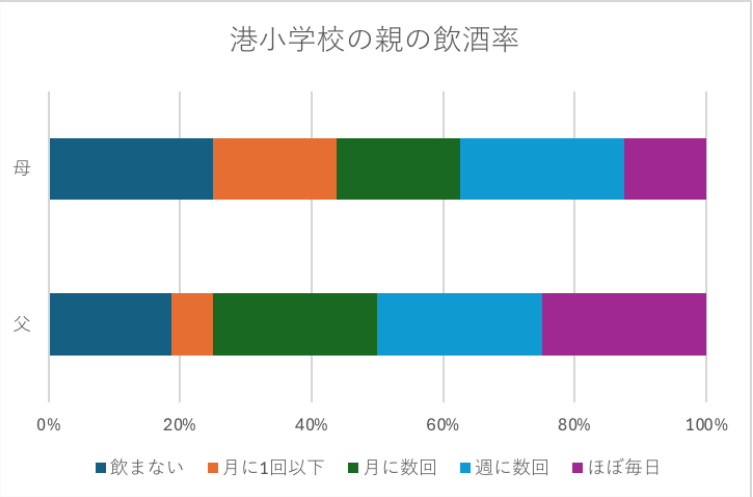
生活環境の利便性と不便さ

地域の生活環境に対する評価としては、自然の豊かさや海鮮の美味しさが挙げられ、多くの児童が地元の自然環境に愛着を持っていることがわかった。しかし、「坂が多い」「寒い」「店が少ない」「風が強い」といった生活の不便さも挙げられ、特に「スターバックス」「ショッピングモール」「映画館」といった娯楽施設の不足が日常生活の不便さとして感じられている。児童の意見から、地元に残りたい気持ちと都市部への憧れが共存していることが分かった。

家族の生活習慣と健康意識

家族の健康習慣については、たばことお酒の摂取に関する回答が寄せられた。特に「父親」「母親」「祖父母」などの成人が喫煙や飲酒をしているケースが複数見られ、児童もその生活習慣に関心を持っていることが伺える。多くの児童が「たばこを控えてほしい」という考えを持っており、児童の意識を高める健康教育の重要性が示唆される。





【学び】

この調査には、子どもたちの日常的な生活状況、学校生活に対する意識、将来の希望、家庭環境、そして地域に対する印象や感じている課題について幅広い質問が含まれている。結果の解釈を通じて、子どもたちがどのような環境で育ち、どのような未来を描いているのか、そして地域や教育における潜在的な課題や改善の方向性が把握できたように思う。

食事の頻度と内容に関する回答

アンケートから、ほとんどの子どもたちが朝食、昼食、夕食の3食を欠かさず摂っており、一部は「おやつ」を間食として楽しんでいる様子が見られた。食事の取り方は子どもたちの日常生活の規則正しさや、家庭での生活環境を反映している。定期的な食事が維持されていることから、健康的な生活習慣が根付いていると感じ取れた。

学校生活の楽しさと得意・苦手な教科

子どもたちが学校生活に対して「楽しい」と感じているかどうかは、学業に対する意欲や今後の成績向上にも関係してくる。多くの回答者が体育や図工、音楽など身体を動かしたり創作したりする教科を「得意」としている一方で、算数や社会といった論理的思考や暗記が求められる教科を「苦手」とする傾向が見られた。この結果から、子どもたちが学習において、身体的な活動や芸術的な創作を通じて自分の可能性を伸ばしていくことに喜びを感じている可能性を感じた。苦手科目への支援やアプローチの改善があるとよいと思った。

子どもたちの将来の職業に対する希望

回答結果には「看護師」「イラストレーター」「薬剤師」「トリマー」「プロ野球選手」など様々な職業が挙げられており、子どもたちの将来の夢が多様であることが示された。看護師や薬剤師といっ

た医療関係の職業が人気であることから、子どもたちが医療や福祉の分野に関心を寄せていることがわかる。また、地域内で働きたいという回答も一定数見られ、地元での職業的な可能性に期待している層も存在している。こうした将来の夢を支えるためには、地域での職業訓練や教育機関の充実、職業体験などの取り組みが重要であると考えられる。

地域に対するイメージと課題

アンケートの「住んでいる町の好きな点」については、「自然」「動物が多い」「海が近い」など、稚内市や南地区の自然環境を挙げる回答が多かった。これに対し、「不便な点」としては「お店が少ない」「寒い」「風が強い」といった気候や利便性に関する不満が挙げられている。このことから、子どもたちは自然環境の豊かさを誇りに感じつつも、日常生活の利便性向上を求めていると推測できる。地域における商業施設や交通インフラの整備が課題となってくるのではないかと感じた。

家族の喫煙・飲酒習慣

家族の喫煙や飲酒の状況についても質問が行われたが、特に「父」や「母」が喫煙している場合、子どもたちはそれを観察しており、時には本数まで認識している回答が見受けられた。この結果から、子どもたちが家族の生活習慣に対して敏感であることがうかがえる。こうした習慣が子どもたちに与える影響を考慮し、地域の健康教育や生活習慣改善プログラムの充実が求められるのではないかと思った。

家族や親戚との関係性と支援

「家族代々の事業」について質問した結果、特に現時点では「継ぎたくない」と回答する子どもが多く見られた。この傾向から、地域での家業継承に関する課題も浮き彫りになっているのではないかと考えた。今後、家業の継承を促進するために、親子間でのコミュニケーションや家業に対する理解を深める取り組みが必要となるだろう。また、地域の事業や職業に対する理解を深めることで、将来の選択肢の一つとして家業を考える子どもが増える可能性があることがわかった。

学習会や地域教育に対する感想

アンケート回答から、学習会において医療や健康に関する知識が興味を引き、「医師や看護師に憧れた」「医療関係の職に就きたいと感じた」という意見が数多く見受けられた。こうした学習会が子どもたちにとって新しい知識を得る場であり、地域で働く姿に関心を抱くきっかけにもなっていることがわかる。クイズ形式や実践的な体験を含むプログラムが好評であり、今後も子どもたちの興味や関心を引き出すための創意工夫があるとますますよくなると感じた。

3-17 飯田爽様 （文責：出口智子）

【概要】

8月28日、電話を介した対話形式でインタビューを実施した。

飯田爽様は底引き船員であり、父親は宗谷友の会で現地でも色々ご支援頂いた飯田光さまである。底引き漁とは「漁船から伸ばした曳き網（ワイヤー等）に連結した漁網を曳航し、漁獲を行う漁法」（1）であり、主な漁獲物は海底にいる魚介類、特に稚内ではなまこやいかなどが挙げられ、その中でも近年はホッケやニシンの漁獲量は少なくなっている（2）。

・インタビューの目的・狙い

今回仮説Ｄの「南地区は衰退していて改善が必要なのではないか」の理由であった、底引き漁業の漁獲船数の減少などの衰退について、漁業の仕事の過酷さや後継者問題などから考察しようと考えた。また、飯田爽様の漁師の家筋でないのに漁師という道を選んだという経緯から、仕事の選択の理由や漁業を志した経緯を伺い、稚内における職業選択の現状について把握し、仮説Ｃ「こどもの将来の就職は難しいのではないか」にも繋げようと考えた。加えて今までの調査で娯楽施設の少なさによって働き手や子育て世代が住みにくさを感じ人口流出が起きているので

はないかという考察が出ており、実際の漁師の方の生活習慣や余暇の使い方について伺い、市民のQOLについて考察しようと考えた。

・インタビュー形式
飯田様のお忙しい中でのインタビューということもあり、8月28日の20:05～20:20という限られた時間の中、電話で対応していただいた。

【分かったこと】
・漁師になった経緯と今の活動
元々ご友人が漁師として既に活動しており、その友人の紹介で漁業への従事を決められた。飯田様が漁師を目指したころは国による支援で漁業体験ができたそうだ。底引き船員としての経歴は8年目で、自身の乗っている船では定員18人中7人が20代層である。宗谷管内の漁師は皆同じ組合に属している。

・漁師の生活習慣と余暇の過ごし方
季節によって獲れる魚介類の種類や漁ができる場所、出航時間が異なってくるため一概に規則的な習慣を言うことは難しいが、朝が早いのは共通である。夜中の2時からの出航や、夕方からの出航もある。このように季節や魚の種類で生活が左右されるため、休暇期間はきまっている訳ではない。夏は天気がいい日は基本出航し、冬は時化が多いため休みになることがある。そのため基本的に毎日忙しく、自身の労働環境について楽だと感じたことはないそうだ。日々漁業で多忙なので、休日は子供と遊ぶなど家族との時間に充てており、特段趣味や使い道はないと伺った。他の漁師の方には日々の過酷な肉体労働から休日は家で休息したり、一部の方にはパチンコなどのギャンブルに行かれたりする方もいるそうだ。

・漁業の今後の展望と期待
20代が定員の約半分を占めているという現状からも、特に衰退を意識してはおらず、近年生活が大きく変化したこともないそうだ。しかし国に期待する支援として、賃上げがある。給料は漁獲量に応じているが天候などの問題から出航できない日もあり、最低保証額が設けられているものの、組合と話し合い賃上げを交渉したいと伺った。

【考察】
今回、底引き漁業の若年層の多さを知り、後継者不足問題や漁獲量減少による生活上の問題は見られていないことが判明した。また、漁師という職業が予想以上に門戸を開いており、従事したいと考えたときに漁業体験などを通じて家系に関係なく就業できるような体制によって後継者の確保が可能になっていると考えた。しかし、今回のお話で漁師の方の生活習慣が不規則かつ過酷であることを学んだ。確保されない休暇、不規則な生活習慣、そして最低給料の低さなど今後漁業従事者を確保していくうえで考えるべき案件が明確となった。生活については魚の種類や天候など一次産業として自然相手にしているため免れられない点が多いが、最低給料などについては漁師の声に耳を傾け、行政と組合の交渉を図り、改善法を模索していく必要がある。また、僅かな休日を休息や家族との時間にしか充てられないという現状を伺い、より日常的に家族との時間や休息を取れ且つ自身の趣味を追求する時間を確保できるような支援体制が、漁師の方のQOLを高める上で欠かせないと思う。現在若手の後継人が十分にいても、これから先も稚内の漁業を持続的にしていくためには、就業のし易さを維持しつつ、今の漁師の方のQOLを高められるような行政的な支援や交渉が求められる。

(1)http://www.zensokoren.or.jp/trawl/trawl_fisheries.html
一般社団法人全国底曳網漁業連合会HP　2024年10月31日19時最終閲覧
(2)稚内市役所 「平成22年稚内の水産」p9　2024年10月31日　19時15分最終閲覧

3-18 声問小学校（文責・牧野界人）
【概要】
8月29日　10:30-12:00　声問小学校

【形式】
　吉田君によるキャリア教育授業の後、小学生と実習生2人を交えて懇談、その後校長先生と懇談、事後に児童にアンケート

【学んだこと】
　稚内の市内から外れた集落の小学校で、低学年、中学年、高学年に分かれた複式学級になっていた。生徒が学年ごとに違う方向を向き1つの教室で2つの黒板を使って全く内容の異なる授業が進められていた光景が非常に印象的だった。生徒間はお互いの家族構成や両親の仕事まで詳しく把握しており、学年を超えて仲良く交流している様子を見ることができ、学校全体が大きな1つの家族であるかのように感じた。将来の夢を聞いたところ、パティシエや看護師といった地域問わず人気な職業を口にする児童が多く、地域の特性はそこまで感じられなかった。児童へのアンケートでは、「実習生と話せて楽しかった」「稚内ではない地域のことを知れた」などの感想をいただいた。

4.フィールドワークで学んだことと考察　（文責：木戸なつみ、廣瀬莉帆）
　港１～５丁目、大黒１～３丁目、こまどり、緑のエリアをフィールドワークし、街を歩いたことで感じたことをエリア別に考察していく。

＜港１～５丁目＞
【稚内副港市場】
・販売されているお酒の種類が多いかつ日本酒など度数の強いものが多い
　　普段から多飲で、度数の高いお酒を飲酒している人が多いのではないかと予測できる。多量の飲酒は肝臓や脳、消化器への影響が強く、また生活習慣病のリスクが高まるため、生活習慣病の罹患率と合わせて影響を考察する必要がある。
・おつまみが塩っけのあるものが多く塩分摂取量が多くなるのではないか
　　飲酒量が多いのではないかという考察の他にも塩分の多いおつまみを食べる傾向があることが伺える。塩分の摂取量が多く、生活習慣病の罹患に影響があると考えられる。

・販売されている野菜で生産量が全国的にそこまで高くないものでも道内産が殆どで、東京のスーパーより若干高い。
　　本州から運ぶと運送費などが更にかさむため、道内で生産されたものを地産地消しているのではないか。

・一階に港ギャラリー、二階の樺太記念館など地域の歴史や観光情報を伝えるブース、子どもの遊び場がある
・港の湯という温泉がある
　　観光客や地元の方々への情報発信の場として利用されていることが分かる。また、稚内は風が強く、かつ雪国であるため、子どもが自宅以外でものびのびと遊ぶことができるよう、室内の無料の遊び場がある。温泉施設もあり、地域の方の憩いや交流の場にもなっているのではないかと考えられる。

・室内にテーブル（コンセント付）と椅子が設置しており自宅以外の場所で無料で作業することが出来る

人が集まりやすい場所に作業スペースがあることは市民の暮らしやすさにつながっているのではないか。

・ローソン稚内副港通店のコンビニの駐車場が広く車で行きやすい
コンビニであっても自家用車で行くほどの車社会であることが分かる。

・ゲームセンターには、喫煙専用室と加熱式たばこ専用喫煙目的室がある。
子どもが受動喫煙の影響を受けやすいのではないかと考えられる。また、分煙の部屋が作られるほど喫煙者が多いことが伺え、喫煙習慣が子どもたちの日常になってしまうリスクがあるため、禁煙の教育が必要なのではないかと感じた。

・港沿いは色あせた看板や断熱材が見える建物が多く残り、草むらには使われていない船が散見される。
・港沿いに、雪国ならではの防雪柵や鉄道部品やホタテ漁の漁具用の金属加工業の町工場や、稚内港湾施設の機械・船工場などの大会社の小さな工場が散在しているが、どれもさびれている。建物は老朽化し錆ている
・港沿いにマリンギフトや水産系の株式会社の倉庫が並んでいた。運送会社も点在していた。漁業に関連した倉庫や運送業が並んでいるがどれも老朽化が進んでいる。
人口減少が著しく、かつて港町として栄えた様子が残された建物や船から断片的に感じられる。

・港5丁目のバス停は一時間に1本8時台は3本
一時間に1本と日中は少ないが、朝の通勤通学時間帯は3本と本数を増やす工夫がなされており、通勤通学をする世代が住んでいることが伺える。

・家の外にガスボンベがある家が多い。
ボンベを取り換えることでガスを使用している家が多いことが伺える。

【港エリア考察】
港地区は、海沿いのエリアは残存する建物や会社名からかつての賑わいが感じられたが、徐々に衰退した様子が見て取れた。一方、副港市場では遊び場やギャラリー、作業スペースがあることから、市民の集まる場所であり、賑わいを感じた。よって、人口が減少し衰退しつつも、観光スポットや市場の充実化で賑わいを取り戻していると考えた。

＜大黒1～3丁目＞
・用水路があるが、注意喚起の看板のみで柵が設置されていない。
子どもや高齢者などにとって、転落リスクが高く、柵を設置する必要がある。また、雪が降り始めたときに、柵が埋もれたり、看板が埋もれたりすれば危険性が高まる。

・ツルハドラッグ南稚内店には、脳年齢測定器や野菜摂取度測定器、血圧計などがあり、無料で利用できる。
・ツルハドラッグ南稚内店の処方箋受付例は、市立稚内病院、市立稚内こまどり病院、旭川赤十字病院、旭川医科大学病院。
薬局の機能が多く、市民の健康管理のための工夫がなされているのではないかと感じた。また、処方箋の受付例は、3項目に旭川の病院があることから、稚内に病院が少ないことを表しており、最寄りの大きな病院が少ないことが考えられた。

【稚内グランドホテル周辺】

・バーやスナックのみが入ったビルが立ち並ぶ
・古くなっているタバコの自販機が多くあり、taspo認証（2026年以降はtaspoそのものが廃止）は全て付いている。1箱500～580円くらい

お酒を提供する飲食店やたばこの自販機から、飲酒や喫煙の習慣があることが分かる。夜は人で賑わっているため、南稚内駅周辺は繁華街として栄えている。

・使われなくなった鉄橋が老朽化していた
・ホテルが多く立ち並ぶ
・古い建物はオンボロに対して、新しい建物は綺麗なものがあり二極化してた
・踏切の近くに新しい建物のJRの社宅があり、昔の航空写真を見たら、昔の稚内駅の後だった。
・戦前稚内駅は南稚内駅のそばにあったらしい。樺太連絡船接続のために北側に移転

JRが開通しているため、JRの建物があった。古い建物と新しい建物が入り混じった場所で、二極化している。駅前の繁華街として栄えているため、人は多く、開発途中であるとも捉えられる。

・稚内青少年労働体育センターがある。（会費を払わないといけない可能性がある。ボランティア活動などをしている。15～39歳が対象）
・プロパンガス充填工場や輸送拠点的な企業があった

様々な種類のセンターや企業の拠点があった。ガスボンベを使用している家が多いのではと考察したが、プロパンガスの充填工場があることで、その工場を中心にガスを使用しているのではないかと考えた。

【大黒1～3丁目エリア考察】

かつて、稚内駅があるなど市内の中心部として栄えていたのではないか。現在は、居酒屋やバーが多く立ち並び、また新しい建物やJRの社宅があるなど、新たな拠点としての機能を果たしているのではないか。

＜こまどり＞
・坂が多い。住宅街であり、子どもたちは自転車で移動している。
・稚内市清掃美化運動モデル地区となっているとの看板がある。
・全体的にタバコの吸い殻がポイ捨てされていない。
・全体的に水はけが悪い印象。

坂が多く、住宅街が広がっている。勾配もかなりあるが、車を使用できない子どもたちは自転車で生活している様子があった。稚内市清掃美化運動モデル地区の看板があったが、歩いている中では他の地域と比べて特別綺麗とは言えない印象を受けた。建設途中の工事現場があったが、数日前の雨が溜まっていたため、水はけが悪いのではないかと感じた。しかし、たしかにたばこのポイ捨て等はないため、喫煙所がコンビニなどにある、車内で吸って灰皿に入れられるという理由が考えられる。

・ローソン近くのバス停は、一時間に一本よりも少ない。始発が10:37、2時間に1本くらい。ローソンは駐車場がとても広い。横断歩道が少ない。

住宅地であるにも関わらずバスの本数や横断歩道が少ないことから、住民は自家用車を利用し、車社会であることが伺えた。

・こまどり町内会案内板には個人名で表示されている。

町内会の案内板が設置されており、個人名の書かれた地図であるため、たしかにどの住宅に誰が住んでいるのかすぐに分かるが、住所が分かってしまうので、個人情報の保護がなされていないのではないかと感じた。しかし、地域に住む方々が地図で書かれても

支障がないほど、どの家に誰が住んでいるのか分かる、顔の見える関係づくりがなされているのではないかとも考察でき、有事の際の積極的な協力につながると捉えることができた。

・稚内市立図書館には図書館建設市民参加事業銘板がある。
前市長の強い思いで図書館が建設され、市民参加事業銘板という、建設に金銭面で協力した方々の氏名が丁寧に記されている。そのことから、市民に大切にされて利用されている拠点であることが分かる。

【こまどりエリアの考察】
坂の多い住宅街で、住民は自家用車で移動していることが分かった。稚内市清掃美化運動モデル地区となっており、住宅街だからこそ、住んでいる地域を綺麗にしようという意識なのではないかと考察した。

＜緑地区＞

【道路状況】

・坂道が多い。

・基幹道路が1番谷に作られている。

・道がひび割れている。

・横断歩道はほとんどない。

雪国であるにも関わらず、坂道が多いため、道路の凍結を防ぐためにロードヒーティング盤が様々なところ、特に車どおりが多そうなみどりスポーツパークの前の坂や急な坂道に多く設置されていた。さらに、その他の坂道についても、ご自由にお使いくださいと書かれた滑り止め用の砂が各所に設置されており、車移動に深く配慮されていることが分かった。

また、土地の構造として、基幹道路が一番谷に通っており、新たに建設されている居住地のエリアに移動するためには、必ず坂道を上る必要があるとわかった。みどり地区の町内会アンケートにおいて、「坂道が多い」という答案が複数件見られたが、バスは基幹道路をとおるため、自家用車ではなくバスを利用する高齢者の方にとっては、バスを降りた後に急な坂道を上る必要があり、とても生活がしにくい場所であることが分かった。

さらに道路のひび割れも目立ち、足腰が弱った高齢者は細かい段差も躓きやすく歩きにくいことを考えると、これらの理由から、高齢者にとっては生活がしにくい地域となっていると判明した。

また、車社会であり、基幹道路では頻繁に自家用車やバス、タクシーが行きかうなか、横断歩道が少ない点についても関心を持った。道中で歩いている方を見かける機会がそもそも少なく、横断歩道を作る必要性が少ない環境であることは想定される。しかし、薬学部生の立場として、これまで学んできたことを鑑みると、高齢者は道路を横断する際に自動車との距離を見誤ることが多く、渡り切る前に車と接触しやすいこと。さらに、自動車を運転する側が高齢者であった場合も、距離感や速度感、アクセルとブレーキの踏み間違いなどが生じやすく、なお一層事故になりやすいという傾向がある。ということから、横断歩道や信号が少ないことに問題はないのか疑問に思った。一方で、町内会のアンケートでは渋滞が多いことが問題点として挙げられていたこと

から、信号や横断歩道を増やしてしまうとさらに渋滞を引き起こす可能性もあり、判断は難しい点である。

そのため、実際のみどり地区における交通事故の割合やその原因なども含めてさらなる調査を行うと、実態に沿った提案ができるのではないかと考えた。

今後の展望について鑑みると、時間が経ち、今の居住者が高齢者になったときにも過ごしやすい街となるようにいくつかの環境要因については対処をしていく必要があるのではないかと感じた。

【家屋状況】

・みどり地区は閑静な住宅街であった。

・新しめで綺麗な団地もあり、特に4丁目の山の上にある道職員住宅は大きかった。

・売地や、入居者を募集したアパートも複数見受けられた。

・廃墟と化した大きなアパートが、入口にロープがかけられた状態で残っていた。

・新たに開発が進んだと思われる地域では一軒家が多かった。

・玄関までに階段が設けられている家とそうでない家があった。

・どの家屋においても家の玄関の扉は二重扉となっていた。

・危険の目印が立てられている崖間際に立つ家があった。

・雪国だが、無落雪設計で屋根が平らな家が多かった。

近年開発が進められている地域であるという情報から、新しい家が多いものだと感じていたが、新しめの団地や戸建てに対し、廃墟も存在していた。廃墟については、今にも崩れそうな手入れがされていない家もあれば、一見は廃墟に見えない状態で適切なメンテナンスをしたらまだ家屋として使えるのではないかと思われるものまであり、程度は異なっていた。佐藤様のお話の中で空き家問題について挙げられていたが、メンテナンス次第では活用できるような建物については市が買い取って改修し、例えば他企業や医師を誘致する際に社員宅や診療所として提供するなどといった対策を行うことはできないのだろうかと感じた。しかし、この分野に関しては浅学であり、土地の所持者との話し合いなど様々な問題があるのだとは考えられるため、次年度以降の実習では法学部生や経済学部生とも合同で行ったり、この点についてもう少し詳しくお話を伺うことができたりしたらよかったと感じた。

また、比較的新しめに開発されたエリアであるにも関わらず、売地や大規模に廃墟と化している建物が複数あった点については、その原因を深く調べる必要があると感じたものの、今回の実習ではそこまで考察するに至れなかった。

一軒家の構造については、見た目の様相からしか判断できない点ではあるが、比較的新しい家については入口の玄関までに階段がなくそのまま入れる家が多く、比較的古そうな家については玄関までに階段が設置されている家が多かった。雪国では、雪が積もったときに外に出られなく

ならないよう玄関を高くすることが基本的に行われているが、入口を高く上げる必要がなかったのは、ロードヒーティング盤が整えられていることや除雪作業がとても丁寧に行われていることが要因ではないかと考えた。特に、近年開発が進んでいる地域であることを鑑みると、これらの設備や事業が充実している可能性は高いと考えられる。しかし、これについてもあくまで予想となっており根拠となる情報はないため、さらなる調査が必要であったと反省させられた。

また、設計については、自然落雪式屋根に対して無落雪設計の家が多く、調べてみたところ、北海道の多くの地域では無落雪設計が用いられているとのことであったが、街として雪下ろしの負担軽減や事故の減少について考えられているのだとわかった。

除雪が丁寧に行われている点や、入口までの段差がなるべく少なくても入れるように設計されている点、雪下ろしが不要な設計がとられている点などから、家自体のことを考えると、高齢になっても住めるような長く住むためのことを考えた家となっているように感じられた。

崖際にある家について、その安全性や、いつから建てられていたものなのか、建築基準に沿っているのか、災害対策が適切に行われているのかなど興味を持ったが、今回の調査の範囲外であったため、解明することはできなかった。特に、災害時の対応策や避難策について、崖上の家にすむ方のみならず、下方に住む方々も含めて詳しく練られているかどうかを確認してみたく感じたが今回はそこまで調査するに至れなかった。

【公園・子供の遊び場】

《ひばりが丘公園》

・バット等の使用禁止（サッカーはあり）

・公園の二重柵はなく、ボールは飛び出す構造

・比較的新しめの遊具があった

・砂ではなく芝生で覆われた公園であった

お祭りのあった日に行ったことも影響してか、遊んでいる子供は見かけなかった。住宅街を歩いている中でそんなに頻繁には車と出会わなかったが、ボール遊びができるにも関わらず、外周に柵がなく、子供の飛び出しにかなり注意が必要であるため、その点における保護者や近隣住民の心配はないのか気になった。

一方で、比較的新しめの遊具も多く、幼稚園生から小学校低学年の層を想定した公園であるように感じられた。もう少し滞在期間があれば、子供たちの日常の使用頻度なども調査するとよかったのではないかと感じた。

《みどり公園》

・緑公園の管理者は町営ではなく、稚内振興公社と民間管理であった。

・不可解な壊れ方のベンチがあった。

・公園の前にはクマ出没注意の看板があった。

・遊具は少なく、野球グラウンドをのぞくと遊べるスペースは少なかった。

球場の利用日以外に子供たちが勝手に自由に遊んでよいような広場には見えなかった。一方で、港小学校に訪問した際、「これからみどり公園の野球場で野球チームの活動があるのだ」と紹介してくれた男の子もおり、利用機会も多い公園であることが分かった。

一方で、野球場の手前にある小さな公園には遊具は少なく、人間の手では壊せないような形に壊れているベンチと、その近くに立つ「クマ出没注意」の看板があった。ベンチはクマの仕業のように感じられたが、これらのひばりが丘公園、みどり公園に限らず、公園や後述する小学校に柵がない点は、子供たちの保護という視点で、保護者や利用者がどのように考えているのかとても気になった。

【住民利用施設】

《緑スポーツパーク》

・緑スポーツパークについて海抜は30.6mであり津波災害の避難場所となっていた。

・昔は大谷高校であり、校舎をリノベーションされていた。

・スポーツパークまでの坂道はかなり急勾配だった。

・ユーザーの多くが車での利用者に見受けられ、停まっている車の台数は多かった。

・一日を通して施設のうちのどこかは利用されていた。

・カーリングの選手権大会も開催されており、広く利用されている施設であった。

・施設外の壁面にハザードマップ（避難地図）が掲示されていた。

施設の受け付けに一日の利用スケジュールが張り出されており、それによると、一日を通して施設のどこかは利用されていた。このことから、多くの市民に親しまれていることが伺えた。また、カーリングの選手権が開催されていたことや、私たちが個人的に使用させていただいた日に隣のレーンで練習していたのが他市の学生であったことなどから、カーリング練習場があるという少し特殊なスポーツセンターであることにより、たとえ少ない日数だったとしても、他市、他県の学生を呼び込むことができるという点で、良い影響をもたらしている施設のように感じた。加えて、多くの

市民に利用されている施設に避難地図が掲載されている点についても、市民が必ず一度は目を通すようになっており、防災意識が育まれる良い環境であると感じた。

大谷高校をリノベーションして作成されたという点についても、居ぬき後の活用が難しい学校という建物をとてもうまく活用しており、個人の感想となるが、通っていた学生の思い出も考えるととても素敵なことに感じられた。

《南地区活動拠点センター》

・拠点センターは夜9時までと長時間開館していた。(児童館18:00、学童は18:30)

・児童館が主催したプラバン工作、ミサンガ工作などの行事があった。

・学童、児童館、体育館には子供たちが一定数集まっており、にぎやかな声が聞こえた。

・使用量と別に暖房料が設定されていた。

・施設外の壁面にハザードマップ（避難地図）が掲示されていた

・ドアが横開きとなっていた。

使用料のほかに暖房料の設定があるのが雪国ならではだと感じさせられた。また、ドアの横開きなども、雪によってドアが開かなくならないようにする工夫の一つだと考えられ、雪国ならではの要素が散見された。ドアを開けただけであるが、体育館にも子供たちが走っている姿が見え、隣にある学童センターからもにぎやかな声が聞こえるなど、学校の目の前にあるという立地も相まって多くの子供たちに利用されているように感じられた。開館時間も長く、また、プラバン工作やミサンガ工作などの企画から、子供たちが集まりやすい場所であり、交流場所としてよく活用されていることが分かった。

さらに、施設外の壁面にハザードマップがあることから、子供たちの目にも避難地図が触れるようになっており、幼少期から防災意識が育まれる良い環境であると感じられた。

【南小学校】

・南小学校は校庭とつながった公園があった。

・公園にクマ注意の看板があった。

・南小学校は柵がなく、自由に入れるような構造になってしまっていた。

校庭とつながった公園があり、さらに柵がないことから、どこまでが学校の敷地でどこまで入ってよいのか不明な状態であった。また、公園側には公衆トイレも設置されており、公衆トイレは人の連れ込みなどもできてしまう場所であることから、小学校に隣接する形で存在してしまって防犯的に大丈夫なものかとも疑問に感じた。

2001年の附属池田小事件を受けて、全国的に、校庭が地域に開かれた形態から、学生のみに開かれる閉ざされた形態に変化していたが、稚内ではそれを感じられなかった。こういった対策がなかったということは、この地域の治安が良いために、これまでに大きな事件が起きておらず、昔ながらの開かれた形態でも問題がなかったのではないかと考えられた。

対して、クマ出没注意の看板があり、小学校の校庭にクマが出て休校になったこともあるといった話もあったことから、防犯面に限らず、クマ対策のためにも高めの柵を設置するなどの対策は行われないのだろうかと疑問に思った。

【その他要素】

・仕出し屋コマドリがあった。（歓迎会やお祭りの際に飲食物を提供していたお店）

歓迎会やお祭りの際に提供いただいたお店が地区内にあり、地域産業の活用が地域の活性化につながるためとても良い取り組みであるように感じた。

・使われなくなった大谷高校の雨天練習場が残っていた。

現状何にも用いられていないようであり、比較的良い立地にある大きな建物、空間が無駄になってしまっているように感じた。取り壊しできない理由などがわからないため詳しく言及できないが、その理由などが気になった。

・きらきら保育園のむかいあたりにヤマハ音楽教室があったが、廃業していた。
幼稚園、保育園、小学校の近くに位置しており、住宅街の近くに位置しているにも限らず、廃業（移転）してしまっていたことが疑問であった。調査を行っていないため、その理由はわからず、さらに調査を行ってみたい点となった。

・簡易郵便局（局長が日本郵便の社員ではなく個人である郵便局。国債や投資信託など一部の手続きが利用できない。）があった。

緑地区は閑静な住宅地であるため、郵便局には市街地に出なくてはならない。そのため、一部の機能が制限されているものの、ほとんどの通常利用で行いたいことができる簡易郵便局は多くの人に利用されている可能性があると感じた。一方で、近くに駐車場などは見当たらず、多くの住民は日用品の買い物や出勤などで、定期的に車で市街地に行くため、かえって利用されていない可能性もあるとも考えられた。どういった利用目的で存在している施設なのか、インタビューなどでさらに調べてみたいと感じた。

・家族葬の看板があった。

佐藤様のお話の中で、近年、町内会の中で葬儀が執り行われていた状況から、葬儀屋の利用に移り変わってしまったという話があった。それを示すかのように家族葬の看板や葬儀屋の看板が町中の複数個所で見られた。

・南中学校は坂の上にあり避難場所に適していた。

坂が多いことから、避難場所に適した場所は複数見られたが、その分坂の傾斜も急であるため、足腰が弱い高齢者だと逃げるのに時間がかかりやすいのではないかと思い、避難場所の周知だけにとどまらず、短時間で避難できるようにするための日ごろからの体力増強のための取り組みも必要なのではないかと感じた。

・こども110番の家があった。

子供たちへの見守り意識が普及していることが伺えた。歩いていても、ほかの場所を歩いているときに比べると、子供たちとすれ違う頻度が高く、見守り意識が普及していることは子供たちの安全にとってとても良いことであるように感じた。

【考察－緑地区のフィールドワーク全体を通して学べたこと】

全体として、緑地区は閑静な住宅街でありつつも、学校が充実しており昼間には子供たちの声が響き渡る活気のある街であることが分かった。一方で、地形的な問題で坂道が多く生活しにくい点や、道路の凍結に注力的に注意しなくてはならないなど、解決が難しい潜在的な問題も秘めた土地であるともわかった。さらに、一部では、除雪車による地面の荒れ、廃墟の存在など、近年開拓されている街とは思えない状況も見られる要素もあった。

今回のフィールドワークで生じた疑問は、私たちの学問の専門外である内容や、調査情報として不足している点も多く、もしさらなる時間や、翌年への持ち越しができるのであれば、さらなる住民への聞き取り調査や、他の学部生との協力なども行えたらとても良いのではないかと感じた。

5. 発表準備の進め方 （文責：佐藤磨依）
①事前調査、インタビュー、アンケート調査、フィールドワークで発見した魅力と課題を子ども（小中高生）・高齢者・子育て世代・働き手の世代別に挙げる
②各世代の課題を魅力で補うことが出来ないか検討する
③各世代の魅力で他の世代の課題を補うことが出来ないか検討する
④課題を魅力で補えるアクションプランを立案する
⑤課題の根拠（データ）を示す
⑥⑤をもとにアクションプランの一貫性を検証する
⑦各アクションプランの検証方法を検討する

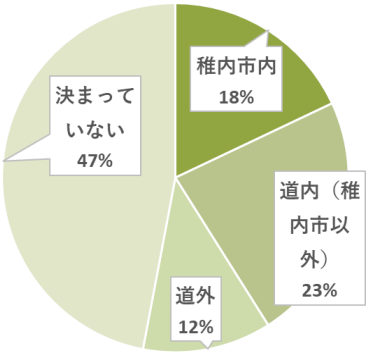
6. アクションプラン
6-1.ジョブフェア・職業体験の充実 （文責：佐藤磨依）
(1)調査結果
①稚内南中学校では1年生でジョブフェア、2年生で職業体験を実施している
ジョブフェア：賛同している企業がブースに分かれ仕事内容を説明する
職業体験：（例）稚内にある企業、学校教員、自衛隊、消防署等
②港小学校の生徒16名（5、6年生）のうち、23.5%が稚内市以外の北海道の市町村、17.6%が稚内市内、11.8%が他の都道府県で将来働きたいと回答している(47.1%は決まっていない）
③ある漁船（底引き）では船員18人のうち20代が7人

(2)魅力
①知識の幅を広げる教育
ジョブフェアや職業体験を通して様々な職業について生徒が主体的に知ることが出来る。

②企業が快く協力してくれる
職場体験の体験先として稚内市の企業や機関が受け入れてくれる。

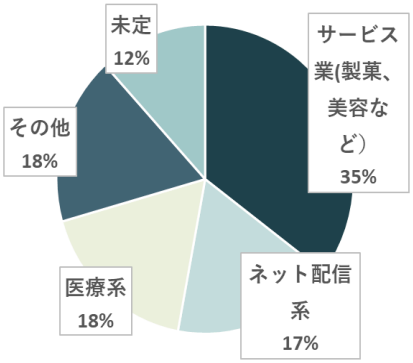
③一人一人へのサポートが手厚い
港小学校でアンケート調査をさせていただいている際に教師が子どもの家庭環境や将来の夢を把握している場面が見られた。

(3)課題
①進学や就職を機に外に出たまま稚内に戻ってこない



港小学校の生徒(5，6年生)の将来どこで働きたいかのアンケート（計17人）

②小学生の希望する職種に体験に行けていない



港小学校の生徒(5，6年生)の将来のなりたい職業（計17人）

(4)具体的な内容
現在：希望する企業が申請し、ジョブフェア・職業体験に参加する

新：希望する企業・職種＋生徒の興味がある企業・職種＋稚内で不足している企業・職種がジョブフェア・職業体験に参加する
　ジョブフェアや職業体験を行う前に生徒の希望を調査し、興味のある分野の話が聞ける機会を設けることが必要である。生徒数が少なく少人数であるからこそ生徒の希望を聞きやすいと考えた。
　私たちが港小学校で実施した授業をきっかけに医療職に興味を持ってもらえたことから稚内で不足している企業・職種を加えることでそれらの職業に興味をもつきっかけとなり職業選びの選択肢に入る可能性が高くなると考えた。また、稚内で盛んな漁業や観光業といった職種を加えることにより今まで気付かなかった新たな発見があったり、それらの職種に興味が湧いたりすると考えた。実際に体験することで先入観がなくなり、新たな魅力を知る機会になると考えた。

(5)効果
ジョブフェアや職業体験をアクションプランの様に充実させることで稚内で働こうと考える人が出てきたり、稚内の外で身につけた知識や技術が稚内でも活かせると知ってもらえたりすることが出来ると期待できる。

(6)評価方法
①新しいジョブフェア・職業体験の実施前後で、外に出た若者の戻ってくる数・割合の変化を調査する
②子ども達にジョブフェアや職業体験に参加した感想を聞く

6-2 子供たちによる健康教室　（文責：出口智子）
このプランは子供と高齢者の間の繋がりを強めることを目標としており、子供の教育上の魅力や子供の特性などを適用し、高齢者ひいては市民全体の課題を解決するものとなっている。
まず今回対象にする課題とその根拠についてである。今回アプローチするのは市民の食生活や運動不足といった生活習慣上の課題である。事前調査の段階で、稚内市の特定健診の受診率が近年増加傾向にあること（1）や健康診断で高血圧やBMI異常と所見される割合が全国平均より高い（2）ことから、食生活や運動習慣に問題があるのではないかという仮説を立てた。仮説を検証するために、西條で食生活に関するアンケート調査を行ったり、ひかり町内会の方へのアンケートを行ったり、実際に街を歩いたりした。西條では8/22-8/23の夕方に店頭でアンケートQRコードを添付した紙を配布し食生活意識を調査した。母集団は68人、うち稚内市民は86%を占めていた。今の自分の食生活について改善すべき点を自由記述してもらい解析したところ、野菜摂取量や栄養バランスを挙げる人が一番多く、次にカロリー過多や塩分の摂取過多を挙げる方も多かった。以上から、市民が食生活の問題を自覚していると言える。また、ひかり町内会の方を対象にアンケートを実施し、市民の運動習慣を把握することができた。ひかり町内会の8/1からの回覧板に、西條同様アンケートのQRコードを添付した紙を回覧板に載せ回して貰った。母集団は28人、人口構成は30代から80代まで各世代3－6人とほぼ同数となった。南稚内について不便だと感じる点を自由記述してもらうと、交通の不便さを挙げる人は全体の約34%と一番多く、特に高齢者(61-90歳)の方が31-60歳の方よりも交通を不便と考える人数割合は約12%多い。また稚内市教育委員会子ども課の方や佐藤忠男様から、若い頃は車での移動がメインで高齢者になるとバスを使う方が多いと伺い、車やバスが主要な交通手段であることを学んだ。実際に街をフィールドワークで調査した際も、歩いている方を見かけることはほぼおらず、バスの使用者も高齢者が多かった。稚内市では高齢者の社会参加の促進から70歳以上の方に乗車1回につき100円の負担でバスを利用できる「高齢者バス乗車証」を交付するサービスを提供して（3）おり、

このことも高齢者の移動手段でバスが重要なことを裏付けている。以上から稚内市民は交通手段の使用から日々の運動量が少なくなる傾向があると考えた。このように歩行での移動が少なくなる要因には、スーパーなど大型施設の地理的距離の広さだけでなく、稚内市の歩道状態などの環境要因が大きい。稚内市の歩道は積雪による劣化が酷く(4)、凹凸や亀裂がたくさんある。また、緑地区やこまどり周辺は勾配のある坂が複数存在し、健常者でも歩くのに困難を覚えてしまう。加えて稚内特有の気候も運動習慣に影響すると考えた。事前学習の段階でも積雪量が約130cm積もる(5)など、冬は毎日のように雪に降られるようになる。積雪だけでなく吹雪も大きな影響があり、特に2月は季節風の影響で吹雪が多い。ひかり町内会のアンケートからも、日常で不便と感じる点に積雪を挙げる人が約10%と多く、雪が日常生活に大きな影響を与えることを把握することができた。以上から稚内市は歩道や天候、地理的要因などから歩きにくい側面があると判断した。
このような生活習慣を解決する糸口となるのが、子供の自主性を育む教育だ。子供の教育上の魅力の根拠は二つある。一つは稚内南中学校における生徒会活動だ。南中学校教頭の飯田様のお話から、生徒会活動では生徒が主体的に計画し大人がフィードバックを与える教育がされていることを知り、稚内全体に通底する教育理念を感じることができた。具体的には、月に一回生徒会が全て企画する全校レクリエーションが開かれたり、南小学校から南中学校までの通学路の清掃を行ったりしている。このように子供たちが自主的に計画し実行する力を育む教育理念が存在していると言える。二つ目の根拠は、より幼い子供によるイベントの企画だ。南ちびっこ祭りとは、南地区の南小学校や港小学校の1～3年生を対象に、体育館でゲームや手持ち花火などを行う夏祭りである。南地区子育て連絡協議会では今年度より地域のためになることを児童生徒に企画してもらうことにし、その一環として南ちびっこまつりを児童会役員が中心となり企画・運営することとなった。南子連構成団体の大人のサポートやアドバイスを受けながら、企画を立てることができる。(6)また、30年近くひかり町内会で行っていた子育て平和夏祭りでは、子供が部活の活動内容や作品や演奏など発表を行うというように子供たちがイベントを作り上げるという精神が活きている(7)
このような子供の教育上の魅力と生活習慣の改善を組み合わせ、小学生が高齢者に健康教室を開催するというアクションプランを考えた。食生活の面については、小学生が事前に家庭科の授業などで学んだ栄養学などについてポスターで発表したり、レシピを載せた紙を作成し配布したりする。また、西條のアンケートで食生活のマンネリ化を問題点として挙げる方も一定数おり、異なる旬の食材をテーマに定期的に開催することで、健康教室へ通い続けてもらう工夫になることを目指す。他にも運動習慣の改善の為に、運動も取り入れる。港小学校の5.6年生に好きな科目についてアンケート調査を行い、体育が好きな児童の割合が半数以上という高い割合であったことから、子供たちがヨガやストレッチなどの簡単な運動を実演したり、内容を記載したプリントを配布したりする。
開催場所は稚内市の方の集まる西條で、時間は食について学んだことをすぐ活かせるように、買い物に訪れる人の多い昼前や夕方の時間帯が相応しいと考える。この健康教室は市民全体の健康の増進が最終的なゴールだが、特に高齢者が健康に生きられる基盤を作ることが最重要事項だと考え、宣伝方法も高齢者に向けた方法を考えた。街に実際に伺い、高齢者の足となっているバス内や、温泉・銭湯などで高齢者の方同士が談笑されている様子を見たため、このような高齢者にとって憩いの場となる所で宣伝を行うのが良いと考えそる。また広報手段についても、紙媒体のポスターやチラシを用いることが有効だと考える。紙を選ぶ根拠は、高齢者の間では稚内プレスなどの情報誌やポスターの与える影響が大きく、スマートフォンを持ってはいても情報源としてはあまりなっていないことをフィールドワーク等で把握できたことだ。
このアクションプランの効果は子供と高齢者双方にある。子供に対しては教育で行われている主体性や自主性の向上だけでなく、食生活について学び他者に教えることで知識が定着することや達成感を得られることがある。食生活や栄養学について若い間から正確な知識を身に着けることで将来の食生活の改善も期待でき、今すぐではなく子供世代が大人になる頃には稚内市民の食生活が今より向上し、市内全体で健康意識が向上することが期待される。高齢者に対する

効果としては健康寿命の延伸だけでなく、子供と関わる場を設けることで世代間を超えたコミュニティー形成が可能となる。
効果の検証については、参加者や子供へのアンケートから参加前後で意識が変化したかを確認する方法や、長期的には肥満・高血圧者数の推移を調査し続けることを提案する。

参考文献
(1)https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00012800/00012880/datehealth2.pdf
稚内市役所 「稚内市データヘルス計画書」平成30年3月 pp1-57
第三章 健康・医療情報の分析と課題の把握 pp19-26
(2) 1と同じ
(3)
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fukushi/koreishashien/ikigaidukuri/basucard.html#:~:text=%EF%BC%97%EF%BC%90%E6%AD%B3%E4%BB%A5%E4%B8%8A%E3%81%AE%E6%96%B9,%E5%A2%97%E9%80%B2%E3%82%92%E5%BF%9C%E6%8F%B4%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82&text=%E3%83%BB%E6%BA%80%EF%BC%97%EF%BC%90%E6%AD%B3%E4%BB%A5%E4%B8%8A%E3%81%AE,%E4%BB%98%EF%BC%89%E3%82%92%E4%BA%A4%E4%BB%98%E3%81%84%E3%81%9F%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82
稚内市役所 「高齢者バス乗車証(シルバーカード)の交付」 2024年10月23日22時最終閲覧
(4)飯田光様のお話
(5)https://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/ksd/kijun/sekisetu.html
北海道庁 「垂直積雪量」2024年10月23日22時最終閲覧
(6)https://wakkanai-minami-e.edumap.jp/page_20240626063114
稚内市立稚内南小学校HP 南地区子育て連絡協議会 2024年10月21日19:00最終閲覧

(6)佐藤忠男様のインタビュー内容
(7)
https://wakkanai-minami.sakura.ne.jp/wp/2019/07/17/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E7%B5%86%E3%81%8C%E6%B7%B1%E3%81%BE%E3%82%8B/
稚内南中学校 学校ブログ 2024年10月21日19:00最終閲覧

6-3 全世代の市民が稚内市の魅力を再発見する (文責:廣瀬莉帆)

【概要】

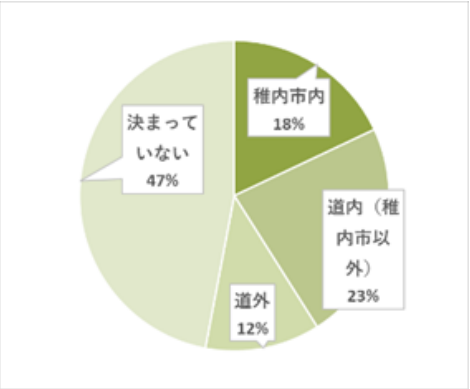
子供と高齢者の間で、各々が考える稚内市の魅力を紹介し合う場を作ることで、両者のつながりを強固にするだけでなく、結果的に全世代の市民が稚内市の魅力を認識できる環境を整えることを目的としている。これにより、自分の住む市への愛着が持てるようになり、できるだけ市内に住みたい、もしくは戻ってきたいと考えてくれる人が増えないかと期待している。このプランでは、現状抱えている2つの課題を4つの魅力で補っている。

【課題】

① 稚内市の外で働きたい子供が多いこと

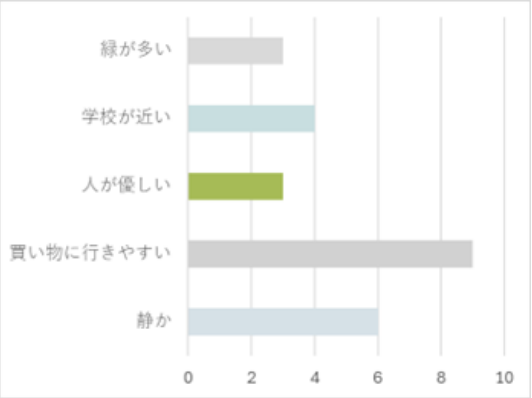
ジョブプラン1における資料と共通するが、港小学校の5,6年生17名を対象に行ったアンケートにおいて、小学生という年齢からまだ決まっていない生徒も多数を占めるが（47%、8名）、稚内市内で働きたいと答えた生徒はわずか18%（3名)しかおらず、残りの35%（6名）は小学生であるうちから少なくとも稚内市の市外で働きたいと感じていることが分かった。
また、データとして示すものはなく根拠力の低い情報にはなるが、本校看護学部学生と北海道稚内高等学校衛生看護科の学生が交流会を行った際、どのような金銭的な援助があったとしても、学びを活かせたりスキルを伸ばせたりするような医療現場が稚内市にはないため、絶対に稚内市外の病院で働きたいと感じている学生が多いように感じたという。
看護科という特殊な職種ということも相まっているため強く断定することはできないが、より進路が明確化している高校生になるにつれて多くの子供が稚内市外で働きたいと感じてしまっている現象があることは否めない。

②　若者の町内会への参加が少なくなっていること
緑町内会会長の佐藤忠男様のお話にて、若者の参加率が低下していることが挙げられていた。（佐藤様の訪問報告の項参照）
また、実際に私たちが緑町内会のお祭りの運営に参加させていただいたが、飲食物の販売や施設の設営などを行っていた役員方の中で若者の方はとても少なかったように見受けられた。
統計に基づくデータがないものの、フィールドワークや運営されているご本人様からの情報ということで課題の根拠とさせていただいた。



【魅力】
①　優しい人が多い

緑町内会における回覧板でのアンケート結果より、この項目で得られた25件の有効回答数のうち、3名から緑地区の良いところとして「住民が優しい」という趣旨の回答があった。他の地域において同様のアンケートを実施していないため、全国や他地域と比較して優しい人が



多いといえるかは不明であるものの、このように感じられている回答が複数件あるということは町民の人柄の良さを示すものといえるだろう。
また、実際に私たちが街歩きをしている際に、「稚内プレスに載っていた学生さんよね、がんばってね」とお声がけをいただいたことがあった。他にも、夏祭りでお手伝いをさせていただいた私たちに、余りの売り物を無料でプレゼントしていただいただけでなく、住民間でも、「少し多めに入れておくね」といったサービス精神が旺盛な場面が多くみられ、町全体として優しさにあふれた街であるように感じられた。
また、フィールドワークにおいてこども100当番の家が見られたことや、きらきら保育園の保育士様から、「園児の散歩中に差し入れをいただいたことがある」といった話があったこと（きらきら保育園の訪問報告の項参照）など、町全体の温かさを感じられるお話が多くあり、主観要素は強い点は否めないが、優しい人が多いと十分に言えると感じた。

② 同世代同士の交流が盛ん

夏祭りに参加させていただいた際、同年代のお子様がいらっしゃる親同士がとても仲良く話をしている姿や、屋台で販売されている方がお客さんに対して「〇〇さんの奥さんじゃないの？」といった声がけや「××さん元気にしていた？」といった声がけの姿が多くみられ、親世代同士、高齢者世代同士の交流が盛んであることが見て取れた。
また、小中学生が合同で通学路を清掃する取り組みをしている、中学生が小学校で総合での学びを発表する、進路が決まった高校三年生が小学校を訪れミニ先生として活躍する、といったように中高生が主体となって企画した合同企画が行われるなど、学生間での交流も盛んである。（南中学校様の訪問報告の項参照）
これらのことより、この点についても明確なデータがなく主観性が否めないが、同世代ごとの交流が盛んであるといえると感じた。

③ 住民同士で子ども達を見守る

前述いたしましたが、きらきら保育園の保育士様から、「園児の散歩中に差し入れをいただいたことがある」といった話があったことや、こども100当番の家があったことなどから、町全体としての子供への見守り体制があることが根拠の一つとなると考えた。また、中学校の先生が民生委員と連携をしており、月に一回の定例会に参加して、現状頑張っていることを応援してもらえるようお願いしたり、心配なご家庭があれば民生委員に見守り活動していただけませんかと協力をお願いしたりすることもある。（南中学校様の訪問報告の項参照）といったことから、住民同士で子供たちを見守る風潮が根付いていると感じた。

④ 住民同士の支え合いがある

挨拶運動が行われており顔見知りが増えやすいことや、防災運動として災害時に支援が必要な家庭に関しては共有が行われており対策が考えられている（佐藤様の訪問報告の項参照）といったお話があった。また、前述いたしましたが、中学校の先生が民生委員と連携をしており、心配なご家庭があれば民生委員に見守り活動の協力をお願いすることもある（南中学校様の訪問報告の項参照）といったお話もあり、これらのことから、住民同士の支え合いが充実していると感じた。

【本策の限界について】

前述の通り、子供たちの多くが稚内市外で働きたいと考えていると明言するためには、もう少し進路の決まっている中学生や高校生へのアンケート、また、より多くの回答数が必要となるため、根拠としては薄い情報となってしまっている。

また、同世代同士の交流が盛ん、住民全体で子供たちを見守る風潮がある、住民同士の支え合いがあるということに関しては、インタビューにまつわる情報源や、実体験に基づく情報はあるものの、根拠となりうるような統計やデータがあるわけではなくあくまで主観的な要素が強いものになってしまっている。

これらの点に関しては、今回調べきれなかったことであるため、より強固な根拠として述べられるようにするためにも、次年度以降の調査に加えるなどの反省として引き継げたら良いと感じている。

【具体的な実行案】

高齢者と小学生が、それぞれの視点から稚内の魅力を紹介しあうというプランを提案する。

高齢者は町内会の集まりや、または、南地区地域拠点センターなどにて実施されている交流コミュニティーの中の一環で、ご自身方が考える稚内市の魅力をポスターにまとめて作成してもらう。対して、小学校5、6年生に総合学習の時間で、自分たちの考える稚内の魅力を発信するポスターを作成する。

これらを、小学生の総合学習の時間を用いて小グループなどに分けつつ、お互いに紹介し合う。最終的には、その紹介し合った内容をもとに、年に一回開かれる夏祭りでクイズ大会を行い、魅力を復習する機会を設ける。

といった流れである。私たちがこの案にたどり着いたきっかけは、今回、ご高齢の方から小学生まで、様々な年齢層の方々とお話をした中で、稚内市における様々な歴史を経験してきたご高齢の方々からお話しいただけた魅力と、小学生が作ってくださった稚内市の魅力紹介ポスターの内容が大きく異なりはしないものの、その視点が異なると感じさせられたことである。子供たちにとって、多くの経験をしてきたご年配の方々のお話を聞き視点が広がる可能性を設けることは教育においても十分に有意義ではないかと感じ提案させていただいた。

この案によってもたらされる可能性のある効果は以下の4つである。

《効果１》

高齢者の活動コミュニティーが活発化し、生きがいにつながること。高齢者にとって、地域の子どもたちに魅力を伝えるという活動によって自分の居場所ができたり、自らが力を発揮できることを自覚し、役に立つことの達成感を感じていただけたりするのではないかと考える。

《効果２》

高齢者、小学生のお互いが異なる目線で魅力を発表することで、お互い、さらに深く稚内という街を知ることができる。それが、魅力の再発見、再自覚へとつながり、稚内市への親しみが子どもたちに生まれると考えられる。そして、こうしてできたつながりが、将来、稚内に戻ってきたいという気持ちにつながると期待できる。

《効果3》

子ども達が地域の高齢者の方々とお話する機会が生まれる。これにより、顔見知りの方が増えれば、もともとあった地域での声かけ活動がさらに活発になると考えられ、さらなる地域の活性化や子供の見守り運動につながっていく。

《効果4》

各町内会の夏祭りでクイズをすることで、子どもとお祭りに参加している親の世代も稚内市の魅力を知ることができ、より多くの世代に魅力が伝わる。自分たちが全く分からないクイズであれば子供たちもつまらないが、一度学んでいる内容であれば積極的な参加が望める。そのうえ、子供の見守りの観点から高い確率で保護者もそのクイズの内容を聞くこととなり、元々稚内市の住民でなかった方であっても魅力を知っていただける機会になるのではないかと考える。

【検証方法】

小学校で魅力を学んだ子ども達が、より進路が明確になる中学生の時に、地域に対してどのように感じているかを調査することが有意義である。そのため、以下の方法を提案する。

- 3年ごとに中学生に向けて、今回港小学校の5,6年生に向けて行ったアンケートと同様のアンケートを実施する。この期間を3年ごとに設定しているのは、必ず在学中に一度は参加することになり、稚内市に住む全ての子供たちを対象にできるだけでなく、重複した人からの回答がないことが明確なためである。
- また、今回行ったアンケートの内容に「稚内市が好きかどうか」を10段階評価してもらう項目を追加し、実際にアクションプランを実施してから、その項目に変化が生じたかどうかを長期的に見ていくことも大切であると考える。

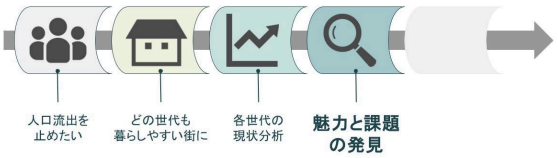
7.発表スライド

アクションプランのゴール

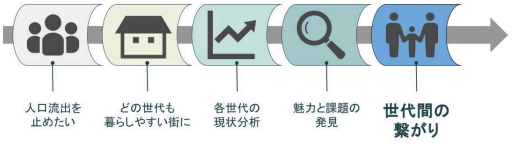
私たちが行った現状分析

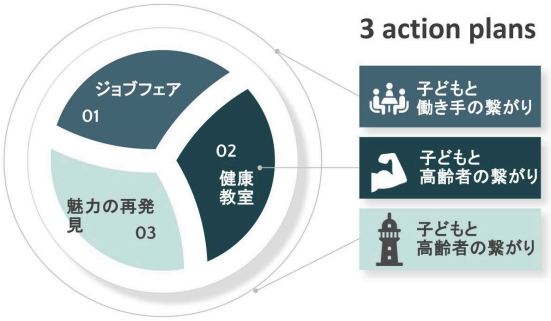
	子ども(小中高生)	高齢者	子育て世代	働き手
魅力	①主体性や自主性が育まれる教育環境がある。 ・中学校の生徒会 ・南ちびっこ祭り ・町内会や副港市場のイベント参加 ・南中ソーランの伝統化 ②知識の幅を広げる教育 ・南中学校でのジョブフェア・職業体験の実施 ③一人一人へのサポートが手厚い ・幼稚園,保育園の生徒全員への見回り ・少人数学級のため目が届きやすい ④小中学生が共に活動 ・総合で学んだことを発表 ・通学路の掃除 ・進路が決まった高校生が授業	①高齢者同士の繋がりが強い ・ひかり町内会の夏祭りでの高齢者の活躍 ・近所の間の声かけや会話がある ・子どもたちを見守る意識がある	①子育て相談できる行政機関がある ②地域で不登校の生徒へのフォローを行っている安心感 ・つばさ学級 ・SSWの活躍 ・定期的なスタッフ会議の開催 ③市独自の子育て支援 ・出生時のお祝いの品や助成金など ・アンケート実施による支援の質の維持 ・こんにちは赤ちゃん訪問は全家庭訪問 ・待機児童0 ④親同士のコミュニケーションの場 ・子育て支援	①アルバイトの時給は最低賃金よりも高い ②学生の職業体験を快く受け入れる
課題	①人口流出 ・高校生の段階で市外へ出ていく人が多い(レベルの高い学校を目指す、やりたい仕事、学びたい学問が市外にある) ②学力不足	①医療機関の不足 ②交通の便が悪い ③町内会を継ぐ若い人がいないため、地域のつながりの維持に不安 ④配偶者と居住している人が多く、将来的な孤立リスク ⑤生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足	①気候の影響で外遊びが難しい ②不登校の生徒が急増 ・稚内市教育相談所のSSW相談件数内訳の割合で最も高い ・つばさ学級の在籍数が過去最多 ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足 ・喫煙者が多い、受動喫煙のリスク	①職があってもマッチングできていない ②高齢者の課題が直結した将来的な課題となるため、中高年の人口流出がある ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足

アクションプランのゴール



アクションプランのゴール





01 ジョブフェア・職業体験

＜子どもと働き手の繋がり＞

私たちが行った現状分析

	子ども(小中高生)	高齢者	子育て世代	働き手
魅力	①主体性や自主性が育まれる教育環境がある。 ・中学校の生徒会 ・南ちびっこ祭り ・町内会や副港市場のイベント参加 ・南中ソーランの伝統化 **②知識の幅を広げる教育** **・南中学校でのジョブフェア・職業体験の実施** **③一人一人へのサポートが手厚い** **・幼稚園,保育園の生徒全員への見回り** **・少人数学級のため目が届きやすい** ④小中学生が共に活動 ・総合で学んだことを発表 ・通学路の掃除 ・進路が決まった高校生が授業	①高齢者同士の繋がりが強い ・ひかり町内会の夏祭りでの高齢者の活躍 ・近所の間の声かけや会話がある ・子どもたちを見守る意識がある	①子育て相談できる行政機関がある ②地域で不登校の生徒へのフォローを行っている安心感 ・つばさ学級 ・SSWの活躍 ・定期的なスタッフ会議の開催 ③市独自の子育て支援 ・出生時のお祝いの品や助成金など ・アンケート実施による支援の質の維持 ・こんにちは赤ちゃん訪問は全家庭訪問 ・待機児童0 ④親同士のコミュニケーションの場 ・子育て支援	①アルバイトの時給は最低賃金よりも高い **②学生の職業体験を快く受け入れる**
課題	**①人口流出** **・高校生の段階で市外へ出ていく人が多い(レベルの高い学校を目指す、やりたい仕事、学びたい学問が市外にある)** ②学力不足	①医療機関の不足 ②交通の便が悪い ③町内会を継ぐ若い人がいないため、地域のつながりの維持に不安 ④配偶者と居住している人が多く、将来的な孤立リスク ⑤生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足	①気候の影響で外遊びが難しい ②不登校の生徒が急増 ・稚内市教育相談所のSSW相談件数内訳の割合で最も高い ・つばさ学級の在籍数が過去最多 ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足 ・喫煙者が多い、受動喫煙のリスク	①職があってもマッチングできていない ②高齢者の課題が直結した将来的な課題となるため、中高年の人口流出がある ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足

01 ジョブフェア・職業体験の充実

市内の中学校で現在行っている取り組み

1年　ジョブフェア
賛同している企業がブースに分かれ仕事内容を説明する

2年　職業体験
稚内にある企業、学校教員、自衛隊、消防署等

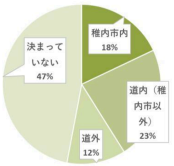
12

01 ジョブフェア・職業体験の充実

01 ジョブフェア・職業体験の充実

＜課題①＞　進学や就職を機に外に出たまま稚内に戻ってこない

港小学校の生徒(5，6年生)の将来どこで働きたいかのアンケート
計17人

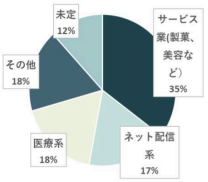


14

01 ジョブフェア・職業体験の充実

＜課題②＞　小学生の希望する職種に体験に行けていない

港小学校の生徒(5，6年生)の将来のなりたい職業
計17人



15

01 ジョブフェア・職業体験の充実

＜魅力＞

①知識の幅を広げる教育
→仕事について知ることが出来る

②企業が快く協力してくれる
→職場体験の体験先として受け入れてくれる

③一人一人へのサポートが手厚い
→教師が子どもの家庭環境や将来の夢を把握している

16

01 ジョブフェア・職業体験の充実

Action plan

希望する企業が申請し
ジョブフェア・職業体験に参加する

希望する企業・職種
＋
生徒の興味がある
企業・職種

事前に生徒の興味がある分野を調査する

01 ジョブフェア・職業体験の充実

稚内で不足している企業・職種を加える

私たちの授業により医療職に興味をもってもらえた

稚内で盛んな職種を加える（漁業や観光業）

稚内特有の産業を体験することで新たな発見があったり、興味が湧いたりする

18

01 ジョブフェア・職業体験の充実

Action plan

希望する企業が申請し
ジョブフェア・職業体験に参加する

希望する企業・職種
＋
生徒の興味がある
企業・職種

稚内で不足している
企業・職種
＋
稚内で盛んな
企業・職種

01 ジョブフェア・職業体験の充実

検証方法

・新しいジョブフェア・職業体験の実施前後で、
外に出た若者の戻ってくる数・割合の変化を調査する

・子ども達に感想を聞く

02 子どもによる健康教室

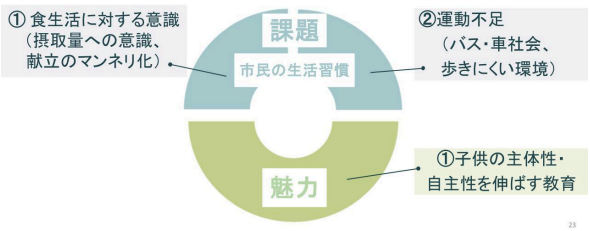
＜子どもと高齢者の繋がり＞

21

私たちが行った現状分析

	子ども(小中高生)	高齢者	子育て世代	働き手
魅力	**①主体性や自主性が育まれる教育環境がある。** **・中学校の生徒会** **・南ちびっこ祭り** **・町内会や副港市場のイベント参加** **・南中ソーランの伝統化** ②知識の幅を広げる教育 ・南中学校でのジョブフェア・職業体験の実施 ③一人一人へのサポートが手厚い ・幼稚園,保育園の生徒全員への見回り ・少人数学級のため目が届きやすい ④小中学生が共に活動 ・総合で学んだことを発表 ・通学路の掃除 ・進路が決まった高校生が授業	①高齢者同士の繋がりが強い ・ひかり町内会の夏祭りでの高齢者の活躍 ・近所の間の声かけや会話がある ・子どもたちを見守る意識がある	①子育て相談できる行政機関がある ②地域で不登校の生徒へのフォローを行っている安心感 ・つばさ学級 ・SSWの活躍 ・定期的なスタッフ会議の開催 ③市独自の子育て支援 ・出生時のお祝いの品や助成金など ・アンケート実施による支援の質の維持 ・こんにちは赤ちゃん訪問は全家庭訪問 ・待機児童0 ④親同士のコミュニケーションの場 ・子育て支援	①アルバイトの時給は最低賃金よりも高い ②学生の職業体験を快く受け入れる
課題	①人口流出 ・高校生の段階で市外へ出ていく人が多い(レベルの高い学校を目指す、やりたい仕事、学びたい学問が市外にある) ②学力不足	①医療機関の不足 ②交通の便が悪い ③町内会を継ぐ若い人がいないため、地域のつながりの維持に不安 ④配偶者と居住している人が多く、将来的な孤立リスク **⑤生活習慣に改善の余地** **・食生活** **・運動不足**	①気候の影響で外遊びが難しい ②不登校の生徒が急増 ・稚内市教育相談所のSSW相談件数内訳の割合で最も高い ・つばさ学級の在籍数が過去最多 **③生活習慣に改善の余地** **・食生活** **・運動不足** **・喫煙者が多い、受動喫煙のリスク**	①職があってもマッチングできていない ②高齢者の課題が直結した将来的な課題となるため、中高年の人口流出がある **③生活習慣に改善の余地** **・食生活** **・運動不足**

02 子どもによる健康教室



23

02 子どもによる健康教室

＜課題①＞ 食生活上の問題

事前の調査

・特定健診の受診率の上昇
・健康診断の所見
→肥満率が全国平均より高い
→高血圧が全国平均より多い

24

02 子どもによる健康教室

＜課題①＞ 食生活上の問題

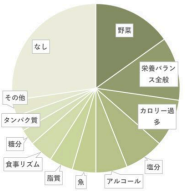
**西條の食生活
についての意識調査**

Q今の自分の食生活で改善すべきだと考える点は？

25

02 子どもによる健康教室

＜課題①＞ 食生活上の問題



**西條の食生活
についての意識調査**

Q今の自分の食生活で改善すべきだと考える点は？

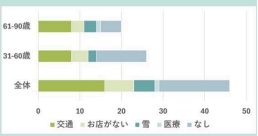
26

02 子どもによる健康教室

＜課題②＞ 市民の運動不足

歩くことが少ない

車が主要な交通手段
＋
歩きにくい
（舗装状態・坂・雪）



02 子どもによる健康教室

＜魅力＞ 子供の主体性・自主性を伸ばす教育

南中学校の生徒会活動

↓

生徒会が通学路の清掃や
全校レクを企画

**南ちびっこ祭り、
子育て平和夏祭り**
（※コロナ流行後は中止）

↓

子どもが何をするか主体的に
考えるイベント

02 子どもによる健康教室

Action plan 小学生が市民に健康教室を開催する

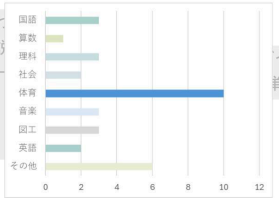
- 健康的な食事について
  ポスター発表で説明
- レシピの配布
- 異なる食材をテーマに
  定期的に開催

- ヨガやストレッチなど
  簡単な運動を実演で説明

02 子どもによる健康教室

Action plan 小学生が市民に健康教室を開催する

- 健康的な食事に
  ポスター発表で
- 異なる食材をテー
  定期的に開催
- レシピの配布



やストレッチなど
単な運動を実演で説明

02 子どもによる健康教室

Action plan 小学生が市民に健康教室を開催する

- 健康的な食事について
  ポスター発表で説明
- 異なる食材をテーマに
  定期的に開催
- レシピの配布

- ヨガやストレッチなど
  簡単な運動を実演で説明
- まとめを配布

02 子どもによる健康教室

小学生が
市民に
健康教室を
開催する

- 場所：南地区の方の集まる西條
- 時間:買い物をする前(昼前や夕方)
- 宣伝：憩いの場の温泉やバスに
  ポスターやチラシ

02 子どもによる健康教室

＜効果＞

子ども

- 主体性を尊重する教育の魅力の維持や向上
- 人に教えることで知識が定着
- 自主的に調べ達成感や自信獲得

02 子どもによる健康教室

＜効果＞

高齢者

- 健康寿命が伸びる
- 世代を超えたコミュニティーの形成

02 子どもによる健康教室

検証方法

教室前後の意識の変化調査

- 参加者にアンケートを行い、生活習慣についての意識変化を聞く
- 一年に1回今回と同じアンケートを行い、意識変化を追う
- 子どもが楽しかったかを確認する

長期的な観測

- 高齢者の特定健診受診率や肥満・高血圧が減少しているか調査する
- 高齢者の平均寿命の推移を長期的に調査する

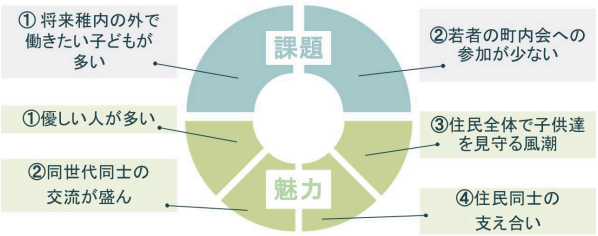
03 稚内の魅力を再発見

＜子どもと高齢者の繋がり＞

私たちが行った現状分析

	子ども(小中高生)	高齢者	子育て世代	働き手
魅力	**①主体性や自主性が育まれる教育環境がある。** **・中学校の生徒会** ・南ちびっこ祭り ・町内会や副港市場のイベント参加 ・南中ソーランの伝統化 ②知識の幅を広げる教育 ・南中学校でのジョブフェア・職業体験の実施 ③一人一人へのサポートが手厚い ・幼稚園,保育園の生徒全員への見回り ・少人数学級のため目が届きやすい **④小中学生が共に活動** **・総合で学んだことを発表** **・通学路の掃除** **・進路が決まった高校生が授業**	**①高齢者同士の繋がりが強い** **・ひかり町内会の夏祭りでの高齢者の活躍** **・近所の間の声かけや会話がある** **・子どもたちを見守る意識がある**	①子育て相談できる行政機関がある ②地域で不登校の生徒へのフォローを行っている安心感 ・つばさ学級 ・SSWの活躍 ・定期的なスタッフ会議の開催 ③市独自の子育て支援 ・出生時のお祝いの品や助成金など ・アンケート実施による支援の質の維持 ・こんにちは赤ちゃん訪問は全家庭訪問 ・待機児童0 **④親同士のコミュニケーションの場** **・子育て支援**	①アルバイトの時給は最低賃金よりも高い ②学生の職業体験を快く受け入れる
課題	**①人口流出** **・高校生の段階で市外へ出ていく人が多い(レベルの高い学校を目指す、やりたい仕事、学びたい学問が市外にある)** ②学力不足	①医療機関の不足 ②交通の便が悪い **③町内会を継ぐ若い人がいないため、地域のつながりの維持に不安** ④配偶者と居住している人が多く、将来的な孤立リスク ⑤生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足	①気候の影響で外遊びが難しい ②不登校の生徒が急増 ・稚内市教育相談所のSSW相談件数内訳の割合で最も高い ・つばさ学級の在籍数が過去最多 ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足 ・喫煙者が多い、受動喫煙のリスク	①職があってもマッチングできていない ②高齢者の課題が直結した将来的な課題となるため、中高年の人口流出がある ③生活習慣に改善の余地 ・食生活 ・運動不足

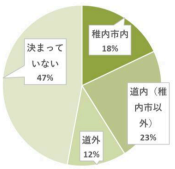
03 稚内の魅力を再発見



03 稚内の魅力を再発見

＜課題①＞ 将来稚内の外で働きたい子どもが多い

港小学校の生徒(5, 6年生)の将来どこで働きたいかのアンケート
計17人



03 稚内の魅力を再発見

＜課題②＞ 若者の町内会への参加が少ない

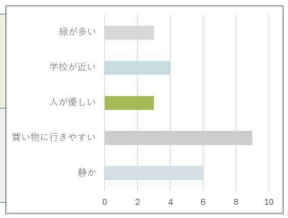
ひかり町内会会長
佐藤忠男様のお話

03 稚内の魅力を再発見

＜魅力＞

①優しい人が多い
→緑町内会回覧板アンケート／
街歩きで応援の言葉／
夏祭りでサービス精神が旺盛

②同世代同士の交流が盛ん
→高齢者同士／子育て世代同士がお祭りでお話している／
小中学生合同で清掃

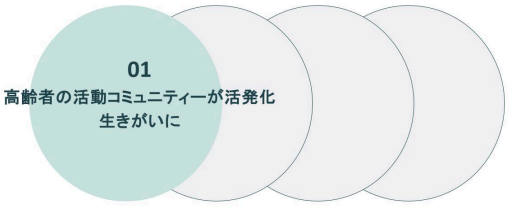


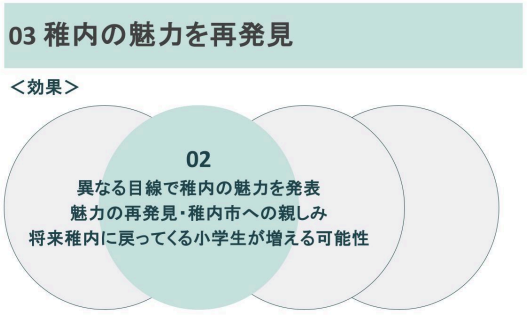
03 稚内の魅力を再発見

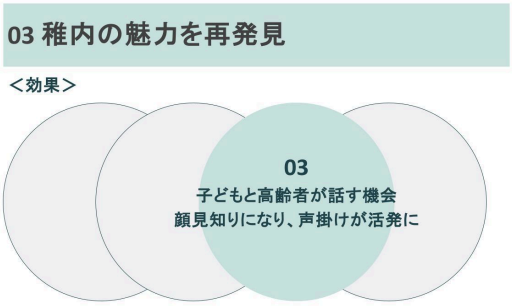
Action plan 高齢者と子どもがそれぞれの視点から稚内の魅力を紹介しあう

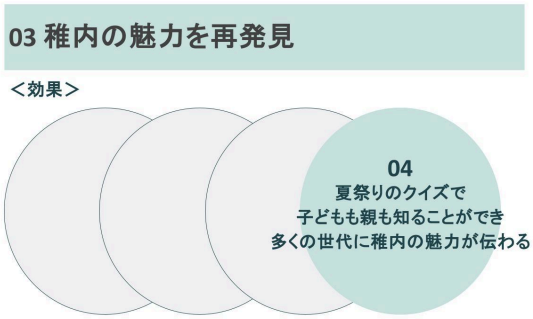
03 稚内の魅力を再発見

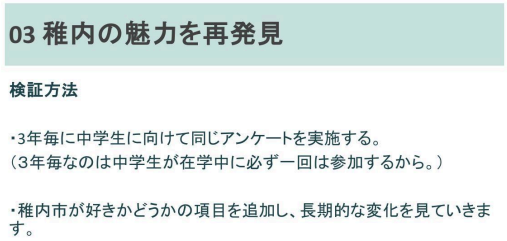
＜効果＞

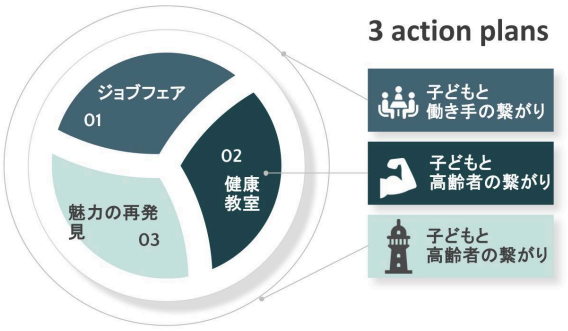












8.今後への課題・さらに調べたかったこと （文責：佐藤磨依）

今回は小学生を対象にアンケート調査を行ったが、より進路を考えている中学生や高校生に対しても将来に関する調査をすることでより若い世代の進路に関する現状を捉えられたのではないかと考えた。また、子育てのしやすい環境を調査していくなかで子育てを実際に行っている方の声を聴くことが出来なかったため、現状の制度や環境に対してどのように感じているのかさらに調査したかった。

町内会の回覧板にアンケート調査の用紙を入れていただくことで稚内で暮らす方の生の声を聴くことが出来たため、今後も暮らしている方の声を多く聞ける機会や手段を検討することが必要である。

9.参加者の学び

看護医療学部4年　佐藤磨依

今回の稚内での実習を通してその地域で暮らしている方から直接話を聞くことの重要性を学んだ。住民の方にお話を聞くことでどのような生活をしているのか、どのような思いを持っているのか自演準備では分からなかったことを知ることが出来た。データだけではなく稚内で暮らしている方からお話を聞くことで知ることの出来る現状があるということを痛感した。これから看護師として働いていく中で実習を通して学んだ対象者の声に耳を傾けるということを生かしていきたい。

医学部1年　出口智子

二週間地域に密着して調査をする中で、地域に実際に足を運び現地の方々の声を聞くことの大切さを学んだ。事前に得たデータから立てた仮説が大きく覆ったり、数字だけでは表せない様々な魅力や地域性に気付かされたりした。調査を重ねれば重ねるほど二週間という期間が短く感じられ、もっと長期的に様々な視点から調査したいと心から思った。今、様々な統計データがどこからでもアクセスできる情報世界に生きているからこそ、実際に現地に行って長期的に地区診断を行うことが強く求められていると思う。私は地域医療に興味がありこのプログラムに参加したが、常に地域の文化的・社会的背景や地域の方の声に重心を置き、多角的に問題解決のできる医療人になっていきたい。

医学部3年　牧野界人
稚内での実習を通じ、現地住民の方々から直接話を伺う機会を得て、資料やデータのみでは決して掴みきれない地域の実情に触れることができた。住民の方々が日々の生活をどのように送り、どのような思いを抱きながら暮らしているのか、そうした具体的な背景は事前の調査では見えてこなかったものであり、貴重な知見を得られたと実感している。
本実習において、実際に足を運び、住民の声に耳を傾けることこそが、地域の現状理解に不可欠であると痛感させられた。今後、医師として臨床に臨む中で、この体験を糧に患者一人ひとりの声に真摯に耳を傾け、目に見えない心情や生活背景に寄り添う姿勢を大切にしていきたいと考える。

看護医療学部3年　木戸なつみ
　地区診断をさせていただくにあたり、恥ずかしながら何も知らないところからのスタートだったため、1からネットで情報を調べ始め、仮説を立案し、最終的にはアクションプランを立てるという一連の流れを学生のうちに経験することができ、貴重な機会となった。2週間の実習を通して、事前調査で5つもの仮説を立案し、ジャンルを絞り過ぎなかったことがアクションプランの立案に功を奏したのではないかと感じた。プランは、世代間のつながりを強調する内容だったが、世代は、いつまでもその世代でいるわけではなく、時が経つに連れて、世代の面子が変化していき、結局は人生を生きていく中ですべての世代を経験する。よって、一つの世代の課題が解決されても、根本的な課題解決には至らないのではないかと考える。そのため、世代間を横断するプランを立てることによって、全世代の課題を解決できるようなアクションプランづくりができたのではと考えている。包括的に地域を捉えたいと考えていたため、仮説を絞りすぎず幅を持たせたことでこのプランにつながったと感じている。実際に現地を訪れると、想定していた仮説との相違を発見しつつ、地域の魅力が同時に見えてきた。地域診断は課題にフォーカスする傾向があるが、強みを捉えそれを活かしていくことの重要性を学ぶことができた。

薬学部薬学科4年　廣瀬莉帆

私は、将来薬系技官として制度面から地域医療を支えられるような人材になりたいと考えており、医療設備が不十分である地域において、薬剤師ができることは何なのか、どのようなことが求められているのか、また実際にどのような取り組みがなされているのかなどを学びたいと思い、今回の実習に参加した。ところが、実際に足を運んでみたところ、薬剤師が稚内市の医療不足の現状の中で力になれている点はかなり少なく、かなり改善の可能性を感じられた。
一方で、制度を動かすということの難しさや、様々な考え方の人とコミュニケーションをとることの難しさについても学ぶことができた。二週間という長い期間、医学部、看護医療学部というこれまでほとんど関わってこなかった学部の友人と過ごし、それぞれの学部がどのような教育を受けているのかということや、医療人としての意識の持ち方に差があることを感じることができた。さらに、様々な方にインタビューをしていく中で、同じ内容の物事であっても、立場の違う方々では評価の仕方が異なる場面もあり、行政を動かすにおいて、正解というものはなく、多くの人がそれぞれにおいて妥協できるものを探すしかないのだということを感じさせられた。また、南稚内中学校が荒れていた歴史の背景はリストラなどによる経

済不況ということから、一つの政策を動かすことで、直接影響を与えられる立場ではない人にも、多大な影響が生じる可能性があるということもわかり、政策運営の難しさを感じさせられた。薬剤師の在り方に問題があったと感じたからといって安易に制度を変えることが正しいことではないということも理解することができた。
実際に薬系技官になるかどうかに限らず、様々な人に寄り添える薬剤師になるためにも、日ごろから多くの人の声や考え方に常に興味を傾け、様々な物事の見方や立場ごとの感じ方を知っていくことが、私という人をより深い人材にするために必要なのだと学ぶことができた。宗谷漁業における過去の経験を活かす力に倣って、今回の稚内市における学びを私の今後の人生に強く活かしていこうと思う。
今回の実習でご協力くださった稚内市の皆様、支えてくださった先生方、ともに考えて協力してくれた班員や実習メンバーに深い感謝を示したい。

医学部4年髙橋伶奈
今回の実習の中で、普段学校で勉強しているだけでは得られない多くの学びを得ることができた。事前に調査した内容と実際に様々な人にインタビューをしたりアンケートをしたりして分かった内容とは、一致するところも相違するところもあり、地域診断において現地での調査というのはとても大事だということを再認識させられた。特に驚いたのは、稚内はホタテの養殖に成功した地域であり、漁業は町の経済を引っ張っていっているという成田功さんのお話であった。事前調査の仮説では、漁業の跡継ぎ不足や衰退について考えていたが、むしろその逆であったという話に驚かされた。このようにたくさんの住民の方に協力をいただき2週間で学んだことを生かして、地域全体を活気づけられるような医師になりたい。

10.謝辞 （文責：佐藤磨依）
この度は2週間にわたる実習にあたり多くの方にご協力いただきまして、深く感謝申し上げます。お忙しい中、皆様にインタビューやアンケートへご協力いただいたおかげで私たちにとって今回の実習が大変貴重な経験となりました。実習を通して学んだことをこれからの学生生活や臨床の場で活かしてまいります。

スケジュールの順にご協力頂いた方のお名前を記載いたします。

宗谷友の会 会長　飯田光様
生活福祉部 主査　佐藤真知子様
生活福祉部 主査　葛西哲也様
ひかり町内会の皆様
宗谷友の会 事務局長　本間正博様
教育相談所の皆様
稚内教育委員会教育部子ども課の皆様
中澤 和一 様
佐藤 忠男 様
横田 耕一 様
クリニックはぐの皆様
南稚内クリニックの皆様
ひかり幼稚園・きらきら保育園の皆様
稚内市立病院の皆様
西條稚内店の皆様
稚内市立南中学校の皆様
北海道稚内高等学校衛生看護科の皆様
成田 功 様
稚内市立稚内港小学校の皆様
飯田 爽 様

稚内市立声問小学校の皆様